2020
SHIZUOKA

静岡県文化プログラム成果報告書
2015-2021

地域とアートが共鳴する

2020
SHIZUOKA

静岡県文化プログラム成果報告書
2015-2021

地域とアートが共鳴する

目次

ごあいさつ …… 4
静岡県文化プログラムの基本方針 …… 6
静岡県文化プログラムの歩み …… 7

成果、レガシー

特別鼎談　静岡県文化プログラムを振り返って …… 8
静岡県文化プログラムの成果 …… 14
アーツカウンシルしずおか …… 22
写真で振り返る文化プログラム …… 24

全国的プログラム

・東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム　ふじのくに野外芸術フェスタ2021静岡
宮城聰演出 SPAC公演『アンティゴネ』 …… 30

県域プログラム

県域プログラム …… 33
・「手の愉悦～革新する工芸」展
関連企画「先端技術展ー技人たちの物語」 …… 34
・静岡県郷土唱歌を歌おう …… 36
・磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙
舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」 …… 38
・ふじのくに伝統芸能フェスティバル …… 40
・忠臣蔵2021 …… 42
・ふじのくに各流大茶会 …… 44

地域密着プログラム

地域密着プログラムの支援制度 …… 46
プログラム・コーディネーター紹介 …… 48
地域密着プログラムを対象とした試行的評価 …… 49
2015年 文化資源調査 …… 50
地域密着プログラム一覧 …… 51
1　Scale Laboratory …… 52
2　特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ …… 53
3　富士の山ビエンナーレ実行委員会 …… 54
4　浜松市根洗学園（社会福祉法人ひかりの園） …… 55
5　特定非営利活動法人日本地域部活動文化部推進本部 …… 56
6　特定非営利活動法人ACT.JT静岡支部 …… 57

7　特定非営利活動法人クロスメディアしまだ …… 58
8　かけがわ茶エンナーレ実行委員会 …… 59
9　一般社団法人Meets by Arts …… 60
10　企業組合くれば …… 61
11　熱海未来音楽祭 …… 62
12　一般社団法人熱海怪獣映画祭 …… 63
13　しゃぎりフェスティバル実行委員会 …… 64
14　静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター …… 65
15　松崎町のうたを育てる会 …… 66
16　川根本町伝統文化保存会 …… 67
17　原泉アートプロジェクト …… 68
18　ふじのくにラボ …… 69
19　KURURA 制作実行委員会 …… 70
20　Usamiフェス実行委員会 …… 71
21　Cliff Edge Project …… 72
22　こころのまま …… 73
23　焼市 …… 74
24　藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会 …… 75
25　KAWANE夏祭り@BIGNATURE実行委員会 …… 76
26　劇団静岡県史 …… 77
27　御殿場市東山旧岸邸 …… 78
28　特定非営利活動法人熱海ふれあい作業所 …… 79
29　松崎町「絲」concept …… 80
30　富士山舞台芸術楽団 …… 81
31　株式会社SBSプロモーション …… 82
32　登呂会議 …… 83
33　株式会社玉川きこり社 …… 84
34　特定非営利活動法人伊豆学研究会 …… 85
35　シズオカオーケストラ …… 86

その他活動状況・資料編

文化プログラム認証制度 …… 88
東京2020オリンピック・パラリンピックと静岡県文化プログラムの連携 …… 89
広報活動 …… 90
推進体制 …… 100
年表 …… 101
新聞記事 …… 102
予算 …… 108

ごあいさつ

オリンピック憲章には、「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ生き方の想像を探求するもの」と謳われ、開催都市が「文化プログラム」を開催するよう定められています。

2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックでは、開催都市ロンドンだけではなく、イギリス全土で文化プログラムが展開され、大きな成果を上げたと言われています。東京2020オリンピック・パラリンピックについても、日本全国で「文化プログラム」を展開する方針が採択されたことを受け、2016年5月に静岡県文化プログラム推進委員会が設置されました。「地域とアートが共鳴する」をテーマに掲げ、今世界的に評価が高まっている静岡県の舞台芸術SPACによる「全国的プログラム」、推進委員会と県内の文化団体が連携して開催する「県域プログラム」、市町や団体等による「地域密着プログラム」の三つのカテゴリーで構成され、独自の認証制度を活用し、のべ1300以上のプログラムを認証し、県内各地での展開を推進してまいりました。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、プログラムの延期や縮小を余儀なくされましたが、こうした中にあっても、文化芸術の灯を消してはならないと実施団体が様々な工夫を重ね、また経済界をはじめとする多くの皆様の協力を得て、無事プログラムを実施できたことを改めて感謝しております。そしてこの後「アーツカウンシルしずおか」にレガシーとして引き継がれることになったことは静岡県の文化の発展に大きな成果となったことを実感しております。

この報告書では、5年余りにわたり展開された静岡県文化プログラムを振り返り、その実績と成果をまとめました。文化プログラムを契機に、今後静岡県の文化芸術がより一層豊かに花開くことを心より願っております。

結びに静岡県文化プログラムの推進にご協力頂きました全ての皆様に心より敬意と感謝を表しましてご挨拶とさせて頂きます。

静岡県文化プログラム推進委員会　委員長　鈴木 壽美子

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は、世界中に喜びと感動をもたらしました。本県も自転車競技の会場地として「スポーツの祭典」を盛り上げただけでなく、多くの皆様の力を結集し、県内各地で展開した静岡県文化プログラムは、「文化の祭典」として大きな成果を収めました。

2014年秋の全国知事会議での提言を踏まえ、本県は、2016年度に全国に先駆けて静岡県文化プログラム推進委員会を設置し、翌2017年度から本県の豊かな自然・歴史・文化等を生かした多彩なプログラムを展開してまいりました。

文化芸術団体が主体となり、本県ならではの魅力に溢れたプログラムが創造され、その作品に触れて文化芸術の素晴らしさを体感する機会が創出されたことは誠に喜ばしいことであります。

また、推進委員会による支援を通じ、文化芸術をまちづくりや観光、国際交流、福祉、教育、産業など社会の様々な分野と結び付け、地域の魅力の発信や社会課題への対応を目指した先駆的な取組が次々と生まれたことは、本県の文化振興の新たな道筋をひらくものとして、大変意義深いものであります。

静岡県文化プログラムを通じて培った支援の仕組みは、2021年１月に設置した「アーツカウンシルしずおか」に継承し、誰もが持つ創造力が活かされる道をひらき、様々な分野でイノベーションが生まれる創造的な地域づくりを進めることで、世界に輝く「ふじのくに芸術回廊」の実現を目指してまいります。

結びに、本プログラム推進委員会の鈴木委員長をはじめ、静岡県文化プログラムという文化芸術の未来を創る取組に、多大なる御尽力をいただいた全ての皆様に深く感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

静岡県知事 川勝 平太

静岡県文化プログラムの基本方針

テーマ 静岡県で展開される文化プログラム全体に共通する考え方を表しています。

地域とアートが共鳴する

目 的 文化プログラムの推進を通じて、以下の実現を目指します。

- 県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見えるかたちで示します
- 他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます
- すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します
- 文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

取組のポイント 以下の点を重視して文化プログラムを推進します。

- 多様性：地域、社会、時代、分野、国籍等における多様性を生かした展開
- 多極性：大規模・一極集中的なプログラムではない、県内各地の潜在的文化資源を生かした多極的な展開
- 持続性：一過性のイベントではない、2020 年以降を視野に入れた持続的な展開

取組目標 以下の目標に向けてプログラムを推進します。

1 人材の活用・育成に関すること
- 実践的専門家による文化・芸術活動支援
- 実践的専門家による文化・芸術活動を活用した社会的課題対応への支援
- 実践的専門家やプログラムの担い手の育成

2 仕組みに関すること
- 文化・芸術活動支援、文化・芸術活動の社会的課題への対応の基盤となるネットワーク形成
- 文化・芸術の振興と地域協働のための新たな専門組織（例：地域版アーツカウンシル）の設置・運営

3 人材と仕組みの応用に関すること
- 県内各地における文化・芸術活動を応用した地域・社会課題解決への取組
- 伝統的文化、伝統的産業の掘り起こし、継承と今日的活用
- 文化・芸術とスポーツの連携による新たな取組の提案
- 交流人口の拡大による、人口減少等の課題への対応

静岡県文化プログラムの歩み

2013年9月	東京が2020年オリンピック・パラリンピック夏季大会の開催都市に決定
2014年11月	川勝知事、全国知事会で2020年文化プログラム全国展開提案
2015年11月	文化プログラム「静岡県準備委員会」発足
2016年5月	静岡県文化プログラム推進委員会発足
2020年３月	新型コロナウイルス感染症の影響により IOCが東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の １年延期を決定 多くの文化プログラムが中止・延期を余儀なくされる
2020年４月	緊急事態宣言（4月16日から5月14日）
2020年10月	静岡県文化プログラムリスタートセレモニー
2021年1月	「アーツカウンシルしずおか」設置
2021年7月	第32回オリンピック競技大会開会（7月23日～8月8日） 静岡県内では自転車競技（ロード、マウンテンバイク、トラック）を開催
2021年8月	まん延防止等重点措置（8月8日～8月19日） 東京2020パラリンピック競技大会開会（8月24日～9月5日） 静岡県内では自転車競技（ロード、トラック）を開催 緊急事態宣言（8月20日～9月30日）
2021年9月	静岡県文化プログラム　終了

静岡県文化プログラムを展開

特別鼎談

静岡県文化プログラムを振り返って

東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせ、全国をリードする形で実施された「静岡県文化プログラム」。そして、そのレガシーとして新設された「アーツカウンシルしずおか」。それぞれの設立と運営に深く関わる、川勝平太 静岡県知事、静岡県文化プログラム推進委員会 鈴木壽美子委員長、アーツカウンシルしずおか 加藤種男アーツカウンシル長に、その成果と今後の取り組みについて語っていただいた。

聞き手：静岡新聞社　文化生活部長兼論説委員 橋爪充氏

「静岡県文化プログラム」の意義と成果

橋爪　世界中に感動を与えた東京オリンピック・パラリンピック競技大会が 9 月 5 日に閉会しました。大会の開催に合わせ、静岡県では全国に先駆けて「文化プログラム」に取り組んできましたが、この「文化プログラム」のコンセプトや内容とはどういうものだったのでしょうか。

知事　2012 年のロンドン大会では、文化プログラムが大成功を収めました。

通常、我々はオリンピックをスポーツの祭典だと捉えますが、そうではなくて、“Fundamental Principle of Olympism” には、オリンピックというのは生き方の哲学であり、スポーツと文化、この両方の祭典であると謳われています。それを受けて、2014 年 11 月の全国知事会でオリンピックの話が出たときに、私はイギリスの例に倣ったらどうかと提案しました。北は北海道から南は沖縄まで、日本全体を Exhibit(展示)する文化プログラムを実施したらどうかと。それがきっかけです。その後、これは国の方針にもなりました。静岡県では 2016 年 5 月に静岡県文化プログラム推進委員会という組織を作り、鈴木壽美子さんに委員長になっていただきました。さらに加藤種男さんという逸材が県のお手伝いをしてくださることになり、「静岡県文化プログラム」が走り出したわけです。これは結果的に大成功だったと思います。この厳しいコロナ禍の状況で、よくここまで志を曲げず、人の心を励まし、勇気を与えることが大切だと信じて「文化プログラム」を推進してくださった。お二人には、感謝の言葉もないくらいです。ありがとうございました。

宮城聰演出 SPAC公演『アンティゴネ』 ©Y.Inokuma

橋爪　静岡県文化プログラム推進委員会のテーマ、プログラムとはどういったものだったのでしょうか。

鈴木　静岡県文化プログラム推進委員会では、東京オリンピック・パラリンピックに向けて“地域とアートが共鳴する”というテーマを掲げ、プログラムを三つのカテゴリーに分けました。一つは今や世界的に評価されている舞台芸術である SPAC による「全国的プログラム」。それから推進委員会と県内の文化団体が連携して開催する「県域プログラム」。さらに市町や各種団体等による「地域密着プログラム」。これは静岡県独自の認証制度を設けまして、その活用を広く呼びかけました。その結果、延べ 1300 件以上のプログラムを認証し、県内各地で多

左から　川勝 平太 静岡県知事、静岡県文化プログラム推進委員会 鈴木 壽美子委員長、アーツカウンシルしずおか 加藤 種男アーツカウンシル長

くの文化プログラムが展開されました。

橋爪　舞台芸術あり美術あり、それから文学や音楽もありますが、知事がこの中で特に印象に残ったものは？

知事　まず「全国的プログラム」では SPAC の『アンティゴネ』は素晴らしいものでした。日本の心がしっかり入っています。ギリシャ悲劇をこのように解釈した宮城聰さんはやはりすごいですね。他には磐田市の佐藤典子さんという素晴らしい舞踊家の先生が、アジアの舞踊と音楽に詩を入れ込んだ『ララバイ』という公演を指導されました。会場が興奮と感動に包まれて非常に美しいものでした。「地域密着プログラム」としては掛川のお茶を軸にした『かけがわ茶エンナーレ』が印象に残っています。

マリナートで上演された『ふじのくにものがたり』も素晴らしかったです。かぐや姫が、霊峰に帰るという大岡淳さんプロデュースの作品で、演劇と音楽がダンスと一体となり、フィナーレを飾るにふさわしいものだと思いました。まさに『ふじのくにものがたり』として、永遠に語り継がれるような、そんなプログラムだったと思います。

延べ 1300 件以上の文化プログラムを認証

橋爪　こうしたプログラムの実施によって得られた成果について、どのようにお考えですか。

鈴木　「地域密着プログラム」では『富士の山ビエンナーレ』や、大井川鐵道の『無人駅の芸術祭』もとてもユニークで素晴らしかったと思います。また『かけがわ茶エンナーレ』は地元の皆さんの協力と熱意で、町中で応援しているということが、ひしひしと伝わってきました。どこへ行っても家をオープンにして、「お茶を飲んでいってください、見ていってください」という感じで、“地域とアートが共鳴する” ということが具現化されていると嬉しく思いました。

橋爪　「文化プログラム」は地域の人の掘り起こしやネットワークにも影響を与えたと思いますが、文化芸術の社会的価値というものをはっきり世に示すという意味でも、これは役割として大きかったのでは？

鈴木　「県域プログラム」では、推進委員会が主になっていろいろなところに呼びかけて、六つのプログラム

を作りました。その中の一つが『手の愉悦〜革新する工芸』展です。これは伝統工芸作家と学生とがコラボをするという企画ですが、これもコロナで延期になっていたところ、去年の10月にリスタートを飾ることができ、本当に涙が出るほどの嬉しい再開となりました。学生たちが一生懸命手伝ってくれたということが印象に残っています。

それから先ほどの『ふじのくにものがたり』ですが、これも延期になった間にアーティストやプロデューサーから毎日のように「どうなるのですか」「いつできるのですか」と問われて。私は、どんなに延期になってもこれは絶対にやりますからと言って一生懸命励ましてここまでやってきました。皆さん大変だったと思いますが、最終的に永久に残るであろう舞台になりました。本当に画期的な作品だったと思います。

また今回厳しい状況の中、協力をお願いした経済界の方々には本当にお世話になりました。予算面だけではなく、こういう舞台を是非会場で見ていただきたいと思いましたが、大勢の方に見ていただき本当にうれしく思いました。今後の静岡県の文化の発展につながることと願っております。

また「文化プログラム」が無事に展開されたことだけではなく、教育や福祉や企業など社会の様々な分野とつながりができたという意味でも大変意義のあるプログラムだったと思います。

橋爪　加藤アーツカウンシル長は長年企業のメセナ活動に携わり、東京都、横浜市などにおいても活躍の実績

芸術文化は当たり前過ぎるくらい重要なもの

があった中で、2018年の7月から、こちらのプログラムに対してチーフ・オペレーティング・ディレクターとして関わっておられます。その立場から、静岡県の「文化プログラム」とはどのようなものだったかお聞かせください。

加藤　プログラムの数がとても多いということが素晴らしいですね。これだけ全県くまなく、そして幅広いテーマで芸術文化活動を展開している県は、他にないかもしれません。また、質的にも静岡県が全国に誇れるプログラムはいくつかあるのですが、その一つがSPACですね。SPACは国際的な評価を受け、2017年にアヴィニョンの演劇祭のメイン会場である法王庁中庭でオープニングを飾ることができました。その国際的な評価・水準をどのように担保しているかというと、実はSPACは劇団でもあるのですが、専用の劇場を持っています。つまり、劇場と劇団が一体化している状態ですね。これは世界の演劇界では普通のことなのですが、日本では珍しい。民間では、例えば宝塚や歌舞伎のような劇場の例はありますが、公立の文化施設と劇団が一体化している例というのはほとんどありません。企業活動に例えるなら、自社製品を自社の工場で作るという当たり前のことが一般にはあまりされていない。それを静岡県は早くからSPACという形で推進してこられているわけです。ここに新たに「文化プログラム」という形で様々な県民主体の活動も一緒にやっていこうという展開をされたのが素晴らしいですね。これだけの活動を展開しておられるところに、ささやかながら末席に加えていただき、非常に誇らしく思っております。

コロナ禍で再発見もあった「文化プログラム」

橋爪　新型コロナウイルス感染症の影響により、延期ないしは中止というようなプログラムもありました。コロナ禍において文化芸術というのはどのような役割があったのでしょうか。

知事　文化というものは特別なものではなく、基本的には“Way of Life”、生き方や生活様式なのです。「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」といえばアメリカの生活様式。アメリカの生活様式に憧れるから、皆さんア

舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」

メリカに行かれるわけです。文化の一番の基礎は、実は生活だと思います。東京の生活と静岡の生活は違う。静岡には「静岡ウェイ・オブ・ライフ」がある。コロナによって生活が制限されましたが、巣ごもりで自分の生き方を表現できないときでも、芸術家は心の形を音楽で表したり、演劇にしたり、あるいはポエムにしたり、舞踊にしたり――芸術によって、人々は芸術家の心と共鳴できる。共鳴することによって、人の心は通い合います。コロナ禍という厳しい生活を強いられる中で、心の飢えを癒す働きが、芸術文化にある。芸術や文化というのは、人間が生きる上で当たり前過ぎるくらい重要なものだと思っております。

橋爪　県として困窮するアーティストたちへの支援を制度として打ち出していますが、そのあたりについてお聞かせください。

知事　“社会がアーティストを、アーティストが社会を”という双方向のやりとりが大切です。アーティストによって日常生活をされている方が癒やされる。また、その人たちがアーティストを支える。この双方向性のパイプをなるべく大きくする、というのが我々の役割ではないかと思っております。

橋爪　その考えのもとに「エールアートプロジェクト」という施策を立ち上げ、新しい生活様式に即した新しい芸術の表現というものを支援されてこられたわけですね。プロジェクトについて詳しくお聞かせください。

知事　例えばイギリスのコッツウォルズに行くと、そこにあるのは生活だけです。その暮らし方に人は憧れて訪れます。また迎える側では、生活している場所や生活の仕方が人を惹きつけることに誇りをもって生きています。芸術家は、そういう基礎的な文化のいわば花の部分ですね。ところが茎の部分、根っこの部分、土の部分というものがあってはじめて花が咲くわけです。支

える人たちがいないと花は咲きません。その両方が必要だということで、このプロジェクトを立ち上げたのです。

橋爪　コロナ禍で「文化プログラム」にも大きな影響、困難があったかと思いますが、鈴木委員長はどのように感じておられますか。

鈴木　2020年の春から、ほとんどのプログラムが中止・延期・縮小され、文化の火が消えるというのは、こういうことなんだと身に染みて感じました。現場の人たちは本当に生活も大変でしたが、それでも気持ちだけは持ち続けましょう、ということで、皆さんと励まし合いながら続けてきました。一番大変だったのは合唱です。去年の春に『静岡県郷土唱歌を歌おう』という大きな催しをやるつもりで県内の小学生の皆さんに声をかけていたのですが、その練習ができないという物理的な状況になり、しかも合唱が一番いけないという状況でした。大幅に縮小することになりましたが、それでも色々な方の協力もあって開催することができました。また、『ふじのくにものがたり』の中でも合唱の部分だけはどうしても舞台の上に乗せることができず、舞台を横に見ながら袖から合わせて歌うという非常に難しいことをしていただきました。それから演劇の方たちにも実際には言葉を発しないであらかじめ録音した音声を流したり、踊るときもディスタンスをとりながら踊るなど、工夫をしていただきました。それでもそういうことができたということは、新しい演出方法ができたということで、画期的なことであったと思います。途中で挫折しながらも、方法を変え、皆さんが成功に向けて一生懸命頑張って一つの舞台を作り上げたこと。気持ちがあればできるということを私達は

UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川

本当に実感しました。

橋爪　加藤アーツカウンシル長はコロナ禍において、この「文化プログラム」の意義や果たした役割についてどのように感じておられますか。

加藤　皆さん大変なご苦労があっていろいろな取り組みをされてきたわけですが、一方で、例えば『ふじのくに各流大茶会』というものが開催されましたが、お茶の世界を見ていると、必ずしも大人数ではなく、極論すれば二人でスタートできるわけです。つまり、コミュニケーションが取れる最小限の姿を芸術的表現にしたものというのは、コロナ禍でもできるわけです。私も大茶会を拝見しましたが、普段見られないようなお茶碗など非常に斬新なものが登場し、本当に息をのむ思いでした。

　結局、コロナ禍で我々が再確認したのは、芸術文化というのは、必ずしもイベントではないということです。例えばお祭りでは神輿や山車、あるいは踊りといったところに着目されますが、実は一日だけのイベントのように見えて、一年中催事があるわけです。そうした意味で、芸術文化の活動というのは一年中やっていくもの、知事の言葉を拝借すると、まさに生活様式そのものです。その観点から言えば、コロナ禍でもいろいろな工夫の余地はあり、むしろ逆に考えさせられる機会にもなったような気がします。

レガシーとしての「アーツカウンシルしずおか」設立へ

橋爪　「文化プログラム」のレガシーとして「アーツカウンシルしずおか」が2021年の1月に設置されましたが、この組織のコンセプトや役割とは？

加藤　今まで芸術文化の振興の仕方といえば、文化施設において県民に広く公演や展示を提供し、鑑賞していた

だくことによって、県民の文化度を高めていくという活動が主体でした。これが今後一切なくなるというわけではありませんが、それと連動しつつ、むしろ県民自身が主人公になる主体的な創造活動をどのように応援していくかということが、これからの課題になります。そこで、例えば福祉や教育、場合によっては観光まちづくり、そうした多様な活動を応援していくために、「アーツカウンシルしずおか」が設置されました。最終的なゴールは全ての県民が表現者になるか、少なくとも創造的になる、といったことを目指すべきだと考えています。

興味深いのは、例えば『無人駅の芸術祭』。これはまちづくり団体の方たちが中心になっています。『富士の山ビエンナーレ』は企業の方を含めた地元有志が中心になって運営しています。『かけがわ茶エンナーレ』はもちろん市民と一緒なのですが、掛川市長が実行委員長ですからそういう意味では行政がイニシアチブをとっています。このように主体が様々あることによって、例えば大井川鐵道という産業、『富士の山ビエンナーレ』でいうと浅間大社の湧玉池の湧水、『かけがわ茶エンナーレ』でいえばもちろんお茶。さらには今回会場になった日坂の宿。東海道五十三次の宿場町のようなものの価値を、もう一度、我々が再発見・再確認して、そのような資源をどうやって生かしていくかということ、これが実は文化のプログラムで非常に重要なわけです。単に文化のことだけやるわけではなく、そこに着目して地域社会そのものを総合的に活性化していくというのが私どもの目的です。そういう意味で「アーツカウンシル」が、今後頑張っていこうと思います。

目標は全ての県民が表現者になること

橋爪　「文化プログラム」で培った財産が「アーツカウンシル」に引き継がれようとしていますが、その礎を作られた当事者として、鈴木委員長が「アーツカウンシル」にかける期待は？

鈴木　静岡県文化プログラム推進委員会を立ち上げたときの発会式で、知事が、「オリンピックが終着点ではない。その後に続くことが大事だ」とはっきりおっしゃったので、私達もそのつもりで文化の土壌を掘り起こし、耕し、ここまで5年間やってきました。この後、そこに芽が出て花が咲くというところまでを、県民の皆さんが一緒になって作り上げていくということが大事だと思います。そのためのネットワーク作りや人材育成を「アーツカウンシル」に期待したいところです。

橋爪充氏

橋爪　最後に、知事として「アーツカウンシル」に期待することは？

知事　これは「文化プログラム」のレガシーなのです。初代アーツカウンシル長がおっしゃった「全ての人が表現者である」というのは素晴らしい。特別なものではなく全ての人、というのが大切。一人一人がライフスタイルを持っている表現者というわけです。360万人の県民の生き方の全体が「静岡ウェイ・オブ・ライフ」、「ふじのくにウェイ・オブ・ライフ」だと。それが自信になったら素晴らしいと思います。

オリンピック・パラリンピックの成功を糧にして、「アーツカウンシルしずおか」において、もう一度「静岡ウェイ・オブ・ライフ」を発掘していく。これは『第5期 ふじのくに文化振興基本計画』の核心にもなります。加藤さんを全面的に信頼申し上げ、県民と手を携えてやっていただき、行政はその下支えをするという形にしたいと思っております。

静岡県文化プログラムの成果

はじめに

文化・芸術事業を対象とする評価は、創造性を評価する以上、事前にその事業効果・成果を一概に予期できないため、生み出している価値を把握しにくい等の課題から、通常の事業に対して、定量的な指標設定が困難であり、評価自体が非常に難しいと言われてきた。

「静岡県文化プログラム」は、「東京2020オリンピック・パラリンピック」をエポックとした日本で初めてとも言える試みであり、評価についても試行的に取組み、2021年3月に「2019年度　地域密着プログラムを対象とした試行的評価」を行っている。

今回、同プログラムの完了に伴う報告書の作成にあたり、前記の試行的評価を踏まえ、同プログラムの四つの目的の達成を軸に、さらには、静岡県の文化･芸術の振興や地域の活性化等に貢献したかを検証することとする。

静岡県文化プログラムの目的

静岡県では、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを実施するため、2015年度に準備委員会を設け、県内の文化的資源を抽出し、より多角的なプログラムの構成に向けて「オリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査」を実施した。さらに、2016年度に静岡県文化プログラム推進委員会を設置して以降、プログラムの具体的な目的として以下の４点を掲げ、五年間にわたり、一千件を超える文化プログラムを展開した。

目的

◆県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示します

◆他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます

◆すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します

◆文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

なお、文化プログラムは、推進委員会で財政的支援を行うプログラムとして、東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムとして行う全国的プログラム、県内文化団体と協働して実施した県域プログラム、地域団体等が実施する地域密着プログラムの三つのカテゴリーと、財政的支援を伴わないプログラムから構成された。

全国的プログラム

全国的プログラムとして、ふじのくに野外芸術フェスタ2021静岡　宮城聰演出SPAC公演『アンティゴネ』を開催した。SPACの『アンティゴネ』は、2017年に、世界最高峰の演劇の祭典「アヴィニョン演劇祭」から招聘を受け、そのメイン会場である「アヴィニョン法王庁中庭」で演劇祭のオープニングを飾った作品である。

ふじのくに野外芸術フェスタ2021静岡 宮城聰演出SPAC公演『アンティゴネ』©Y.Inokuma

今回は、徳川家康が大御所時代を過ごした駿府城跡にある駿府城公園で新緑の季節に凱旋公演となっただけでなく、その約2ヶ月後、同じ場所でオリンピックの聖火リレーセレブレーションが開催されたことを思えば、コロナ禍で開催された東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた大いなる一歩であったのではないだろうか。

県域プログラム

県域プログラムは、2020年以降六つのプログラムを開催した。2020年前半は新型コロナウイルス感染症の拡大により多くのプログラムが中止・延期されるなか、10月9日に感染が一時的に下火となったタイミングを捉え、プログラムを再編成するとともに、でき得る感染対策を施すことで、文化プログラムの再開(リスタート)を宣言し、静岡文化芸術大学と共催で「手の愉悦〜革新する工芸」展を開催した。このプログラムは、「ものづくり県」である静岡県にとって、今に続く先端技術のもととなったのは「手の技」であることから、伝統的技法と現代感覚の融合を試みている工芸作家の作品を展示したものである。また、その後12月に開催した、県内企業の優れた技術を紹介した「先端技術展」と合わせて、産業の持つ創造性や芸術性を新たに紹介することができた。

また、2021年3月に静岡交響楽団、音楽青葉会・静岡児童合唱団及び静岡県文化財団で構成する実行委員会と共催で開催した「静岡県郷土唱歌を歌おう」では、昭和11年発行の「静岡県郷土唱歌」に掲載された県内各地域の名所旧跡や歴史を謳った数々の唱歌を、新たな編曲のもとオーケストラと県民公募の合唱で綴ったものである。埋もれつつあった唱歌という文化遺産を、もう一度、県民の財産として再認識する機会となったばかりか、合唱というコロナ感染リスクが高いジャンルにおいても、適切な対策をとることで公演が可能となることを証明できたプログラムであった。

2021年5月23日に、静岡県現代舞踊協会を中心とした実行委員会と共催で開催した「舞踊と音楽と演劇の祭

「手の愉悦～革新する工芸」展

先端技術展～技人たちの物語

静岡県郷土唱歌を歌おう

忠臣蔵2021

典『ふじのくにものがたり』では、第一部「ふるさとの心を今に･･･静岡県ゆかりの詩人・作曲家の作品を踊る」、第二部「舞踊音楽劇　かぐや姫、霊峰に帰る」の二部構成で、大柴拓磨、大前光市らをゲストダンサーに迎え、SPAC 俳優・宮城嶋遥加、作曲家・渡会美帆と県内演奏家によるアンサンブル「帆楽伶奏団」、また、友情出演として音楽青葉会・静岡児童合唱団が豪華絢爛な絵巻を舞台上で繰り広げた。郷土に言い伝えられてきた「かぐや姫伝説」等をテーマに、静岡県を代表する舞台芸術家がコラボし、まさに静岡県文化プログラムにふさわしい企画となった。また、舞台上の演者が、録音された俳優の声に合せて動く他、合唱は舞台上ではなく、舞台袖で行う等、コロナ禍での公演の手法を提示したプログラムでもあった。

6 月 5 日、6 日に開催された『忠臣蔵 2021』は、世界で高い評価を受けている劇団 SPAC（公益財団法人静岡県舞台芸術センター）と共催で実施したものである。平田オリザの台本・宮城聰の演出で、1999 年にシアター・オリンピックスで初演した作品を、一般公募の参加者と SPAC 俳優ほか総勢 54 名が、静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」によみがえらせた。コロナ禍での稽古・公演となったが、感染防止策を演出の一部に取り入れつつ出演者 1 人 1 人の葛藤や成長を描いた舞台は、2 公演とも満席となった。

6 月 6 日に開催された「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」は、静岡県文化財団と共催したものである。静岡県は、古くから東海道や海路により都と東国を結ぶ要衝に位置するとともに、南アルプス等の山岳地帯を有することから多彩な伝統芸能が継承されてきた。伝統芸能は貴重な地域の文化資源であり、各地の継承団体が一同に会したことは、それぞれの工夫や努力を共有することができたとともに、コロナ禍における今後の継承を考える絶好の機会を提供することができた。

6 月 10 日から四日間にわたって開催された「ふじのくに各流大茶会」は、静岡県茶道連盟を中心とする実行委員会と共催で開催したものである。言うまでもなく静岡県は全国一の茶所であり、茶を日本に伝えたとされる聖

舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」

ふじのくに伝統芸能フェスティバル

ふじのくに各流大茶会

一国師のふるさとでもある。このプログラムは、日頃別々に茶会を開催している抹茶・煎茶の各流派が一堂に会し、小堀遠州設計の茶室・庭園を復元した「ふじのくに茶の都ミュージアム」で本席・野点・立礼の 3 席を担当し催した大茶会である。オリンピック開幕直前の時期に、まさに「茶の都」静岡ならではのプログラムとなった。

以上六つのプログラムは、県内の各文化団体を核として、様々な分野が協働するモデルケースとなったことに加え、県内の多彩な潜在的文化資源を目に見える形で具現化できたと考えられる。

地域密着プログラム

地域密着プログラムについては、財政的支援を行うとともに、推進委員会所属のプログラム・コーディネーターが企画段階から該当プログラムに関わり合い、話し合うなかで助言、提案などを行ういわゆる伴走型支援を行ってきた。

支援を申請する団体に対しては、申請年度の事業目標に限らず数年後までの事業ビジョンの記述を依頼し、審査に当たっても中長期的な観点から事業の継続性・発展性、波及効果等を検討した上で採択している。2017 年度から 2020 年度の間、静岡県内の 33 の団体に対し延べ 70 事業の支援を行った。公募の際に、オリンピック・パラリンピックに向けた祝祭性の高い「文化芸術振興事業」と文化の力を地域や社会課題の対応に活用する「地域・社会課題対応型事業」の二つの枠を設け、案件の特徴に合わせて支援を行っている。

地域密着プログラムの特徴の一つは、単年度の支援プログラムでありながら、オリンピック年である 2020 年を一つの目途に、開始当初から複数年度にまたぐ支援を想定していたところにある。その背景には、文化・芸術事業においては、地域で「芽」が出るまでそれなりに時間がかかるということを前提に、先駆性の高い事業でなおかつポテンシャルが高ければ息長く支えていこうという意図がある。今回のふりかえりにあたって

は、文化プログラムの目的に沿って検証した。

①県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示す。

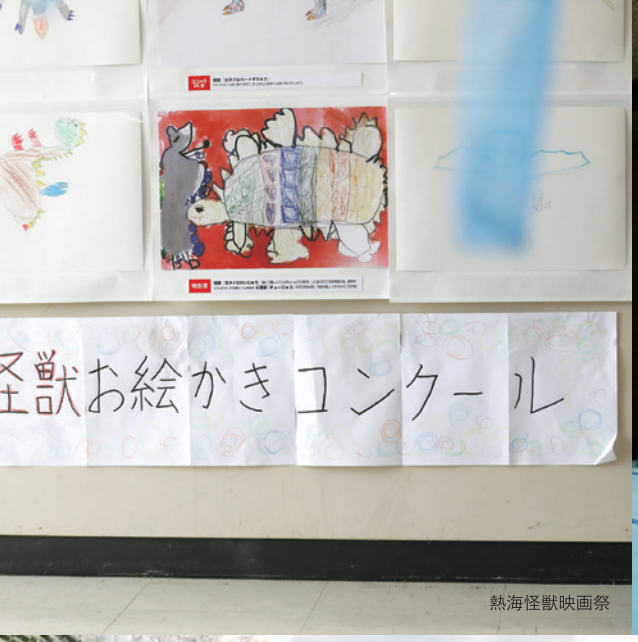
潜在的な文化資源等を顕在化することは、地域の文化ポテンシャルを向上させるとともに、今後のアートプロジェクトの多様性や発展性につながるものと考えられる。

地域密着プログラムの中で、この目的を達成した例として、まず「富士の山ビエンナーレ」が挙げられる。このプログラムは、富士市・富士宮市・静岡市の三市にまたがる広域的な芸術祭であり、富士山の景観や、江戸期の建築である小休本陣や明治期の五十嵐邸などの文化財建築という地域の文化資源を現代アートと融合させ展開したものである。プログラムの中心人物は、地域の企業家であり、多くのサポーターが支えている点からも地域の隠れた人材が顕在化したものと言えよう。

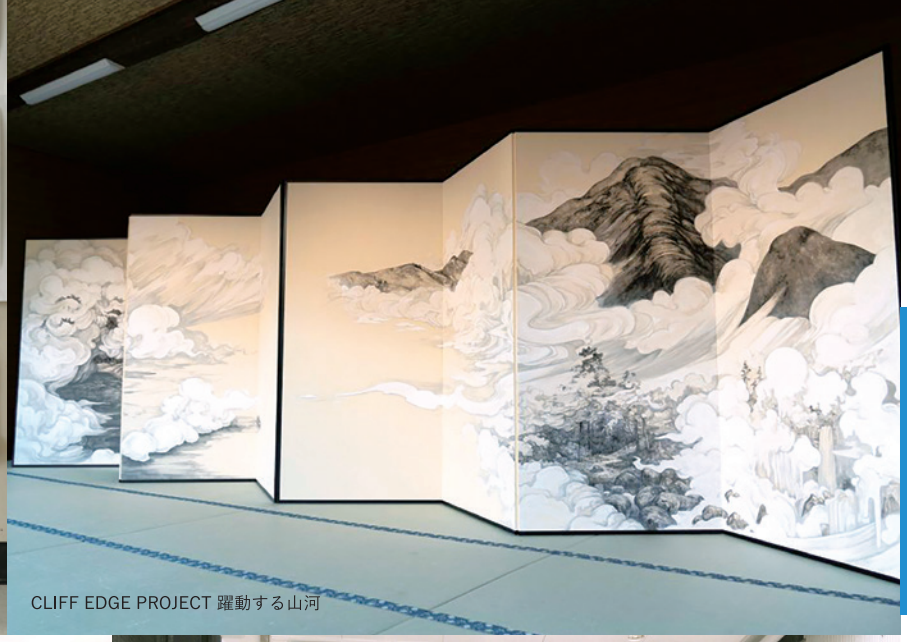
「熱海怪獣映画祭」は、日本の現代文化とも言える怪獣映画に特化した映画祭であるが、熱海という土地柄、別荘住まいの文化人材と地域活性化を考える地元の人材が協働することで、地元商店街を舞台にした「あたみ怪獣まち歩き」や「新怪獣お絵かきコンクール」など映画祭の枠を超えたプログラムとして成功を生んだ。

「CLIFF EDGE PROJECT 躍動する山河」は中伊豆地域を襲った縄文時代の噴火から狩野川台風までの災害という歴史的事実と、そのような自然の力に対する人の祈りをテーマに、縄文時代後期の遺跡や中世から伝わる神社などの文化財を舞台に現代アートを展開したものである。

「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」では、アーティストが現地に数ヶ月滞在し作品制作にあたり、そこに暮らす人々の存在こそが地域資源、すなわち「地域を支える妖精的存在」として価値を見出し、光を当てようとする作品が多く生まれたことも大きな成果と言える。アーティストと地域との交流が生まれただけでなく、交流した「妖精たち（地元の人々）」がボランティアとして、来訪者に湯茶のサービスや、地域・作品の説明



熱海怪獣映画祭


CLIFF EDGE PROJECT 躍動する山河

UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川

表現未満、

を自主的に行うなど、地域に暮らす誇りも醸成されるとともに、来訪者との新たな交流が生まれたことも、地域の潜在的な力を引き出した効果と言える。

②他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます。

福祉と文化芸術の横断的な取り組みが多かったことが静岡県文化プログラムの特徴の一つとも言える。そこでは、一人一人の個性や違いが個の表現として可視化するだけでなく、その表現の周縁の存在（家族など周りにいる人）にまで目を向ける機会をつくったことは、単なる啓発だけに止まらない「環境を育む」ことにつながったと考える。

例としては、特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツのプログラム「表現未満、」では、通常、障害者施設への訪問者は家族等に限定されている状況を、文化事業を行うことで多様な他者との交流を生み出し、そのことが、「知らない」ことによる差別や偏見、さらには無関心を防ぐことを証明したと言える。

また、芸術祭や映画祭を通して生まれるサポーター組織も「他者との違いに価値を見出し認めあう環境」の一つである。「原泉アートデイズ！」は、掛川市北部の中山間地「原泉地区」において、アーティストインレジデンスの手法で、現代アートの力で地域の魅力を引き出すことを目的に、多くの住民がプロジェクトメンバーとして参加している。ドネーションの受付、アートストアの運営などに加え、作品制作活動も地域のサポーターが支えており、過疎により薄れていくコミュニティの輪や、アーティストや来訪者との交流が拡大した。サポーター組織は、日頃の消費活動を超えた先で出会う、第三のコミュニティであり、参加したサポーターにとってはその地域における拠り所としても機能している。

③すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します。

いくつかのプログラムは、子育て、防災、生活文化と

原泉アートデイズ！ 2020〜不完全性〜

いった日常的な活動の中にある創造性を引き出すことで、多様な生き方やあり方を提示した。

特定非営利活動法人熱海ふれあい作業所では、精神障害を持つ若者とコミュニティ FM の DJ の出会いから始まったラジオを活用したプログラムを行い、地域既存の発信設備を資源として活用することによって、若者にとって創造性発揮の機会を創出し、「そこで生きざまの提示を行った」と言える。

「心のままアートプロジェクト」は、障害を持つ子の親たちが中心になって行った、こどもたちがアーティストと共に大きな窓に絵を描き公共施設で展示したプログラムであるが、こどもたちがいつのまにかネット企画会議にも現れ、主体的に参加するようになるなど、与えられた場を超えた創造性がこどもたちにあることを証明してみせた。

また、芸術祭等の事業は、作品やそのものを見せるだけが目的ではなく、作品を通して浮かび上がる地域性やそこの暮らしの創造性、人に目をむけようとする取り組みであり、ときに「多様な生き方」がもたらす面白さ、発見する視点を、アーティストと呼ばれる人々が作品を通して提示することがあった。

④文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします。

現在、中山間地においては過疎化、市街地においても商店街の空洞化などの地域課題が、また、社会課題としてはすべての人がお互いを認め合う社会包摂など、様々な課題が山積している。文化プログラムには、このような課題に対して文化・芸術の力で少しでも解決に近づくことができるのか取り組んだいくつかのプログラムがある。

前述した「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」は、まさに過疎化の象徴的な「無人駅」をステージとして、交流人口や関係人口を創出することに成功した例と言える。

Scale Laboratory

おべんとう画用紙

しゃぎりフェスティバル

また、廃業した沼津市のデパートの旧催事場を、パフォーミングアーツのステージとして活用したScale Laboratoryのプログラムは、中心市街地に新たな顧客を産み出したと言えるのではないか。

また、社会福祉法人ひかりの園でのプログラム「おべんとう画用紙」は、年少の子供たちがこんなお弁当を食べたいという絵を描き、親がその絵に基づき実際のお弁当を作るという試みだが、「おべんとう画用紙」を創作物と捉えるというよりも、親子間のコミュニケーションの促進や、閉鎖的になりがちな療育施設を社会に開く、という意義があった。

さらには文化そのものにおいても、長い年月伝えられてきた伝統芸能について、その後継者がいなくなるという課題も生じている。三島市の「しゃぎりフェスティバル」は、将来を見据えた様々な試みにより課題に向き合うだけでなく、コロナ禍にあって独自のマスクを開発するなど、柔軟な対応により乗り越えたことは特筆される。

まとめ

5 年間に渡る静岡県文化プログラムの活動をふりかえり、非常に困難な事例と言われている文化事業の検証を、その目的の達成という面から試みてみた。

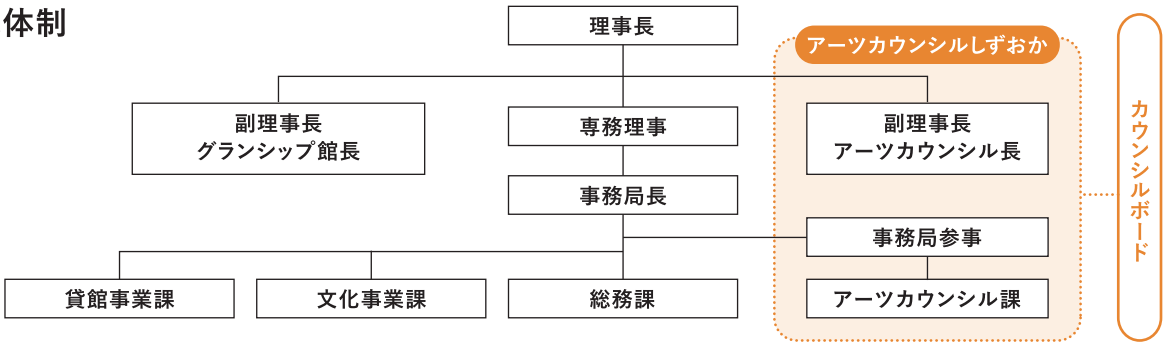
もちろん、目的以外にも、コロナ禍という文化事業にとって非常に厳しい状況下で、プログラムを実施するために、各種のマニュアルや前述した独自のマスクなど、様々な創意工夫で対応したことは、また、このような事態に陥ったときの良き事例となりうるものであると評価できる。

ふりかえって、全てのプログラムについても目的を達成したかという視点で捉えるならば、総じて評価できるという結論を得た。改めて、5 年間の長きにわたりプログラムの実施にあたった関係者の皆様に、この場を借りて感謝するとともに、レガシーとして令和 3 年 1 月に誕生した「アーツカウンシルしずおか」が、文化プログラムの成果を土台として、静岡県の文化の新たな時代を築き上げていくことを期待したい。

アーツカウンシルしずおか

「アーツカウンシルしずおか」は、実践的専門家による支援、負担金による支援、他分野との協働等の静岡県文化プログラムの実績をレガシーとして継承し、文化芸術の力を活用して地域社会の活性化を目指す住民主体の活動を支援し、創造的で感性豊かな地域社会の形成を促進するため、2021年1月公益財団法人静岡県文化財団内に設置しました。

組織体制



開所式の様子

パンフレット

アーツカウンシルしずおかの主な業務

高い専門性を持つスタッフを配置し、「住民主体の創造活動の推進エンジン」、「他分野協働のプラットフォーム」、「文化政策シンクタンク」の3つの機能を担います。

アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

主な事業内容

住民主体のアートプロジェクト支援

- 助成、伴走支援 ※1
- 住民プロデューサーの発掘
- 先導的な事業の試行

コーディネート

- 相談窓口
- セミナー、講演会などの開催 ※2
- 企業・団体・大学・自治体とのネットワークづくり
- アーティストとのマッチング

調査研究・政策提言

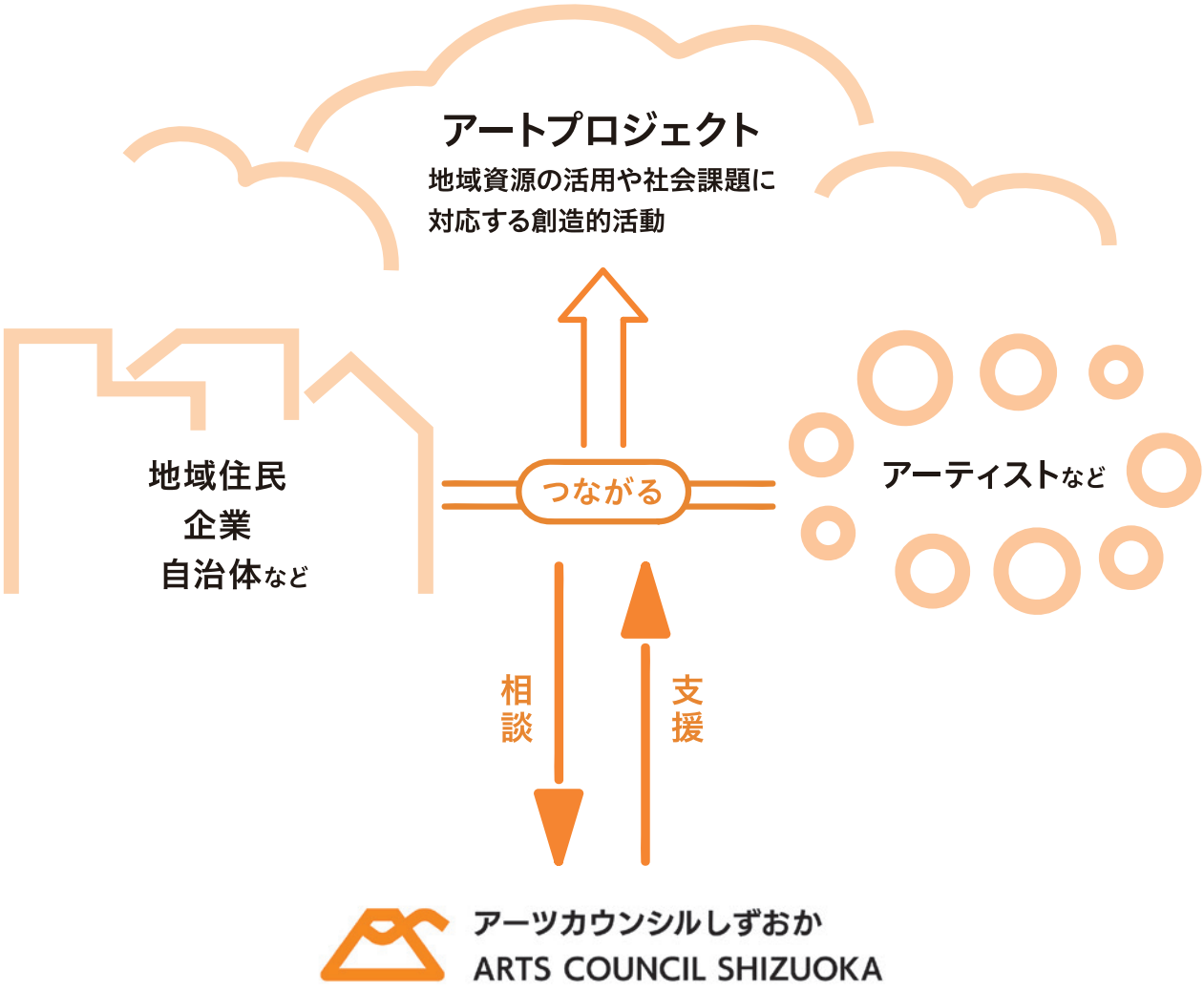
- 地域資源・文化活動の調査研究
- 自治体、文化団体などへの助言・提言

※1 助成金による支援と共に、プログラム・ディレクター、コーディネーターによる助言や事業内容の整理などの伴走支援を行います。
※2 創造的活動のヒントになる示唆に富んだトークや事例の紹介をします。

アーツカウンシルしずおかの役割

“視点をかえる 発想をひらく” をキャッチフレーズに、地域資源の活用や社会課題に対応する住民主体のアートプロジェクトの支援を中心として、すべての県民が、様々な表現活動を通して創造的になることを目指し、そのための方法を開発し、制度を整備します。

誰もが持っている創造力が活かされる道をひらき、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野においてイノベーションが生まれる創造的な地域づくりに貢献します。

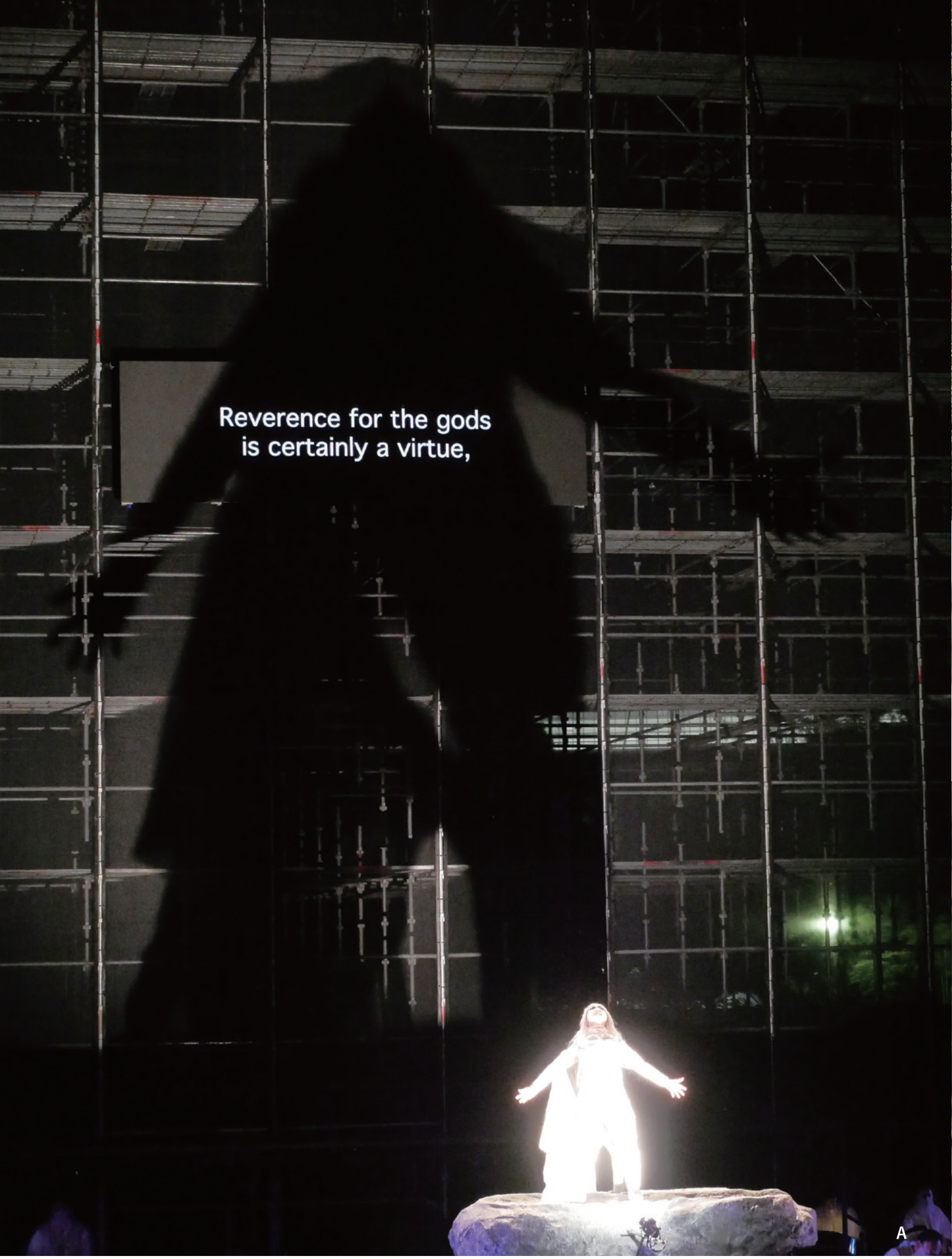


アーツカウンシルしずおかのロゴについて

アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

Arts Councilの “A” そして静岡の象徴“富士山” を想起させるモチーフに、アーツカウンシルしずおかの母体となった静岡県文化プログラムのシンボルを合わせたロゴマークです。

「文化芸術の力を活かした住民主体の活動を促進する」というアーツカウンシルしずおかの設立主旨を念頭に、富士山のモチーフを踏切板に見立て、「ここから新たな一歩を踏み出す」「次の段階へ跳躍する」といったイメージも表現されています。



写真で振り返る文化プログラム

A_宮城聰演出 SPAC公演『アンティゴネ』©HIRAO Masashi　B_松崎町「絲」concept
C_WABISAVILLAGE SASAMA -視点を変え、文化の力で持続可能な村作り-
D_UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2019　E_伊豆のODORIKOフェスティバル　F_富士の山ビエンナーレ2020

G

H

K

I

J

L

G_第４回しゃぎりフェスティバル　H_UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2019　I_となりのアーティストプロジェクト～地域を拓き、可能性の扉を開く～
J_磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙　K_遠州森町の舞楽・舞楽食～食文化～次世代に繋ぐ～　L_想像する展覧会～原泉アートデイズ！ 2020不完全性～
M_『忠臣蔵2021』©Y.Inokuma　N_UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2019　O_舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」　P_富士の山ビエンナーレ2020

Q_富士の山ビエンナーレ2016　R_となりのアーティストプロジェクト～地域を拓き、可能性の扉を開く～
S_新時代の「課外活動」への挑戦！～地域部活・掛川未来創造部 Palette～　T_タイムスリップ！ 1964
U_パラリンピック聖火リレー出立式　V_熱海怪獣映画祭　W_磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙

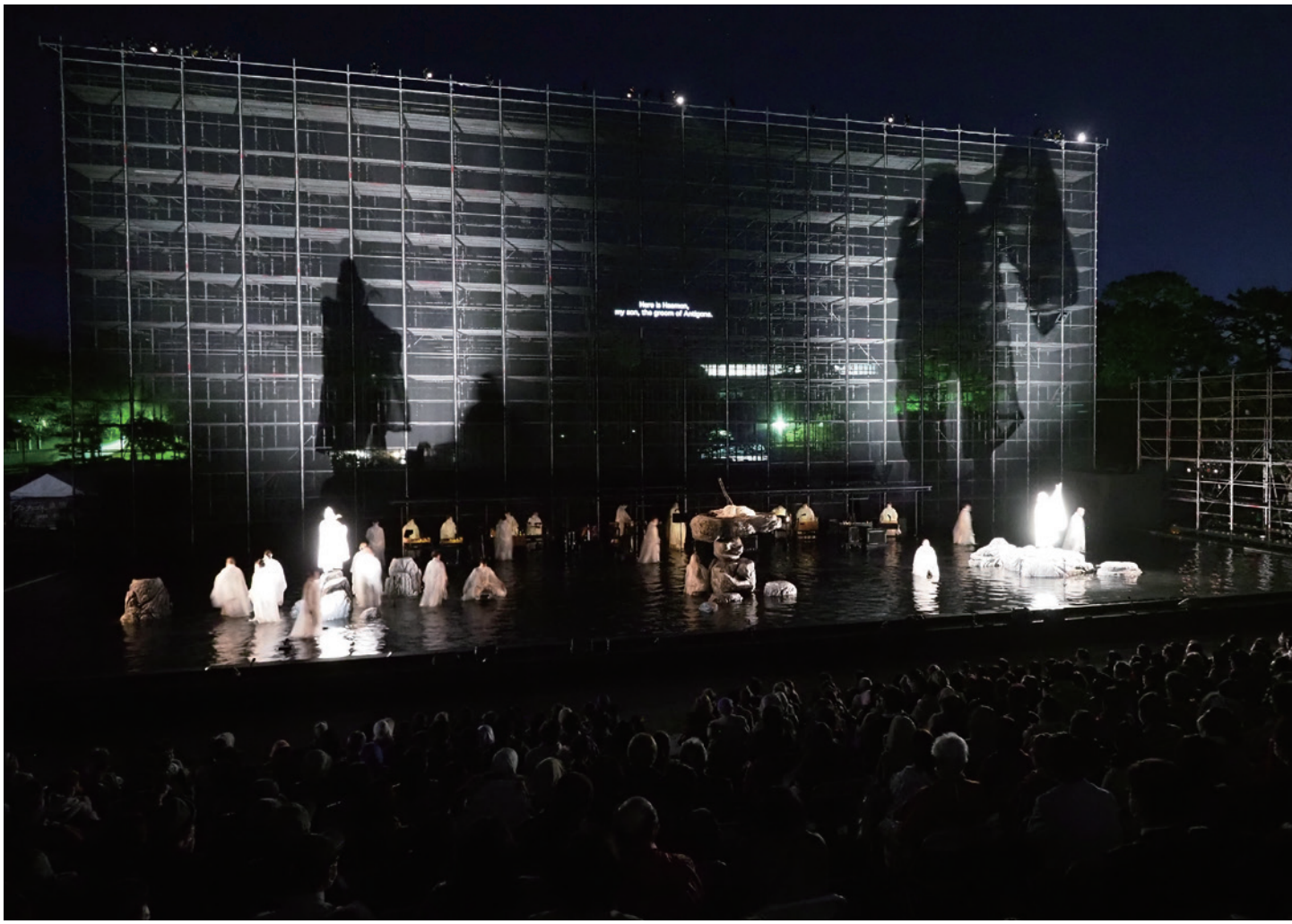
プログラム紹介

全国的プログラム

県域プログラム

地域密着プログラム

東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム ふじのくに野外芸術フェスタ2021静岡 宮城聰演出 SPAC公演『アンティゴネ』



全面に水を張った巨大な舞台、壁面に俳優の巨大な影を映し出す演出は、詰めかけた観客を魅了した。©HIRAO Masashi

プログラム概要

本事業は2020年5月の実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け延期となり、2021年5月2日（日）～5日（水・祝）、東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムとして、静岡市・駿府城公園の野外特設劇場にて開催された。

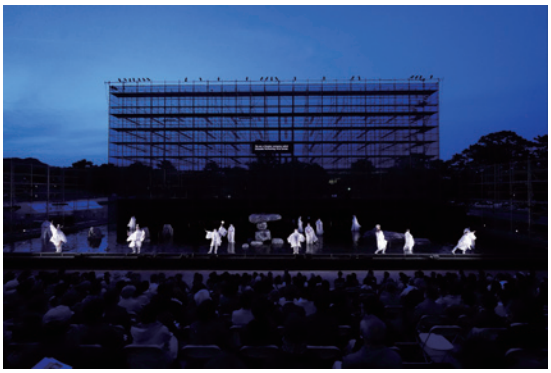
SPAC-静岡県舞台芸術センターによる『アンティゴネ』は、2017年、世界最高峰の演劇の祭典「アヴィニョン演劇祭」（フランス）から招聘を受け、駿府城公園でのプレ公演を経て、同年7月、約2,000の客席を有するメイン会場「アヴィニョン法王庁中庭」にて同演劇祭のオープニングを飾った。アジアの演劇がオープニング作品に選ばれたのは、同演劇祭史上初めてという快挙である。さらに2019年には、ニューヨークの「パーク・アベニュー・アーモリー」で上演され、米国版TIME誌が選ぶ2019年の演劇公演ベストテンの第6位にも選ばれるなど（アジアの演劇作品としては初のベストテン入り）、本作は世界の演劇シーンに衝撃を与え続けている。今回の上演は、1年の延期を経て、満を持しての凱旋公演となった。

本戯曲は、古代ギリシア3大悲劇詩人の1人として知られるソポクレスによって約2500年前に書かれた。王女アンティゴネが、反逆者となった兄を手厚く葬ったことで王の怒りに触れ、生きながら岩屋に囚われるという物語である。

演出の宮城聰は、この王女アンティゴネの姿勢に「死ねばみな仏」という日本人の死生観を重ね、独創的な演出を施した。登場人物たちを死者の仮初めの姿として描き、

実　施　者	ふじのくに野外芸術フェスタ実行委員会
プログラム名称	ふじのくに野外芸術フェスタ2021 静岡 宮城聰演出 SPAC公演『アンティゴネ』
開　催　日	2021年5月2日〜5日
会　　場	静岡市・駿府城公園 野外特設劇場

アンティゴネ（上）は、国に反逆した兄を弔った罪で王に囚われる。
©Y.Inokuma



冒頭のあらすじ解説の寸劇「ミニ・アンティゴネ」。ご当地ネタも盛り込み、客席を沸かせた。©Y.Inokuma

束の間の“役”を終えた登場人物たちは、盆踊りの輪に加わる。「死ねば皆仏」という本作のメッセージを体現するラストシーン。©Y.Inokuma

束の間の“役”を与えられた者たちが悲劇を演じる。そして、劇中に挟まれた“盆踊り”には「死後は誰もが平等である」というメッセージが込められており、コロナ禍で社会の分断が一層進む中、本演出は観客の心に深く響いた。

また今回の上演では、アヴィニョンやニューヨーク公演に迫る規模の劇空間を出現させるべく、幅40m・奥行16m・全面に約60tの水を張った巨大な舞台と、俳優の影を映し出すための高さ18mの壁を、約10日間かけて、まっさらな駿府城公園の広場に立ち上げた。

さらに本作では、冒頭に「ミニ・アンティゴネ」と称するあらすじ解説の寸劇を組み込み、ギリシア悲劇に馴染みのない観客が抵抗感なく観劇を楽しめる演出も試みた。

首都圏への緊急事態宣言の発出をはじめ全国的に感染が再拡大する中、客席数の制限、舞台と客席間の距離の確保、発語する俳優のマスク着用といった様々な対策を講じた上での公演となったが、4日間で2000人を超える観客が来場。同時期に開催された「ふじのくに⇄せかい演劇祭2021」「ストレンジシード静岡」とともに静岡の街を彩り、パフォーミングアーツで地域振興を図る静岡県の施策「演劇の都」や静岡市の施策「まちは劇場 〜ON STAGE SHIZUOKA〜」に大きく貢献した。また、本公演は、東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムにふさわしく、静岡県民はもちろん日本人にとって、自国の文化を再認識するきっかけとなり、世界に日本の舞台芸術の実力をアピールする機会となった。ウィズコロナ時代にこのような大規模かつ世界レベルの公演を成功させたことは、静岡という一地方が直接世界と渡り合う好例として、先の見えない不安の中にいる多くの人に希望を与えた。

「文化のちから」でできること

© 加藤孝

静岡県文化プログラム
総合プロデューサー
SPAC 芸術総監督
宮城 聰

これからの静岡県にとって最大の課題は何かと考えてみると、それはやはり人口減少対策ではないだろうかと私は思います。

もちろんほかにも喫緊の課題はいろいろあるとお感じになられるでしょうが、人口減少は税収減と民間経済の縮小に直結しますので、さまざまな焦眉の課題に対応してゆくためにも人口が減らないようにしてゆくことは必要だと言えるでしょう。

一方に、「人口減少は避けられないのだから、いかに上手に縮んでゆくかを考えるべきだ」という意見もあります。しかしフランスのように人口減少対策に取り組んではっきり成果を上げている国もあることを思えば、少なくとも「静岡県が、人口が減らない地域になる」ことは不可能とも言い切れないのではないでしょうか。それに今後の人口減少を大前提にしてしまうと、いまの若い世代が抱いている不遇感、つまり現在は自分たちがせっせと働いて高齢者福祉を支えているが、自分たちの世代が高齢者になったときには働き手が減っていてろくなサポートを受けられないだろう、自分たちの世代は割りを食っているんだ、という感覚がどんどん肥大化して、日本社会はいっそうの分断に見舞われてしまう危険があります。

では静岡県の人口減少をくい止めるにはどうすればいいか、ですが、これには３つしかありません。「人が出てゆかない」「人が入ってくる」「人が生まれる」の３つですね。

みっつめの「人が生まれる」をさらに詳しく見ると、「ずっと静岡に住んでいる人が、こどもを生もうと考えるようになる」と「『こどもを育てるなら、静岡に住もう』と思う人が増える」の２種類に分けられるでしょう。

『アンティゴネ』のラストを飾る静謐な盆踊り　©Y.Inokuma

さて、人口減少をくい止める上記の４つの方法のうち、「人が出てゆかない」（流出対策）と「人が入ってくる」（Uターン・Iターン）と「『こどもを育てるなら、静岡に住もう』と思う人が増える」については、これはもう間違いなく、「文化のちから」が活用できると言えるでしょう。

このことはこの20年ほどの日本の人口動態からもわかります。首都圏での暮らしは、大半の庶民にとっては、長時間の通勤とか狭い住居とか、物質的にはむしろ「貧しい」と言っていいものです。にもかかわらず、首都園の人口はひたすら増えています。東京都だけに限っても、過去20年余りで200万人も増えました。膨大な人数がいまなお日本中から首都圏に移住して、そして戻らないのです。では、今の日本で、東京にしか無いもの、とは一体何でしょうか？…それは文化的刺激、ではないでしょうか。

ただし首都圏は「人が出てゆかない」と「人が入ってくる」で人口が増えていますが、「『こどもを育てるなら、東京に住もう』と思う人が増えているとは言えません。ですから、静岡という地域に文化的刺激さえ備われば、むしろ東京より静岡が選ばれる可能性は十分にあるわけです。

とはいえ文化的刺激をつくり出すのもそう簡単ではありません。東京にある華やかなものの縮小コピーをつくっても「東京のほうが凄いね」と思われてしまいます。コピーではない文化的刺激をつくるには、巨大規模の最大公約数的なもので大多数の人をカバーしようとするのではなく、多種類の文化的刺激が共存していて、選択肢がたくさんある、それが身近にある、という状態を実現しなければならないでしょう。

こう考えてくると、静岡県文化プログラムが目指したものは、まさしくそのことだったと気づきます。「東京にはなくて静岡にはある」文化的刺激の多様さに、多くの県民が気づいてくれたことと思います。もちろんこれは5年間で「仕上がった」というようなものではなく、「幸先の良いスタートを切った」という言い方がふさわしいでしょう。これからはアーツカウンシルしずおかとも手を携えながら、私たちSPACも多様な文化的刺激の一翼を担うべく引き続き頑張ってゆきたいと思います。

県域プログラム

ラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピックの開催等に合わせて、推進委員会が企画し、静岡県内で実績のある文化団体等に協力をいただき、静岡県の魅力を発信する県域プログラムを実施しました。

プログラム名称	概　要	開催日	会　場
「手の愉悦～革新する工芸」展	手仕事に焦点を当て、「ものづくり県」静岡ゆかりの作家による33の工芸作品を展示	2020年10月9日～25日	静岡文化芸術大学ギャラリー（浜松市）
関連企画「先端技術展ー技人たちの物語」	県内企業の「技人（わざびと）」に注目し、学生が取材を行いその優れた技術を紹介	2020年12月10日～23日	
静岡県郷土唱歌を歌おう	「静岡県郷土唱歌」を歌い継ぐために、静岡児童合唱団を中核に、一般参加を呼びかけ、合唱とオーケストラによる公演を実施	2021年3月21日	グランシップ大ホール（静岡市）
磐田プレ公演ララバイ　詩と舞踊と音楽による小宇宙（ミクロコスモス）	海外の子ども達や、障害者ダンサーの招聘等によるモダンダンス公演	2019年9月23日	磐田市民文化会館大ホール（磐田市）
舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」	富士山かぐや姫伝説を題材とした舞踊音楽劇等、ふじのくに静岡の舞踊と音楽と演劇による総合芸術の祭典	2021年5月23日	静岡市清水文化会館マリナート大ホール（静岡市）
ふじのくに伝統芸能フェスティバル	地域の芸能を次世代につなぐために、静岡県を中心とした伝統芸能団体が多彩な芸能を披露	2019年3月30日	グランシップ交流ホール（静岡市）
		2019年9月22日	グランシップ中ホール（静岡市）
		2021年6月6日	長泉町文化センターベルフォーレ（長泉町）
忠臣蔵2021	10代から80代までの幅広い世代の一般公募参加者42名とSPAC俳優、スタッフらにより創り上げた野外劇	2021年6月5日、6日	静岡県舞台芸術公園野外劇場「有度」（静岡市）
ふじのくに各流大茶会	抹茶・煎茶の各流派が集結し、「茶の都」静岡のお茶文化に触れることができる大茶会	2019年9月25日～29日	ふじのくに茶の都ミュージアム（島田市）
		2021年6月10日～13日	

「手の愉悦～革新する工芸」展
関連企画「先端技術展―技人（わざびと）たちの物語」

「手の愉悦～革新する工芸」展の様子

プログラム概要

【プログラムの狙い】

「手の愉悦～革新する工芸」展では、「ものづくり県静岡」を国内外に広くアピールするため本県にゆかりのある作家の工芸品を展示する。

展覧会の主旨に挙げたのは、①大学で開催するにふさわしい展覧会にする、②静岡の工芸（工芸作家）を広く紹介することで静岡の魅力を発信する、③伝統工芸の技術を継承しながらクリエイティブな作品を制作している“作家”に焦点を当てる、の3点である。

あわせて、世界でもトップレベルの技術を持つ県内の製造業の先端技術を紹介する「先端技術展」を関連企画として開催する。

製品そのものの紹介よりも、そこに使われている「技術」、特に職人的な技術や技に焦点をあてたパネル展示を中心とする。パネルの制作には、有志の学生を募り、チームを組んで企業の技術者にインタビューや取材を行い、学生の目線から見た内容とする。

【開催の経緯】

「手の愉悦」展も「先端技術展」も、コロナ禍の影響を受け、作家や工芸品の選定、並びに、企業への取材等も計画通りに進めることができず、開催時期も変更せざるを得なかった。

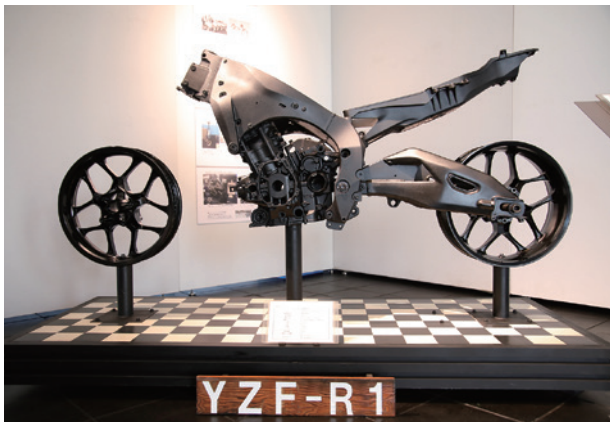
そのような状況にもかかわらず、工芸作家や企業の技術者の方々の惜しみない協力のもと、充実した作品が集まり、企業への取材等もオンラインを活用して進めることができた。

「手の愉悦」展は10月に開催した。静岡県文化プログラムの「リスタート」と位置づけ、開催と同時にリスタートセレモニーを行った。主旨に賛同した作家の洗練された技と独自の世界観を表現した作品が並び、訪れた人を魅了した。

「先端技術展」は12月に開催した。各企業のブースには先端技術とその技術を生み出す技術者の情熱とたゆまぬ努力を感じさせる道具や機械部品、模型等が展示され、学生の取材により作成したパネルとともに、「ものづく

実　施　者	静岡文化芸術大学
プログラム名称	「手の愉悦～革新する工芸」展　関連企画「先端技術展ー技人たちの物語」
開　催　日	2020年10月9日～25日　2020年12月10日～23日
会　　場	静岡文化芸術大学ギャラリー

工芸展　静岡ゆかりの作家による33の工芸作品を展示



先端技術展　学生が「技人」に焦点をあて作成したパネルとともに技術の一端を表す道具等を展示

り県静岡」の一端を示すことができた。

【プログラムの成果】

「手の愉悦」展は10月9日から25日まで開催した。考えうるコロナ対策を講じた上での開催だった。開催期間中に1,425名の来場者が訪れ、大学生・高校生といった若い世代も含まれていた。多くの県民に「人間の感性と手わざ」から創造される多様な工芸品を鑑賞する機会を提供できた。

「先端技術展」は12月10日から23日まで開催した。こちらもコロナ対策を講じた上で開催した。開催期間中に611名の来場者が訪れ、静岡県の世界トップレベルのものづくりの一端や、学生目線から見た技人（わざびと）の技術や思い入れを堪能した。

この展覧会を契機に、本学デザイン学科の「匠領域」の教員・学生と県内の工芸作家の方々との交流や、本学と県内の企業や企業ミュージアム・産業展示施設との連携・協力の可能性が生まれた。

キーパーソンのコメント

静岡文化芸術大学理事

高田 和文さん

本事業を静岡県の文化プログラムとして実施したことは、2つの点で大きな成果を挙げたと考えます。1つは、「手の愉悦」展において静岡県ゆかりの工芸作家の方々の幅広いジャンルの作品を展示することにより、来場した人々に地域の工芸文化の豊かさを知っていただいたことです。併せて、本学デザイン学部に新たに設置された「匠領域」の意義や今後進むべき方向が明らかになったと考えます。もう1つは、「先端技術展」において県内企業が持つ世界トップレベルの技術を展示することにより、県の産業技術の底力を示すことができたことです。工芸作品と先端技術は、一見すると異なるようですが、実は先端的な産業技術の根本には職人的な美へのこだわりや研ぎ澄まされた感性があります。2つの展覧会を連続して開催したことで、そのことが明らかになったように思われます。また、「用の美」を追求する工芸と技術に形を与えるデザインにも深いつながりがあります。今回の事業が切っ掛けとなって、デザイン学部を有する本学と地域の工芸作家の方々との協力、そして最先端の技術を誇る企業や企業ミュージアム、産業展示施設との連携がいっそう強化されることを期待しています。また、学内においては工芸とデザインと技術の関係について研究・考察を進め、本学独自のデザイン教育を展開してゆきたいと考えます。

静岡県郷土唱歌を歌おう

富士登山

プログラム概要

昭和11年に発行された「静岡県郷土唱歌」は県内各地域の名所旧跡や歴史的人物を唱歌にし、発行当時、児童を中心によく歌われていたが、時代と共に廃れてしまい、今は知る人がほとんどいない。この機会に「静岡県郷土唱歌」を復刻し、「歌の財産」として次世代に引き継ぐと共に、子供たちの郷土愛を育て、静岡県の文化の発展・向上及び子供たちの健全で明るい未来に対して寄与することを目的とした。

県市の教育委員会のご尽力により約1100名の小中高校生の参加応募があり、県内より団体・個人参加者が約570名、合わせて約1700名の大合唱団が結集した。静岡交響楽団（現：富士山静岡交響楽団）と共に、静岡音楽館AOI音楽監督であり、世界的に活躍されている野平一郎氏のピアノソロ及び指揮で2020年3月29日（日）実施を予定していたが、新型コロナ感染拡大防止のため開催叶わず、2021年3月21日（日）に延期することになった。

日程変更により指揮は松川智哉氏に、時間を短縮するために曲目も変更した。合唱は小中高校生の参加は取りやめ、最終的に音楽青葉会・静岡児童合唱団と個人参加の62名に大幅に縮小された。練習が困難な状況の中、出演者の熱意と集中力によって完成度の高い演奏を披露し、聴衆から惜しみない拍手が送られた。

原曲は単旋律と簡易なピアノ伴奏で書かれているが、グランシップ芸術監督を務められていた故中村透氏に編曲を委嘱し、全28曲から19曲を選び、オーケストラ伴奏にて、斉唱、同声2・3部、混声合唱曲に編曲していただいた。新しい息吹を与えられた「静岡県郷土唱歌」は、

実　施　者	静岡県郷土唱歌を歌おう実行委員会
プログラム名称	静岡県郷土唱歌を歌おう
開　催　日	2021年3月21日
会　　場	グランシップ大ホール

故中村先生

郷土唱歌　原本

彩り豊かに迫力ある作品に生まれ変わった。また構成・演出はSPAC-静岡県舞台芸術センター演出家の大岡淳氏が務められ、聴衆は大型スクリーンに投影された地域の写真と共に静岡県ゆかりの歌を堪能し、大変好評だった。

一過性で終わることなく、「静岡県郷土唱歌」が世代を超えて県民の皆様に愛され、県民の「歌の財産」となることを願い、当日の公演を録画してDVDを制作し、出演を予定されていた17校の小中高校及び14の合唱団体、個人参加申込者120名に、静岡市には全公立小中学校に無料配布した。また、Web上でも動画配信を行った。

そして、感染症が収束した折には、県内の小中高校生から大人が一同に集い、1500人を超える大合唱で「静岡県郷土唱歌」を歌える日が来ることを願っている。

キーパーソンのコメント

静岡県郷土唱歌を歌おう実行委員会　副委員長
音楽青葉会・静岡児童合唱団　主宰

戸﨑 裕子さん

幻となった1500人による大合唱をいつの日か…。

かつて合唱大国であった静岡県の合唱人口は減少傾向にあり、特に子どもたちの合唱活動は授業内に留まっています。より深く合唱の魅力に触れる機会を模索している中、私が小学生の頃よく歌っていた「静岡県郷土唱歌」が廃れた状況下にあり、この機会に復刻し、次世代に引き継ぐことを考えました。石塚委員長を頭に、実行委員諸氏の熱い想いに導かれ、この企画に対する多くの賛同を賜り、予想を遥かに超えて約1700人の合唱参加者が集まったことに感銘を受け、静岡県民の郷土愛や文化への高い関心を改めて痛感する思いでした。子どもたちには大きな舞台でオーケストラと共演するという経験を通じて歌う歓びを体感することを願い、グランシップのご協力を得て準備が進められましたが、残念ながらこの規模での公演は実現しませんでした。しかしいつの日か、子どもから大人まで一堂に集い大合唱団で歌える日が来ることを願っております。

静児の子どもたちはこの作品から静岡県の歴史に関心を持ち、郷土の魅力を新たに発見することができました。県内の多くの子どもたちにも同じ体験が叶うことを願います。またこのコロナ禍、常に距離を保ち、人と心を通い合わせる機会が減ってしまった子どもたちが、合唱を通してあるべき姿を取り戻し、友と戯れ、自分を表現することが出来るようになってほしいと改めて感じています。

磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙（ミクロコスモス）
舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」

舞踏音楽劇　かぐや姫、霊峰に帰る

プログラム概要

I　静岡県文化プログラム磐田プレ公演
（2019.9.23 磐田市民文化会館）
ララバイ～詩と舞踊と音楽による小宇宙～

静岡県により国内外に発信する舞台公演事業としての前哨戦を担うことになった磐田市では、直ちに実行委員会（高木昭三委員長）を組織、行政・財界・民間の総力を挙げて事業に取り組んだ。

第1部A　明日にかける橋～世界の子ども達とともに～

県地域外交課あげての協力をいただき、モンゴル・韓国・中国そして地元（佐藤典子舞踊団）の子ども達100余人が手をつなぎ輪になって踊ったフィナーレは圧巻だった。

第1部B　シェイクハンド～怪獣Oどこからきたの～

隻脚のパラリンピックダンサー大前光市氏を迎え、障害を持つ子どもと健常と呼ばれる子どもたちが、共に生き供に助け合って夢を叶えるという作品。

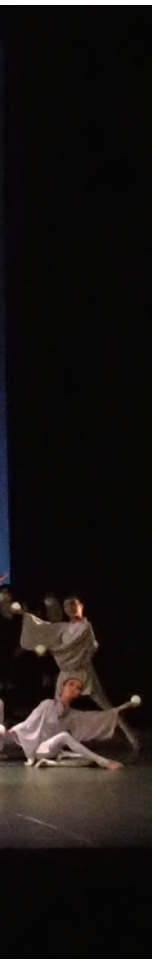
第2部　故郷の水へのメッセージ～大岡信の詩想から～

静岡県の宝、故大岡信氏の崇高な詩魂に触れさせていただき、新しい舞台芸術誕生の第一歩となることを願って挑んだ作品だった。

II　静岡県文化プログラム本公演
（2021.5.23　清水マリナート）
ふじのくにのものがたり
～舞踊と音楽と演劇の祭典～

実行委員長の鈴木壽美子氏を中心に出発した本公演が、果たして一年後に開催できるのか……。暗闇の中を手探りで、コロナに負けるな！芸術文化の火を消すな！を合い言葉に頑張り抜いて迎えた本番だった。

実　施　者	磐田プレ公演実行委員会	ふじのくにものがたり実行委員会
プログラム名称	磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踊と音楽による小宇宙（ミクロコスモス）	舞踊と音楽と演劇の祭典 「ふじのくにものがたり」
開　催　日	2019年9月23日	2021年5月23日
会　　場	磐田市民文化会館大ホール	静岡市清水文化会館マリナート大ホール



水へのメッセージ

ふるさとの心を今に　静岡県ゆかりの詩人・作曲家の作品を踊る

第1部　ふるさとのこころを今に

静岡県現代舞踊協会が担当。県ゆかりの作曲家や作詞者による作品を舞踊化した。公演延期というアクシデントも振付、踊り込み時間と考え、作品の完成度アップを狙った。

第2部　かぐや姫霊峰に帰る

“かぐや姫伝説”は全国にあるが、今回のメイン作品である本作は、“霊峰”とうたわれているとおり、富士山伝説を下敷きとしたSPAC大岡淳氏のオリジナル発想によるもの。様々な分野より招聘参加の公演だったが、裏も表もコロナという怪物に振り回され、稽古もままならぬ状況下で、全員が精一杯の努力を重ね、協力し合った結果のパフォーマンスであったと思う。

キーパーソンのコメント

磐田プレ公演/ふじのくにものがたり
公演舞台責任者
佐藤 典子さん

コロナ前の「あるべき姿」……それがそこにありました。5月23日 清水マリナートロビーに溢れた終演後の観客の高揚した顔々。中にはハンカチで涙を拭う姿も。二年間、生の人間の発するエネルギー（舞台）から遠ざかっていた人々の姿でした。

オリンピック文化プログラムプレ公演・本公演を終えた今、〈スポーツ文化と芸術文化は車の両輪〉、〈芸術文化は人間の心を育てる糧〉と教えてくださった先人の言葉を改めてかみしめています。

両公演にすばらしい技術を提供し、協力してくださった制作・舞台スタッフ、感動の舞台を創ってくださったキャストの皆さんに心からの感謝を申し上げます。財界の支援を得て民間と行政が一体となり目的に向かって走ったこの歳月、様々な思惑や立場が交錯したコロナ禍の舞台づくりでしたが、〈文化プログラムは未来の宝〉と言っていただける内容がお届けできたでしょうか。

文プロ発足当初より心を配られ、スタッフ・キャスト・裏方に至るまで激励の言葉をかけてくださった委員長のご心配も、再度にわたるカーテンコール、知事のお褒めの言葉、出演者の笑顔等……本番の舞台が吹き飛ばしてくれたのではないでしょうか。関わった人々が〈心の握手〉を交した瞬間でした。

ふじのくに伝統芸能フェスティバル

フィナーレを彩った鼓童と静岡県立駿河総合高等学校 和太鼓部「彩」（第3回）

プログラム概要

日本には、室町時代から残る能楽をはじめとし、各地に多彩な芸能が今に伝えられている。地域に根付く芸能には、信仰として息づいているものもあれば、地域のお祭りや興行として披露される芸能など様々な形態があり、そこには地域の豊かな営みが表現されている。

本事業は2019年3月から全3回の事業として開催。従来の総花的な一過性イベントとして開催するのではなく、『継承』を共通のテーマに掲げ、静岡県を中心とした芸能団体が集い、実演を披露。また本事業の特色として、活動の目的や継承をめぐる課題、さらに周辺環境まで映像等を用いて丁寧に紹介した。

くしくも、開催期間中に新型コロナウイルス感染症が猛威を奮い、少子化や過疎化といった各地の芸能が抱える課題が改めて浮き彫りになった。コロナ禍においては、大小の祭事・神事だけではなく、それを支える寄合や稽古といった小さなコミュニティでの活動でさえ停止せざるを得ない状況になり、その課題がより深刻化している。

しかし、本事業で各団体が保存・継承のために紹介した創意工夫は、次世代への継承につながる示唆を数多く与えてくれた。また、子どもたちが前向きに芸能に取り組む姿勢は、大きな勇気と希望を伝えてくれた。各地に伝わる芸能やそれに携わる人々の想いが、静岡県が誇るべきレガシーとして、100年後の未来に残っていくことを願っている。

第1回　2019.3.30（土）
『ふじのくに伝統芸能フェスティバル ～わたしがつなぐ101年後へ～』

芸能や文化のルーツを知り、未来に向けてどのように伝え、継承していくか。第1回目は伝統芸能の未来を考えるため、シンポジウムの形式で実施。様々な形態で芸能を継承している団体や高校生が、実演とともに活動内容や思いを紹介した。その後のシンポジウムでは、「100年前の先人が残してくれた芸能を、100年後に伝えられるように、さらに1年でも先に伝えるために何が必要か」―人間国宝の大倉源次郎氏をはじめとしたパネラーとともに考えた。最後は大倉源次郎氏と櫻間右陣氏による一調一声による「三井寺」で華麗に締めくくった。

出演：松原御船歌保存会（伊東市）、沖縄県立南風原高等学校 郷土文化コース（沖縄県島尻郡南風原町）、静岡県立遠江総合高等学校 郷土芸能部（周智郡森町）、大倉源次郎（大倉流小鼓方十六世宗家）、櫻間右陣（金春流シテ方）、橋本敬之（NPO法人伊豆学研究会理事長）、井原麗奈（静岡大学地域創造学環准教授）　他

・肩書等は当時のものです。

実　施　者	公益財団法人静岡県文化財団		
プログラム名称	ふじのくに伝統芸能フェスティバル		
開　催　日	第1回 2019年3月30日	第2回 2019年9月22日	第3回 2021年6月6日
会　　場	グランシップ交流ホール	グランシップ中ホール	長泉町文化センターベルフォーレ

静岡県立遠江総合高等学校 郷土芸能部は天宮神社十二段舞楽　第九番「陵王」を発表（第1回）

弥里の上で奏でられる勇壮かつ華麗な演舞（遠州横須賀三社祭礼囃子保存会・第2回）

第2回　2019.9.22（日）
『ふじのくに伝統芸能フェスティバル ～地域と共に大人からこどもたちへ～』

静岡県は日本の西と東を結ぶための結節点として古くから東海道や海上の道を通して、東西の文化が交わり、多彩な芸能が伝わり残されてきた。また南北を貫く大井川、安倍川、天竜川の流域、海上の道の要衝となった伊豆半島には中世以来の形を残した芸能も脈々と受け継がれている。二回目は静岡県の芸能の特徴である「地域」に焦点を当てた。様々な課題を持ちながらも、前向きに保存・継承に取り組む各団体の姿に会場から大きな拍手が送られた。

出演：笹間神楽保存会（島田市）、獅子舞かんからまち保存会（掛川市）、遠州横須賀三社祭礼囃子保存会（掛川市）、静岡県立駿河総合高等学校 和太鼓部（静岡市）、富士宮囃子保存会（富士宮市）、長谷川晴彦（観世流能楽師）、岩下尚史（作家）、橋本敬之（NPO法人伊豆学研究会理事長）

第3回　2021.6.6（日）
『ふじのくに伝統芸能フェスティバル ～今、地域の芸能を次世代につなぐために～』

新型コロナウイルス感染症の影響により2020年5月に富士宮市で開催予定だった3回目は、約1年後の2021年6月に長泉町で延期開催。コロナの影響により苦境に立たされながらも次世代への芸能の継承に思いを強く持ち活動する地域の団体を紹介した。

芸能の未来を担う子どもたちを代表して静岡県立駿河総合高校の和太鼓部が、新潟県佐渡市を拠点に世界で活躍する太鼓芸能集団「鼓童」と共演。共演に向けオンラインでの稽古を重ねていき、3月と5月には鼓童メンバーが来静して学校で稽古を実施。太鼓の技術だけではなく、舞台芸能と向き合うことの厳しさと覚悟を学んだ。さらに今回は鼓童の住吉佑太氏が駿河総合高校和太鼓部のためにオリジナル曲を作曲。生徒たちは芸能の灯が未来まで輝くようその願いを込めて、『燎（かがりび）』という曲名をつけた。短期間の稽古だったが、子どもたちの演奏は見違えるほど上達。本番の共演では圧巻のパフォーマンスを披露した。

参加団体：伊東市湯川自治会（伊東市）、伊豆の国市田京区（伊豆の国市）、横尾歌舞伎保存会（浜松市）、静岡県立駿河総合高等学校 和太鼓部（静岡市）、鼓童（新潟県佐渡市）

【映像出演】富士宮囃子保存会（富士宮市）、西島神楽団（山梨県身延町）

2019.8.23（金）
『伝統芸能こどもサミット』

関連事業として開催した『伝統芸能こどもサミット』。次世代の継承者が未来を話し合うため、各地域で伝統芸能に取り組む県内10団体、県外1団体から総勢31名のこどもたちが参加。全体会議では、横尾歌舞伎保存会の戸田なつみさん（当時小学4年）を議長に、課題や今後に向けての期待などを話し合い、声明文を発表。サミットに参加した子どもたちは他地域の同世代と交流し、伝統芸能の魅力や未来への希望を共有した。

参加団体：静岡県立駿河総合高等学校 和太鼓部、静岡県立遠江総合高等学校 郷土芸能部、静岡県立横須賀高等学校　郷土芸能部・遠州横須賀三社祭礼囃子保存会、獅子木遣り保存会、伊豆の国市田京区、島田市立川根中学校、浜松市立清竜中学校、川合花の舞保存会、獅子舞かんからまち保存会、横尾歌舞伎保存会、能勢人形浄瑠璃鹿角座（大阪府）

忠臣蔵2021

出演者1人1人が自身の顔写真を掲げた舞台終盤のムーヴメントは、「いま」を象徴するシーンとなった © M. Hioki

プログラム概要

本事業は2020年8月に公演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となり、2021年3月に稽古をスタート、会場を静岡県舞台芸術公園の野外劇場「有度」に移し、6月に『忠臣蔵2021』として上演した。出演者は、公募で選ばれた市民42名とSPAC俳優ほか12名の総勢54名。10代から80代までの幅広い年齢層、演劇経験者から未経験者まで、多様な人々が「いまこそ演劇が必要だ」という思いで集まった。

総合演出はSPAC芸術総監督の宮城聰が、演出はSPAC俳優の寺内亜矢子と牧山祐大が担当した。出演者全員がマスクを着用するなど感染防止対策を演出に取り入れながら、演出助手を務めた県内のアマチュア劇団の演出家4名や、市民参加者、SPAC俳優らとアイディアを出しあって創作を進めた。稽古が進むにつれメンバーの間には強い連帯が生まれ、事業終了後もお互いの活動情報を共有するなど交流を続けている。

日本人特有の「空気」によって討ち入りを決定していく様子を描いた平田オリザ版『忠臣蔵』は、1999年に初演され再演を繰り返してきた作品だが、今回はコロナ禍における出演者たちの葛藤と成長を重ね合わせ、1人1人の人生が立ち上がる新演出となった。棚川寛子の音楽による出演者たちの生演奏に加え、振付家・北村明子によるダンスやマスゲームの要素も彩りを添えた。

客席収容人数を60%程度に制限しての公演となったが、2回の公演は満席となり、計520名の観客が詰めかけた。メディアの注目も集め、新聞・テレビなどの取材により、稽古や公演の様子、参加者の声を広く伝えることができた。

実　施　者	公益財団法人静岡県舞台芸術センター（SPAC）
プログラム名称	忠臣蔵2021
開　催　日	2021年6月5日・6日
会　　場	静岡県舞台芸術公園　野外劇場「有度」

複雑な動きを組み合わせた群舞で表現した討ち入りシーン © M. Hioki

出演者たちを赤穂浪士に重ねる演出が取り入れられた冒頭のシーン © Y. Inokuma

キーパーソンのコメント

© 加藤孝

演出

寺内 亜矢子さん

平田オリザ版『忠臣蔵』では、これまでの日常が通用しなくなってしまった世界で、危機にあった集団や個人が、どう判断し行動していくのかが描かれています。これまでにも様々な形で上演されてきましたが、「新しい生活様式」を生きる私たちに、お家の一大事に右往左往する赤穂藩士が今まで以上にリアルで身近な存在に感じられ、コロナ禍の今でしかできない表現を目指して創作に打ち込みました。赤穂藩士が危機を通じて徐々に武士らしくなっていったように、参加者のみなさんが「公募の市民参加者」から「俳優」へ変わっていく過程も作品の一環のように思われました。またプロの舞台人にとっても、今だからこそ舞台に立ちたいという参加者のみなさんの熱い思いは、自らの生業を今一度問い直す機会になったとみえ、稽古と本番を通して、舞台上にはいつも新鮮なケミストリーが生まれていました。ラストのカーテンコールの予期せぬダブル、トリプルコールは我々の共同作業が実を結んだ証のように思われました。

© 加藤孝

演出

牧山 祐大さん

『忠臣蔵2021』は前年の2020年に公演が予定されていた『忠臣蔵2020』が延期され行われたものでした。「家」のなかに隔離された世界で、市民とプロの俳優が「劇場」で「集団創作」をするこの『忠臣蔵』という企画に、難しさを感じていましたが、私はSPACが定めていた非常にハードルの高い感染を防ぐための稽古条件を手掛かりに、舞台上に「隔離された空間」を作り出して解決しようとしました。世間ではコロナによって強制されたテレコミュニケーションが、「集団」の利点や憧れを浮き彫りにし、その渇望をエネルギーとして、サイバー空間という閉じられた場所で「隔離創作」を生みだしています。参加してくれた市民の方々やSPACのスタッフたちは、開かれた場所である「劇場」で、見事に「隔離創作」を行いました。新しい生活様式における「新しい演劇」が一歩足を踏み出したような気がしています。

ふじのくに各流大茶会

「ふじのくに茶の都ミュージアム」の多目的ホールで野点席を楽しむ来場者

プログラム概要

「ふじのくに各流大茶会」は2020年のオリンピック、2019年のラグビー W杯の開催を鑑みて、2年連続の開催を計画。県内在住者はもとより静岡県を訪れる県外、国外の方々にも静岡県主要産品のお茶を通じ茶文化を発信することを目的に開催。静岡県茶道連盟に属する県内の主な各流派（両年ともに8流派）が参加。様々な流派が一堂に会する全国的にも珍しい大茶会文化がある静岡で、当茶会が開催できたことは文化プログラムとしては意義深いものがあると思う。

2019年はラグビー W杯開催時期と重なり、観戦に来た外国人客なども来場するなど、国際色のあるイベントとなった。9/25（水）～29（日）の5日間、1日3席（本席、立礼、野点）、合計15席を運営。期間中は3,084席分の来場があった。

続く2回目の開催は2020年を予定していたが、新型コロナの影響を受け、2021年に延期。2021年の2回目はオリンピック開催前に、茶どころ・静岡として「おもてなし」の心を提供できる茶会が開催でき、非常に良かった。開催は6/10（木）～13（日）の4日間、1日3席（本席、立礼、野点）、合計12席を運営。期間中は2,161席分の来場があった。

コロナ禍での開催にあたり、徹底した消毒はもちろん、会場に入っていただく人数を制限したり、待ち時間をなくすなどの工夫をすることで、感染リスクを抑えた。そんな中にあっても、各流がそれぞれ工夫を凝らした「おもてなし」の気持ちを尽くした席を開催することができ、席主にとっても、多くの来場者にとっても、十分満足い

実　施　者	ふじのくに各流大茶会実行委員会
プログラム名称	ふじのくに各流大茶会
開　催　日	第1回 2019年9月25日～29日・第2回 2021年6月10日～13日
会　　場	ふじのくに茶の都ミュージアム

本席の様子

煎茶をふるまう様子

ただける茶会となったと思う。

また会場となった「ふじのくに茶の都ミュージアム」は静岡県のお茶文化を発信する施設であり、来場者の多くは茶会に参加する合間にミュージアムの見学にも足を運んでいただいた。施設のPRにも大いに貢献できたイベントであったと言える。

キーパーソンのコメント

静岡県茶道連盟　理事長

青島 宗智さん

「ふじのくに各流大茶会」を開催した2年とも、主催者が思っていた以上に多くの方にご来場いただくことができ、大変満足しております。毎年、静岡県茶道連盟では、抹茶も煎茶も関係なく、各流派のお点前を1つの会場で楽しんでいただける大茶会を開催しております。これは全国的にも大変珍しいお茶会です。2021年は、例年開催している大茶会が新型コロナの影響で中止になってしまい、結果的にはこの「ふじのくに各流大茶会」が久々の大茶会となり、多くの方が楽しみに来場くださいました。また普段とは異なる「ふじのくに茶の都ミュージアム」という茶文化を発信する会場で開催できたことは、静岡県茶道連盟として、とても意味のあるものでした。茶道とオリンピック、それぞれが大切にする「おもてなし」の心を、静岡県文化プログラムという事業を通じて、多くの方にお伝えできたことは本当に喜ばしいことだと思います。静岡県茶道連盟は今後も国内、国外を問わず幅広い世代の方々に茶文化の素晴らしさを伝えてまいります。

地域密着プログラムの支援制度

静岡県内の文化資源の掘り起こしや、担い手を育成し、将来自立した多様な創造的活動を促すことを目的に、「社会の様々な分野との連携」、「プログラム・コーディネーターによる支援」を特徴とした地域密着プログラムの枠組みにより、2017年度から2020年度にかけて、県内団体等からの提案を公募・採択し、専門家による支援や事業費の助成等を行いました。

公募の際に、オリンピック・パラリンピックに向けた祝祭性の高い「祝祭プログラム」と文化の力を地域や社会課題への対応に活用する「文化の力活用プログラム」の二つの枠を設け、特徴に合わせた支援を行ってきました。

プログラム・コーディネーターによる支援（伴走支援）

伴走支援のイメージ（地域芸術祭の場合）

事業の流れ	コーディネーターによる支援等
【開催準備】※本番６ヵ月以上前～ ・地域資源や地域課題に対応した芸術祭のコンセプト、テーマの決定 ・参加アーティストの選定・現地案内 ・地元住民や連携先企業等との調整　・許認可（河川・海岸等）の取得 ・チラシ、ホームページ等の広報展開　・サポーターの募集等　など	**運営会議へ参加するなど、事業の進捗に応じ、随時支援** ＜支援の例＞ ・地域事情と団体の課題に対応した運営方針の提案 ・事業目的の整理と事業理念の明確化 ・団体とアーティスト等の意思疎通の円滑化 ・全国の事例等の紹介　など
【作品制作】※数日～数週間 参加アーティストによる滞在制作（住民の協力、地域資源の調査・表現）	**実施状況の確認、関係者のヒアリング等**
【地域芸術祭 開催】※数週間程度 各地での展示、関連イベントなどの実施（ツアー、ワークショップ、交流会等）	**団体の振り返りを支援** ＜主な観点＞ ・地域住民など多様な人々に関わってもらえたか ・地域資源の発掘、地域の魅力発信や課題の顕在化等に貢献できたか ・地域にどんな変化をもたらしたか ・アーティストが地域や地域住民から得た効用・効果　など
【振り返り】成果、課題と改善策、次回の計画	

事業費助成

A：祝祭プログラム

東京2020オリンピック・パラリンピックが開催される2020年度の盛り上げを図り、
本県の文化力の発信に寄与するプログラムで、以下の要件を満たすもの。

- 祝祭性のある取組であること
- 先進性のある取組であること
- 国内外から訪れる人々をターゲットとした取組であること
- 本県で実施する意義を持ち、地域への波及効果が期待される取組であること

B：文化の力活用プログラム

文化の力を活用し、社会の幅広い分野の多様な担い手が行う地域資源等を生かしたプログラムで、
以下の要件を満たすもの。

- 先進性のある取組であること
- 文化芸術と、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業などの様々な分野と協働する取組であること
- 地域資源や社会課題についての新たな見方を提示するなど、地域の魅力の向上や、課題に対する創造的な対応を目指す取組であること
- 協働する分野等への波及効果が期待される取組であること

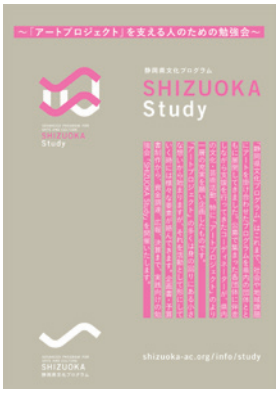
応募・採択件数

プログラム名称 ※	2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	応募	採択	応募	採択	応募	採択	応募	採択
A　祝祭プログラム（文化・芸術振興）	25	3	7	4	15	7	12	9
B　文化の力活用プログラム（地域・社会課題対応）	48	10	14	8	14	12	23	17
計	73	13	21	12	29	19	35	26

※2017度、2018度は「文化・芸術振興プログラム」、「文化・芸術による地域・社会課題対応プログラム」の名称で実施。

SHIZUOKA Study
～アートプロジェクトを支える人のための勉強会～

公募で集まった団体に伴走しながら支援を行ってきたプログラム・コーディネーター、アシスタント・コーディネーターが、県内の文化・芸術活動、特に「アートプロジェクト」の充実を図るため企画。企画書・予算書の作り方から資金調達、広報、決算まで、実践向けの勉強会「SHIZUOKA Study」を計５回開催。



2018年9月8日	**SHIZUOKA Study キックオフ・トーク** **「日頃の想いから立ち上げる文化芸術活動」** 会　場：グランシップ会議室（静岡市） ゲスト：シズオカオーケストラ代表　井上泉 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長　久保田翠
2018年10月20日	**SHIZUOKA Study 1** **「想いを見える化してみよう」　～企画書・予算書の書き方～** 会　場：グランシップ会議室（静岡市） 講　師：静岡県文化プログラム・コーディネーター
2018年11月23日	**SHIZUOKA Study　2** **「プロジェクト実現にはお金も大事」～ファンドレイジング～** 会　場：グランシップ会議室（静岡市） 講　師：認定NPO法人芸術と遊び創造協会　山田心
2018年12月8日	**SHIZUOKA Study　3** **「活動を伝えるため気にしておきたいこと」～広報とデザイン～** 会　場：グランシップ会議室（静岡市） 講　師：静岡県文化プログラム広報アートディレクター、グラフィックデザイナー　坂本陽一
2019年1月19日	**SHIZUOKA Study　4** **「継続していくために重要なこと」～会計と決算～** 会　場：グランシップ会議室（静岡市） 講　師：富士の山ビエンナーレ実行委員長　谷津倉龍三 公益財団法人静岡県文化財団　齋藤緑

プログラム・コーディネーター紹介

静岡県文化プログラムでは、全県にわたる文化プログラムの推進をサポートする実践的専門家として「プログラム・コーディネーター」を公募し、県内で文化プログラムに参画する、あるいは参画の意思を持つ団体やグループ等に伴走しながら基本方針を踏まえた各種の助言や支援等を行いました。

プログラム・コーディネーター

北本 麻理（きたもと まり）　2016年－2021年

アートキャンプ白州でダンスに出会ったことをきっかけに、芸術と社会の橋渡しについて探求を始める。京都造形芸術大学舞台芸術研究センターでの公演制作を経て、舞鶴市文化事業団アートコーディネーターとして、地域資源と芸術資源とを結びつけたワークショップや舞台作品を企画・運営。2012年からNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークで、東日本大震災被災地における文化・芸術による復興事業『三陸国際芸術祭』『習いに行くぜ!東北へ!』のプログラム・ディレクターを務める。

鈴木 一郎太（すずき いちろうた）　2016年－2021年

20代をアーティストとしてロンドンで過ごしたのち、2007年からNPO法人クリエイティブサポートレッツで、障害福祉と社会をつなぐ文化事業に携わる。2013年独立。事業主体者の思いを整理し、展望を見出すための企画づくりを主な業務としながら、ウェブマガジン、ゲストハウス、コミュニティスペース等の立ち上げ、福祉現場での文化事業企画、フリースペース運営、各種展示ディレクション、実践研究事業などに関わる。

佐野 直哉（さの なおや）　2017年－2021年

オルガン奏者として英国留学後、ビクターエンタテインメント、駐日英国大使館やブリティッシュ・カウンシル勤務を通じて、クリエイティブ産業振興、ロンドンオリンピックやイングランドラグビー W杯など国家ブランディング関連の広報文化キャンペーンを担当。上野学園大学音楽学部准教授および青山学院大学総合文化政策学部非常勤講師。

門脇 幸（かどわき さち）　2018年－2021年

14歳で単身上京。ミュージカル「アニー」にてデビュー。フリーでの俳優を経て劇団四季へ。退団後、タレントスクールを設立、後進の指導にあたる。2019年10月に一般社団法人日本市民ミュージカル協会設立、代表理事を務める。

アシスタント・コーディネーター

立石 沙織（たていし さおり）　2017年－2021年

静岡文化芸術大学にてアートマネジメントを専攻。ギャラリー勤務などを経て、「黄金町バザール2011」（神奈川県）にコーディネーターとして関わったあと、2012年～2014年まで「日和アートセンター」（宮城県）でアーティスト・イン・レジデンスの運営や展覧会の企画を担当。2014年よりNPO法人黄金町エリアマネジメントセンター（神奈川県横浜市）に所属し、アートプロジェクトの企画や広報に携わる。

地域密着プログラムを対象とした試行的評価

評価の目的

「地域密着プログラム」の目的や価値をより多くの人々と共有するためのコミュニケーション手段として、また、事業内容をより良くしていくための手段として、その成果を可視化するとともに、静岡県の文化・芸術の振興や地域の活性化等の貢献について検証しました。今後、アーツカウンシルしずおかにおける効果的な支援制度の設計・運用に活用していきます。

2019年度の採択プログラムを対象とした評価の試行は報告書に取りまとめ、ウェブサイトに公開しています。

https://artscouncil-shizuoka.jp/bunpro/info/hyoka/

2019年度採択プログラムを対象とした評価の構成

(1)簡易評価

団体が自らの事業を客観視し、事業価値の見極めや見直しを図る機会とするため、「簡易評価アセスメントシート」を作成し、19事業について、事前評価と事後評価を行った。

【結果の概要】

事業に関係する人々の可能性を引き出す工夫（多様性と包摂性）や、事業に対する思いや目的の発信（伝える力）等については、高めの達成度合いが示された一方、事業の持続的展開（自立発展性）については、やや低めの達成度合いが示された。

(2) 詳細評価

団体のみならず、事業に関わった人達が見出している事業の価値を明らかにするため、３事業を抽出し、詳細な事業効果の検証・評価を行った。

【結果の概要】

団体名（事業名）	評価の概要
Scale Laboratory	沼津市の商業施設等を舞台に様々な芸術に触れる機会を提供している団体の活動は、商業者が目指す街づくりに寄与するとともに、地元の若者に地域の魅力や可能性に気付くきっかけを生み出した。
クロスメディアしまだ （無人駅の芸術祭）	大井川鐵道沿線を舞台に開催している芸術祭では、芸術家の作品制作を支援した住民に「オラが作品」という意識が生まれ、芸術論を語り始めたり、来場者にお茶をサービスするなど主体的な取組が生まれた。
クリエイティブサポートレッツ （表現未満、プロジェクト）	障害福祉施設において、誰もが持つ自分を表す力、行為を「表現未満、」と評して大切にする文化活動を展開し、創造的行為を行う主体を増やすことが、社会包摂へのアプローチとなることを示唆した。

(3)全体評価

他の支援制度に対する地域密着プログラムの比較優位性や課題等を抽出し、支援制度の改善を図るため、上記（１)、(２）の評価結果に基づく包括的評価を行った。

【結果の概要】

文化・芸術的アプローチを行う事業は、地域社会の課題解決に資するものであり、こうした事業を支援する「地域密着プログラム」の仕組みも有効であった一方、長期的にプログラムが継続していくための運営や人材育成に対する支援が課題として挙げられる。

2015年　文化資源調査

2015

2020年東京オリンピック・パラリンピック「文化プログラム」の県内開催に向けて、本県における文化資源の掘り起こしや活用可能性を検討するための「文化資源調査事業」公募に対して提案のあった39件の中から10件を選定し、提案者との協働調査を実施しました。

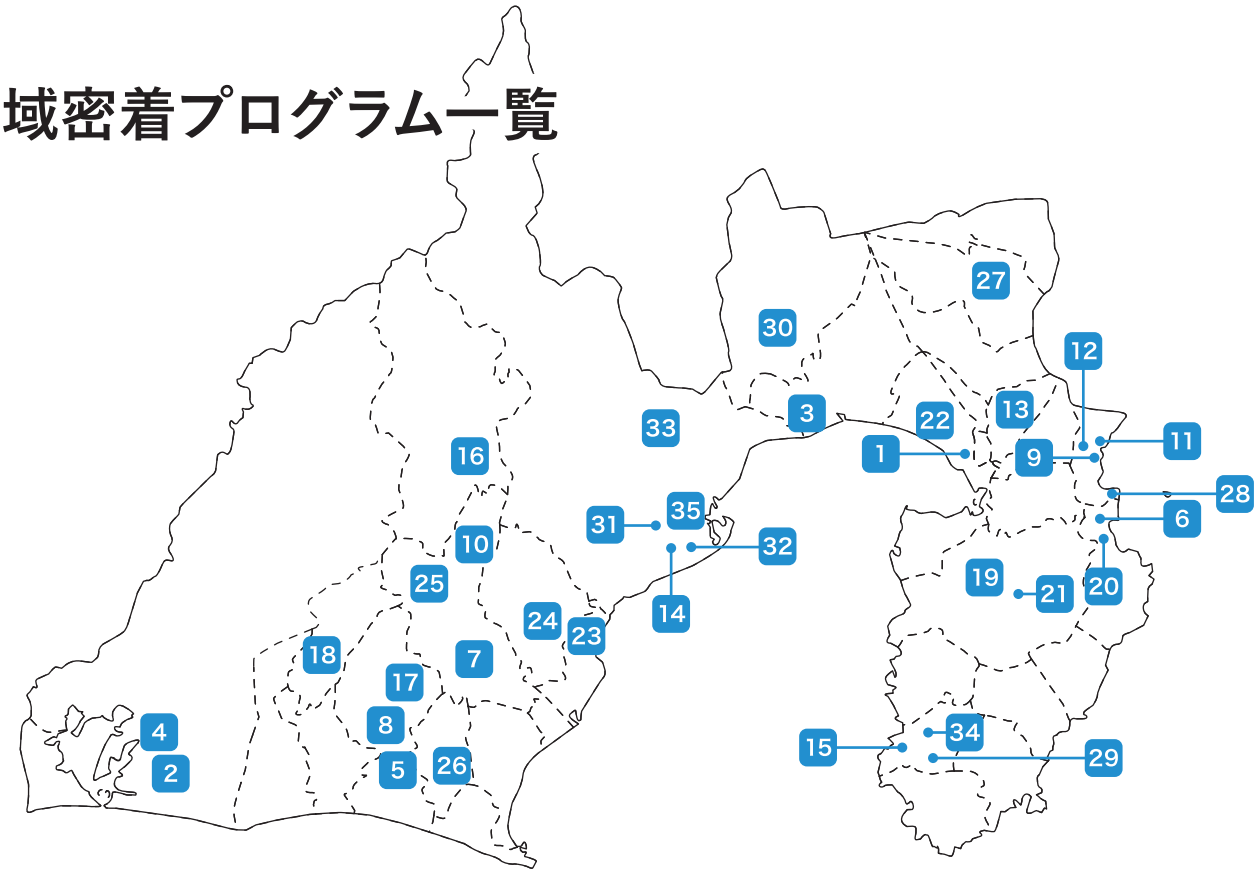
調査結果は、2016年3月27日に静岡コンベンションアーツセンター「グランシップ」で開催された、「スタートアップ・ミーティング：地域の文化資源を生かした文化プログラムを考える」にて報告されました。調査報告書は、下記ＵＲＬからご覧いただけます。

ＵＲＬ：http://www.pref.shizuoka.jp/bunka/bk-110/bunkashigentyousa.html

選定一覧

No.	提案者	地域	名　称	内容	区　分
1	こども アートスタジオ プロジェクト	浜松市	実践的なアート系ワークショップの実施、展開、ワークショップスキル開発のための調査	アート系ワークショップのプログラムの現状や課題についてヒアリング調査し、ワークショップが継続的・持続的に実施できる環境やネットワークづくりに活用する。	ワークショップ
2	PUDDLE SPLASH	浜松市	Puddle Textile：注染染めの別軸展開の可能性調査とワークショップ型の普及手段開発	浜松の伝統産業「注染（ちゅうせん）」の新たな展開のため、デザイナー、メーカー等へのヒアリング調査を行うとともに、普及のためのワークショップで活用する注染体験用の道具を設計。	ものづくり、 ワークショップ、 伝統文化
3	シズオカ オーケストラ	静岡市	インバウンド旅行者を地元住民がおもてなし 「みんなのnedocoプロジェクト」	地域の公民館等を宿泊場所として旅行者を受け入れ、地元住民がもてなす「みんなのnedocoプロジェクト」の経験を生かし、文化プログラムを補完する“おもてなし”プロジェクトとしてのノウハウ等をマニュアル化し、県内各地での展開を目指す。	観光振興
4	海藻おしば協会	伊豆市	伊豆半島は海藻の宝庫 ―海の森からの贈り物―	伊豆半島で400種類以上の生育が確認されている海藻を活用するワークショップを通じて、参加者の関心をアートとしての海藻の美しさから背景にある環境問題に向けていくためのスキル開発、人材育成のための方策を調査・検討。	他分野連携、 ワークショップ、 生活文化
5	株式会社 玉川きこり社	静岡市	Let's開墾＆茶畑リノベーション！ ～山村の可能性を探る～	静岡市玉川地区をモデルとして、中山間地の耕作放棄地活用について、アーティストが参画し自然を活用する子どものワークショップのプランニングを通じて検討する。担い手は、若き「木こり」たち。	他分野連携、 ワークショップ、 生活文化
6	浜松市根洗学園 （社会福祉法人 ひかりの園）	浜松市	おとからだプロジェクト―アーティストと作業療法士による、子どもの運動機能へのアプローチ手法開発―	障害福祉施設において、音楽家やダンサーと作業療法士による協働プログラムを通じ、子どもの運動機能へのアプローチ手法開発を目指す。	他分野連携
7	特定非営利 活動法人 クリエイティブ サポートレッツ	浜松市	文化芸術による障害のある人などのソーシャル・インクルージョン推進調査	文化・芸術を通じた障害のある人等のソーシャル・インクルージョンを推進するため、文化施設での実験的イベントを通じてソーシャル・インクルージョンの拠点づくりの可能性を調査・検討する。	ソーシャル・インクルージョン
8	企業組合くれば	島田市	中山間地に伝わる暮らしの中の伝統行事等の日本文化と国際陶芸フェスティバルで積み上げてきた国際交流のコラボレーションによる文化プログラム	「国際陶芸フェスティバルinささま」で得た国際交流経験を生かし、中山間地の魅力を活用した外国人来訪者増加のための手法について調査・検討する。	観光振興、 他分野連携、 伝統文化
9	富士の山 ビエンナーレ 実行委員会	富士市	洋紙製造発祥の地の歴史文化発信と包括的地域ストーリーの構築	明治時代中期に日本で初めて洋紙が生産された富士市鷹岡地区に現在も残る工場施設等を活用した地域の歴史ストーリー作成や文化情報発信のため、関連施設へのヒアリング調査等を行う。	他分野連携
10	オルタナティブ スペース・ スノドカフェ	静岡市	静岡県在住の外国籍アーティストの可能性を探る	県内在住の外国人アーティストに対するヒアリング調査を行い、アートを介在させることによる日本人ー外国人、外国人ー外国人の交流とコミュニティの相互理解の可能性について調査する。	ソーシャル・インクルージョン

地域密着プログラム一覧



No.	実施者	実施地域
1	Scale Laboratory	沼津市、三島市、熱海市など
2	特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ	浜松市
3	富士の山ビエンナーレ実行委員会	富士宮市、富士市、静岡市
4	浜松市根洗学園 （社会福祉法人ひかりの園）	浜松市
5	特定非営利活動法人 日本地域部活動文化部推進本部	掛川市
6	特定非営利活動法人 ACT.JT静岡支部	伊東市、伊豆の国市
7	特定非営利活動法人 クロスメディアしまだ	島田市、川根本町
8	かけがわ茶エンナーレ実行委員会	掛川市
9	一般社団法人Meets by Arts	熱海市
10	企業組合くれば	島田市
11	熱海未来音楽祭	熱海市
12	一般社団法人熱海怪獣映画祭	熱海市
13	しゃぎりフェスティバル実行委員会	三島市
14	静岡市文化・ クリエイティブ産業振興センター	静岡市
15	松崎町のうたを育てる会	松崎町
16	川根本町伝統文化保存会	川根本町
17	原泉アートプロジェクト	掛川市
18	ふじのくにラボ	浜松市、森町

No.	実施者	実施地域
19	KURURA 制作実行委員会	伊豆市
20	Usamiフェス実行委員会	伊東市
21	Cliff Edge Project	伊豆市
22	こころのまま	沼津市
23	焼市	焼津市
24	藤枝宿世代をつなぐ 商店街づくり実行委員会	藤枝市
25	KAWANE夏祭り @BIGNATURE実行委員会	島田市
26	劇団静岡県史	菊川市
27	御殿場市東山旧岸邸	御殿場市
28	特定非営利活動法人 熱海ふれあい作業所	熱海市
29	松崎町「絲」concept	松崎町
30	富士山舞台芸術楽団	富士宮市
31	株式会社SBSプロモーション	静岡市、焼津市、三島市など
32	登呂会議	静岡市
33	株式会社玉川きこり社	静岡市
34	特定非営利活動法人伊豆学研究会	松崎町
35	シズオカオーケストラ	静岡市

※2016年度は、2017年度からの本格展開に向けたモデルプログラムとして10団体10事業を支援し、2017年度から2020年度までの４年間は、33団体延べ70事業を支援した。

「対話と演出」をプロデュースして、変化するまちをつくる

実　施　者	Scale Laboratory
プログラム名称	2016年度 パフォーミングアーツ公演を軸とした移動型実験的芸術プログラムの実践 2017年度 伊豆半島アートキャンプ～暮らしと芸術をつなげ人や場所の潜在能力を開拓する 2018年度 伊豆半島アートキャンプ 2019年度 となりのアーティストプロジェクト～地域を拓き、可能性の扉を開く～ 2020年度「ながめくらしつ連続公演『…の手触り』
実　施　地　域	静岡県東部地域

1

2016　2017　2018　2019　2020

沼津ラクーンで2016年に行われた狂言のワークショップ。「初めてのヤットナ!!」公演に併せて実施され、多くの方が参加した

プログラム概要

伊豆半島各地の空き店舗等の遊休施設を「劇場」として活用する舞台公演等を通じて鑑賞機会を創出するとともに、地域の新しい風景として定着させ、発信力、誘引力を強める。さらに、文化・芸術活動に従事する人材の育成、ネットワーク化を図り、プロの人材が活躍できる環境の実現を目指す。2020年度のコロナ禍においては、ウィルスに対応したオンライン配信を中心とする事業に切り替えたが、「見えない、見えにくい方」へ作品を変化させて新たなプロデュースを試みた。

コーディネーターによる振り返り

ブンプロ（静岡県文化プログラム）のスタートとほぼ同時に活動を開始した「Scale Laboratory（スケラボ）」。スケラボの5年間の活動が、どのような変化を生んだのか考えたいと思う。

ブンプロの軸となるテーマ「地域（社会）課題との対応」とは、少々上滑り気味に見られていたスケラボのプロジェクト。沼津市、三島市を中心とした県東部での活動を続けて行く中で、見事に「課題」に対応したプログラムを運営する団体へと変わっていった。

実は課題であったのは、「アートが足りない」地域であったことであり、「足りない」ことを顕在化させたのが、スケラボの活動による成果である。この逆順的な課題との関わり合いは、アートが持つ力として期待されている「可能性」や「効果」を、活動を続けることで示してこられたと考えている。

アートは課題を直接解決する術ではない。課題を顕在化させ、その課題に向き合い、思考を重ねるきっかけ作りとして、アートが有効な手段の一つだと考えている。スケラボは手法として「対話と演出」を取り入れ、巡り巡って地域の方々と課題に向き合うスタイルを築き上げた。

このスタイルに共感した方々が、スケラボのスタッフとして加わったり、運営のサポーターとなったり、プロジェクトを依頼したりと、共感の波紋が広がっている。スケラボの活動を通して、身近にアートを体験できる環境となった東部地域では、「足りない」から「魅力ある」へと変化し、心が満たされた人が増えてきていると聞いている。今後も、逆順的にアートの可能性を追求して行くであろうスケラボの活動に、注目していただきたいと思う。

「あたりまえ」から「あるがまま」へ

実　施　者	特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ
プログラム名称	「表現未満、」プロジェクト
実 施 地 域	浜松市および全国

2

2016　2017　2018　2019　2020

「スタ☆タン!!Z」参加者のパフォーマンスの様子

プログラム概要

「表現未満、」とは、社会的に広く認められた作品や作者だけを「表現」とするのではなく、一見取るに足らない行為と思われてしまいがちな個人の生活文化を、「表現みたいなもの＝表現未満、」と捉え直すことで、その人のありのままを認めていこうとする文化活動である。

どこでも！だれでも！雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!Z」やタイムトラベル100時間ツアー観光案内所」など「新しいフレームから世界を見てみる」というコンセプトの複数のプロジェクトで構成されている。

コーディネーターによる振り返り

2000年の設立から一貫してソーシャルインクルージョンを目指して活動しているクリエイティブサポートレッツは、お互いに尊重していこうとする文化活動「表現未満、プロジェクト」をブンプロと共に2016年から育ててきた。その活動は2017年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を代表の久保田翠さんが受賞するまでに注目を集め、アートが社会福祉、地域包括、社会包摂などの分野の構造を変えられることを世の中に示すまでになった。

通常、障害者福祉施設への訪問者は限定的だが、文化事業を行うことで多様な他者との出会いを生み出すことができる。その延長線上に「知らない」ことによる差別を防ぐだけでなく、訪問者が施設利用者を通じて自己を見つめる機会や、彼らのありのままの存在を肯定する「場」の提供につなげている。つまり「表現未満、」は福祉施設利用者に宿る創造性を「文化」として肯定し、同時に私たち自身の創造性や主体性を生み出す装置にもなっているのだ。今や「表現未満、」プロジェクトは施設の外に飛び出し、全国展開、いや世界展開に足を踏み入れている。

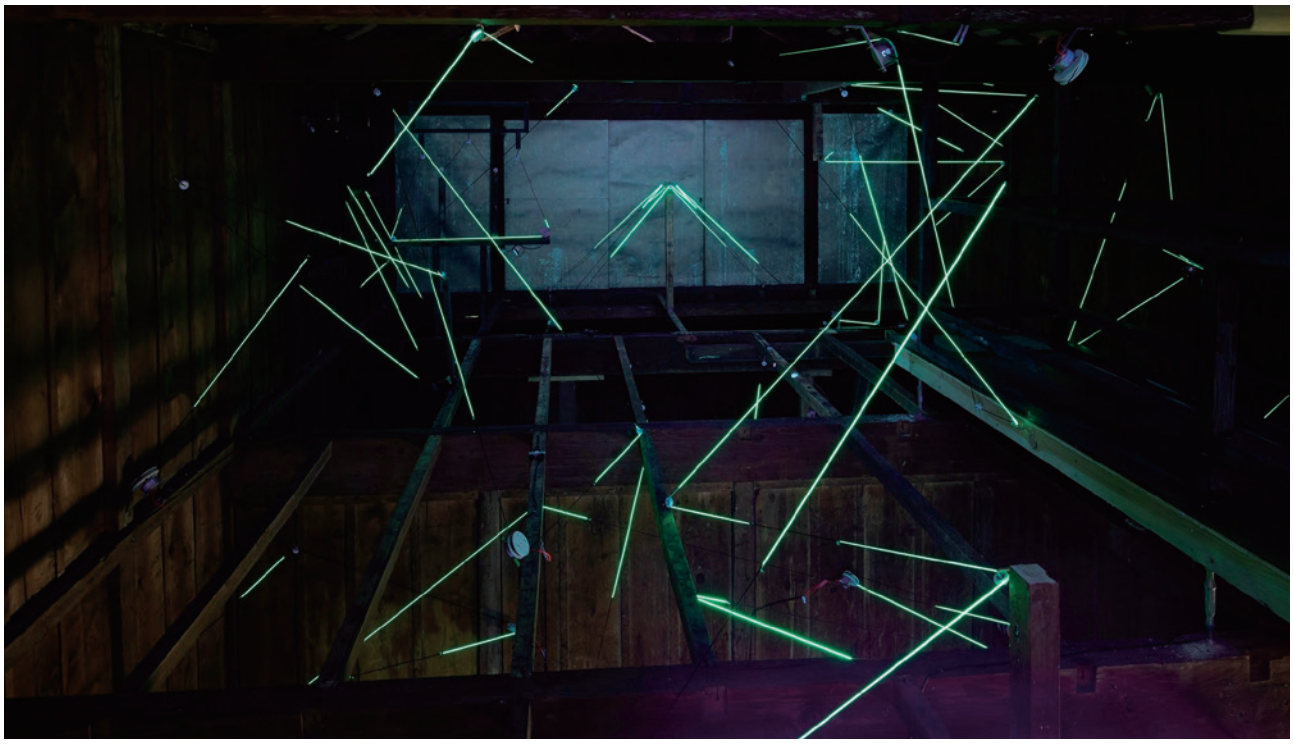
また、これまでのサポートの総決算としてのリサーチプロジェクトでは、膨大な活動記録を気鋭の研究者たちがそれぞれの専門分野から論じ、意味づけることで、改めて俯瞰的にレッツのアートの文脈における位置や意義が明確となった。今後の研究における発展も期待される。

地域住民が手がける芸術祭が求めたのは、再び芽生えるまちの意識

実　施　者	富士の山ビエンナーレ実行委員会
プログラム名称	2016年度 するがのくにの芸術祭 ～富士の山ビエンナーレ2016～ 2017年度 富士の山ビエンナーレ 2018年度 駿河の国の芸術祭　富士の山ビエンナーレ 2019年度 レジデンス事業　Fujinoyama ART HUB 2020年度 富士の山ビエンナーレ2020
実　施　地　域	富士市・富士宮市・静岡市

3

2016　2017　2018　2019　2020



今は使われていない加藤酒店の蔵に浮かぶ富士山。原倫太郎「機械ゴーストの空間ドローイング」

プログラム概要

富士宮市、富士市、静岡市を舞台に、行政区域を超え現代アートを通じ地域の魅力を最大限に発揮しようと市民有志が取り組む芸術祭。

富士山や駿河湾といった自然環境と、産業構造の変化などから、地域ストーリーの構築を軸に地域資源の発掘に力を入れる。

芸術祭を実施することで、創造産業振興やアーティストやアートマネジメント人材の育成を担い、地域資源を再開発し新しい価値の創出を狙う。

コーディネーターによる振り返り

「富士の山ビエンナーレ」のテーマの柱として、「現代アートの理解促進」と「地域課題の顕在化」が挙げられる。この2つのテーマを並べた時「さて、他の地域芸術祭と何が違うの？」と誰もが思い至るであろう。特徴となるのは、実行委員は地域企業の経営者がほとんどで、地域への愛着がとてつもなく深いということである。現代アートの魅力や可能性を信じ、また課題を持つ地域の住民という当事者であることが、「自分たちの手で、自分たちの信じる力を用い、自分たちの地域を良くしよう」という強い意思を持ってアートプロジェクトの立ち上げに繋げている。

「富士の山ビエンナーレ」では、若手作家の発表の機会として会場を提供すると同時に、地元の作家の公募も行なった。作家たちは作品制作のため富士山の見える各市に滞在し、土地が持つ物語と自身の作品性を融合させ、空きビルや歴史的建造物で展示を行った。観客は作品を鑑賞することを目的にまちなかを歩くことで風景を感じ、現在の営みや過去からの歴史を知ることができる。地域住民は作家の受け入れや観客への案内の必要性から、より地域へ精通することが課せられた。「富士の山ビエンナーレ」というひとつのアクションが、地域に人を呼び地域内での交流を促し、立場を超えたさまざまな人が関わることで地域の魅力を掘り起こし、作家も地元住民も共に誇りを持って地域の紹介を行うことに繋がった。

コミュニケーションの幅を広げ、子育てを拡充

実　施　者	浜松市根洗学園 （社会福祉法人ひかりの園）
プログラム名称	2016年度 浜松市根洗学園アートプログラム ～何に気付き、どのように意味づけるのか、思い込みからの解放～ 2017年度 療育とアートの混ざり合い ～ひと・もの・こと・出会いが織りなす場づくり～ 2018年度 療育とアートの混ざり合い ～多様なコミュニケーションの形～ 2019年度 わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション～ 2020年度 子育て×療育×アーティスト×わたしの関わり ～“わたしなり”の試行錯誤と発見、自信をもつためのプログラム～
実 施 地 域	浜松市

4

2016　2017　2018　2019　2020

子どもの絵をもとに親が実際のお弁当をつくる、家庭に一味違うコミュニケーション機会を生む「おべんとう画用紙」

プログラム概要

発達がゆっくりな子どもに対して療育支援を行う福祉施設である浜松市根洗学園が実施した、アーティストの思考を取り込むことによる福祉現場の拡充をねらったプログラムである。

大きく分けて2種類のプログラムが展開された。

子どもが描いた絵をもととして、家族が実際に弁当をつくる「おべんとう画用紙」や、親や先生から聞き取ったエピソードの中に“子育ての技”を見つけ出し、俳優たちが演じる映像作品とする「scenery（シーナリー）」、響きがよく手に入れやすい段ボールを探り出すところからスタートした「段ボールドラム」など、アーティストが施設に滞在することによってアイディアを膨らめ、施設関係者らと一緒に作り上げるもの。

演劇、音楽、ダンス、作業療法の講師を迎え、“親子”、“子育て中の母親”、“一般”など対象を変えながら、コミュニケーションをテーマとしたワークショップを実施する、体験を通じて気付きを促すタイプ。

アーティストの感度や臨機応変さに期待し、福祉とは全く別のアーティストの専門的知見からもたらされる発見を狙いとしている。異分野ならではの視点を活用し、地域社会の中でアートが活躍する場面を拡大した。

コーディネーターによる振り返り

福祉とアートの組み合わせというと、障害者アートなどの当事者の表現を連想することが多いが、浜松市根洗学園の取組は、福祉（療育）の本業である支援とアーティストの思考を組み合わせたものだ。ワークショップや作品制作を通じて、アーティストの物事の捉え方や発想にふれ、支援者や親のまなざしに広がりと深みを与えようとする試みである。福祉もアートも積み重ねた蓄積が多く、歩み寄ることの困難はあるが、コミュニケーションを対象として双方の接点を見出す手段に大きな期待を寄せている。

最小単位の社会づくり 人づくり地域づくりを 課外活動から

実　施　者	特定非営利活動法人 日本地域部活動文化部推進本部
プログラム名称	2017年度 地域部活 “音楽×演劇×放送”文化創造部 2018年度 掛川未来創造部　Pallete 2019年度 新時代の「課外活動」への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部 Palette～ 2020年度 新時代の「課外活動」への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部～Palette～
実 施 地 域	掛川市

5

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

「地域部活」に参加している部員たち

プログラム概要

多様な文化芸術の学習体験が可能な新たなモデルを、地域と学校をつなぎながら、新時代の課外活動として学校の外に中高生対象の「地域部活」を新たに創設。参加する高校生たちが学校を卒業した後も継続して参加できるサポートチームを編成し、当プログラムと並走する形態をとる。母校ではない「地域部活」に対して自らが大学生や社会人になった後も活動に積極的に参加できる仕組みは、従来型の部活動とは大きく異なる。

新時代の「課題活動」を経験した子どもたちが大人になった際、大学生や社会人のサポートチームが一層発展していけば、若者世代の中に職場では仕事をこなし収入を得ながら、それ以外の時間ではサポートチームに参加することで、職場では経験できない充実感と共に地域の文化コミュニティの中で人的なネットワークを築けることが、将来に渡って貴重な財産を築くことができる。

目指すのは現在の部員が30～40代を迎える2040年代である。地域文化の担い手が育成され、多彩な文化との寄り添い方が地域の中に芽生え、これまでのような大会等の発表活動に偏重せず、様々なアプローチがあり、新たな創造も行われるなど、市民生活やコミュニティの中に豊かな文化が育まれる道を切り拓いていく。

コーディネーターによる振り返り

「地域部活」。「部活」から想起するのは対象者が中学生や高校生、と考えるだろう。しかし、このプログラムの想定は大人になってからも「部活」に参加できることだ。この「部活」は、中高生時代、ともに活動する仲間たちと感性を育みあい、大人になってからは次の世代へ感性を引き継ぐというものだ。その循環が生まれる場が「地域」であり、学校単位では出会えない「自分自身とは違う個性」と、技術の上達や競争を目的としない「他者と分かち合うこと」が存在している。これから目指すべき社会の、地域単位としてのモデルである。

郷土芸能が伊豆半島を繋ぐふじのくに大田楽 ～ODORIKOプロジェクト～

実　施　者	特定非営利活動法人 ACT.JT静岡支部
プログラム名称	2017年度 伊豆のODORIKOフェスティバル「伊豆楽」 2018年度 伊豆のODORIKOフェスティバル「伊豆楽」 2019年度 ふじのくに大田楽 ―ODORIKOプロジェクト2020― 2020年度 ふじのくに大田楽 ―ODORIKOプロジェクト2020―
実 施 地 域	伊東市

6

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

ふじのくに大田楽の公演の様子

プログラム概要

ACT.JT静岡支部は、日本の伝統的な文化芸術の活性化と振興を図ることで、街づくりや地域経済の活性化を目指すことを目的とするACT.JTの、静岡県における拠点として活動。「大田楽」とは、日本の中世に数百年にわたり大流行し消えた芸能「田楽」を今日的に再生した作品であり、1998年の初演から毎年100人以上の市民等が参加してきた。本プログラムでは、2017年度以来、「大田楽」をベースに伊豆半島の郷土芸能を一つにまとめた作品を創作し公演を開催してきた。また、2017・2018年度は、伊豆半島各地を訪問し、郷土芸能団体への聞き取り調査により各団体が抱える課題を「伊豆地域郷土芸能現状調査報告書」に取りまとめた。新型コロナ感染症拡大の影響により2019年度の公演は中止したが、2020年度には『高校生が選ぶ伊豆半島イチオシスポットを大田楽で紹介する「大田楽キャラバン映像」』を製作公開、感染症対策をした上で実演と映像を交えて「ふじのくに大田楽」の公演を開催し、オリンピック自転車競技開催地である伊豆地域を文化の祭典により盛り上げた。

コーディネーターによる振り返り

本事業は、伊豆地方の様々な地域の伝統芸能が一堂に集う、出演者や観客にとって貴重な場として育っている。また、「伊豆地域郷土芸能現状調査」を行ったことで、「少子化」や「地域の変化」などによる地域郷土芸能への参加者の減少が浮き彫りとなった。様々な課題を持つ各地の団体にとって、他団体との交流の場が生まれ、現状を改革するための重要な機会となっており、若手への伝承を課題とした「長泉知徳高校」との共働では、「大田楽」を通じて、次世代が地元資源への興味を持つきっかけを作った。2020年度は、新型コロナの影響により、各地で地域芸能、伝統芸能が活動できず、映像を交える形に変えての公演開催となったが、だからこそ市民にとって大切な地域の文化や伝統、芸能を忘れない大切な時間となったのではないか。

無人駅がひらくと地域がひらく
―予期せぬ出会いと化学反応

実　施　者	特定非営利活動法人 クロスメディアしまだ
プログラム名称	2017年度 UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2018 2018年度 UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2019 2019年度 UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2020 2020年度 UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2021
実　施　地　域	島田市・川根本町

7

2016　2017　2018　2019　2020

ヒデミニシダ《境界の遊び場Ⅱ／ちゃばらのカーテン》2021年　抜里地区　撮影：鈴木竜一朗

プログラム概要

島田市周辺のまちづくりを行うNPO法人クロスメディアしまだが主催する「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」は、大井川鐵道沿線の無人駅とその周辺にある集落を舞台に開催する芸術祭である。

SL（急行）が止まらない無人駅に光を当て、その周りに広がる集落の営みや資源をアーティストによって掘り起こし、作品として表現する。この過程を「ほりおこす」「あらわす」「ともにひらく」の3つのフェーズとして捉え、過疎化した地域に人を呼び込み、住民の地域に対する誇りをはぐくむ機会をつくっている。特に「あわらす」のフェーズでは、アーティストの作品制作を率先してサポートする住民の姿があり、自然と「おらが作品＝私の作品」といった意識が生まれている。それが会場運営や来場者への作品案内等の「ともにひらく」のフェーズへと結びつき、本芸術祭の根幹ともなっている。

また、住民だけに限らず当該地域で活動していきたい人々とともに「あんまん部（サポーター）」として関係づくりを行うとともに、2020年度からは、市民が主催する文化芸術の取組を後押しする「アートプラット／大井川」、アーティストが芸術祭会期以外にも地域に関わるきっかけづくりを目的とする「地域コレクティブARTDROPS」を立ち上げ、当該地域の関係人口創出に力を入れている。

コーディネーターによる振り返り

アーティストは、さまざまな地域の資源に目を向ける。それがときにネガティブな要素だったとしても、貴重な表現として歓迎するクロスメディアの懐の深さは本当にすごい。視点を変える逆転の発想で、地域や社会と対峙する機会とする。それができるのは、この団体が長年にわたり、地域との関係づくりに奔走してきたからこそに違いない。

これまで多種多様な作品が生まれたが、「人」に焦点を当てたものが多くあるのも特徴だ。アーティストにとって、地域を陰ながらに支える住民は、他にないほど示唆に富んだ存在であり、また住民にとっても、アーティストを支えることが楽しさや生きがいにつながっている。こうした普段とは違った出会いが、相互に予期せぬ化学反応を起こし、地域や人を動かす力になっていくということを、本芸術祭は物語っているのである。

自主的な市民活動の芽を開花させるまちづくり芸術祭

実　施　者	かけがわ茶エンナーレ実行委員会 8
プログラム名称	2017年度　かけがわ茶エンナーレ2017 2018年度　かけがわ茶エンナーレ 2019年度　かけがわ茶エンナーレ2020 2020年度　かけがわ茶エンナーレ2020
実施地域	掛川市

2016　2017　2018　2019　2020

船井美佐《Comet —大地をひらく 星をみあげる—》
制作年：2017年　素材：ステンレスミラー　協力：五明茶業組合

プログラム概要

「かけがわ茶エンナーレ」は、掛川市の地域資源である「茶・茶産地」と「アート」を融合し、地域の魅力を再発見することを目的とした芸術祭だ。

2015年策定の「掛川市文化振興計画」で重要プロジェクトに位置付けられ、約2年の準備期間を経て2017年に第一回を開催。総合プロデューサーに山口裕美氏を迎え、現代アーティストによる「アートセレクション」と、市民や地元アーティストの公募・推薦による「みんなのミュージアム」の二本立てで実施した。市内6エリアに広く展開し、総勢97組のアーティストが参加したほか、各地で自主的な市民活動も芽生えた。これらを新しい地域資源として根付かせていくため、第二回に至る準備年においても、市民が主体となって企画する「市民プログラム」をメインに、2018年には掛川市民も出演したSPACの野外劇『おおっとええっと ええじゃないか』を上演するなど、市民と文化芸術の接続、同芸術祭の周知や気運醸成に取り組んだ。

第二回は2020年秋に開催予定だったが、コロナ禍により丸1年延期とし、「超日常茶飯事」をテーマに、文化芸術を通してアフターコロナにおける日常のあり方を考える契機となることを目指して準備を進めることとなった。

コーディネーターによる振り返り

全国に先駆けて「生涯学習都市」を標榜した掛川市らしく、市民との協働が「かけがわ茶エンナーレ」の最大の特徴だ。特に力を入れる「市民プログラム」では、市民が自らの思いを形にする機会に貢献している。ここでは資金助成だけでなく、企画内容や収支のステップアップができるよう、事務局が細やかなサポートを行い、市民が継続的に活動できる基盤づくりにも寄与している。

また、市内事業者とのタイアップにも積極的に取り組んでおり、文化芸術を産業（茶産業など）、観光、教育、福祉など、市内の各分野との多面的な連携を図っている。「横断的であること」がこの芸術祭の真髄ではないだろうか。その効果はすぐに現れないかもしれない。だからこそ10年後100年後といった長期的な目線で、その目的と成果が検証されていくことを期待したい。

熱海を実験の場として開放し、アートが根付くまちを目指す

実　施　者	一般社団法人Meets by Arts
プログラム名称	2018年度 アーツプロジェクトスクール for ATAMI ART FAIR 2020 2019年度 アートプロジェクトの「始め方」と「続け方」の学校 2020年度 Meets by Arts @ATAMI
実 施 地 域	熱海市

9

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

受講生による企画のプレゼンテーション（2019年度 アートプロジェクトの「始め方」と「続け方」の学校より）

プログラム概要

一般社団法人Meets by Artsは、熱海がアートの根付くまちとなることを目指し、地域とアートをつなぐ各種コーディネート業を行う団体として2019年に発足、2020年1月に法人化した。

静岡県文化プログラムでは、2018年度に開催された「アーツプロジェクトスクール@ATAMI ART FAIR」(主催：特定非営利活動法人atamista）を前身として、アートプロジェクトを自ら企画し、事業として継続展開することができる人材・組織を育てることを目的とした短期集中型のスクールプログラムを実施。アートプロジェクトの現場の第一線で活躍するディレクターやマネージャーをメンターに迎え、受講者の個別のニーズや思い、社会や地域の変化を丁寧に受け止め、柔軟にフォローできる体制をとっている。

2020年度はコロナ禍により、これまでこだわってきた「現地合宿形式」ができない状況に見舞われ、初めて「オンライン形式」に切り替えることとなった。メンターを依頼した熊谷薫氏と平井宏典氏とともに、カリキュラムを「個人」の内面を深める方向で組み直したことにより、一人一人が具体的かつ現実的な企画を立てることができ、スクール終了後も実現に向けて動き出している。

コーディネーターによる振り返り

Meets by Artsが考えるアートの役割とは、「異なる価値観や視点と出会う機会を創出すること」。アートが地域に根付くことによって、観光だけに頼らない新しい地域資源を発掘する可能性を持つ。

他のプログラムに比べて参加者は小規模ながら、地域内外から集まった受講生が熱海やアートについて喧々諤々議論する中には、地域の人々は見過ごしているかもしれない熱海の魅力がたくさん詰まっている。

人に関わる事業は長期的な視点が不可欠だ。アートプロジェクトは企画して終わりではなく、実施してはじめてその喜び、楽しさ、やりがいを感じることができる。実現に至るまでには、まだまだたくさんのハードルがあるだろうが、Meets by Artsが彼ら受講生にとっていつでも頼れる相談役として、これからも引き続き活躍してくれることを期待したい。

中山間地の日常の魅力を探り、“ならでは”の文化として仕立てる

実　施　者	企業組合くれば
プログラム名称	2016年度 小さな山村から世界への発信 2019年度 WABISAVILLAGE SASAMA ―視点を変え、文化の力で持続可能な村づくり― 2020年度 WABISAVILLAGE　SASAMA ―ささま音風景プロジェクト―
実　施　地　域	島田市

10

2016　2017 | 2018　2019　2020

島田市を北上し川根本町に入る直前、笹間川に沿って脇道に入った先の山間にある集落

プログラム概要

2011年から続くささま国際陶芸祭でも知られる笹間を舞台として、その日常に目をむけて、地域の魅力の発掘と創造に取り組むプログラム。世界各国から陶芸家、陶芸関係者が集う非日常をつくり出す陶芸祭に対して、日常の魅力を発信することにより、移住定住を促していこうとしている。

地域の食文化に目を向けたことを皮切りに、質素で静かな物事の中に美しさを探り、ささまのアートを見い出すための事業を実施した。

2019年には、海外作家、国内作家それぞれの視点による作品展示を実施。またスウェーデンのライフスタイルに注目し、この地域で幸せに暮らすことを考え、それをコンセプトブックにまとめた。

2020年は、軸の定まってきたコンセプトの下、ピアニストの牧村英里子さんを招聘した。地域に長期滞在し、アーティストとしての目線で町の日常を切り取り、映像や写真などを交えたパフォーマンスを町の人達の前で公演した。そのパフォーマンスは、ジャンルにとらわれず本質的なことに根ざした発信を志す「ささまオペラ」の片鱗を感じさせるものであった。

コーディネーターによる振り返り

大きなイベントを手掛けているとつい抜けてしまいがちになる、日常生活へのまなざしの大切さを意識し、国際陶芸祭と両輪とするべく取り組んでいる。立地や町の規模も多分に関係すると思うが、プロジェクトが動くと、自然と住民との交わりが起こり、それぞれの創造性へアプローチしやすい状況が生まれる。地域の創造性がアーティストの力と共に発揮されることを今後も期待したい。

異空間が立ち昇る未来へと熱海がつなぐ音世界

実　施　者	熱海未来音楽祭
プログラム名称	2019年度 第1回熱海未来音楽祭 2020年度 第2回熱海未来音楽祭
実 施 地 域	熱海市

11

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

熱海のサンビーチにドアが現れ海辺のパフォーマンスも楽しめる音楽祭となった　写真 木村雅章

プログラム概要

ジャンルに当てはまらない、どこの国のものかわからない、でもなにか魅力を感じる、心に残ってしまう、まさに未来を拓く力を持つ音楽祭を、日本を代表する歴史ある温泉観光地である熱海で開催。即興を中心とした、世界的に活動する音楽家が集い、温泉の町・熱海のざわめきを演奏に取り込み、踊る身体に染み込ませ、未来の音楽、未来の表現をテーマに、観光で訪れた人と熱海に暮す人々が出会い、交流する場を創出する。現代と過去の入り交じる異空間・熱海の風景や、温かく懐の深い熱海の人々の魅力も、公演を通じて発見し、味わってもらう。国境を越え、皮膚を越え、耳を越えて、世界と日本、静岡へとつながっていく、広がりのある音楽祭である。

コーディネーターによる振り返り

振り返ると昨今のコロナ禍の中、中止や大きな変更を伴わずに事業を実施できたのが「第2回熱海未来音楽祭」だ。「何としてもやる」「何をしてもやる」という、音楽家・巻上公一氏の意気込みとエネルギーが、実施へと前進させたのだと感じた。熱海市役所からサンビーチまでのパレードでは、舞台美術家・長峰麻貴氏が指南役となりワークショップで作成した神話をモチーフとした“フェイスシールド”を被り、ちんどんの調べとともに今も懐かしさが残る街角を練り歩いた。

サンビーチでのパフォーマンスでは小説家・町田康氏のテキストによる「海辺の兎に角」を披露。目の前のダンスや音楽と、スマホから聞く巻上、町田両氏による上演サウンドが一体となり、ビーチが物語の舞台へと一変。偶然通りかかった観光客も、興味津々で参加していた。

「LAND FES」もプログラムに加わり、熱海の穴場、秘密の場所を音とダンスで魅力的に演出。映像を制作し配信を行なったが、洗練されたお洒落なプロモーションビデオとして今後期待できそうだ。

回を重ねるごとにアーティストならではの表現を使って、熱海の魅力を増している音楽祭。アーティストの描く未来を今後も見続けたいと思う。

現実になりつつある「熱海を怪獣の聖地に」

実　施　者　一般社団法人熱海怪獣映画祭　12

プログラム名称　熱海怪獣映画祭

実 施 地 域　熱海市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

会場のひとつ、国際観光専門学校熱海校にて

プログラム概要

「キングコング対ゴジラ」（1962）の最終決戦の場になり、「大巨獣ガガッパ」（1967）が上陸した場として描かれている熱海は、怪獣映画関連のクリエイターも在住していることもあって、そもそも怪獣とは所縁の深い土地であった。そんな熱海で2017年に「熱海を怪獣の聖地に」を合言葉に地元の有志が集まり企画が始動、翌年にクラウドファンディングを実施して開催にこぎつけたのが「熱海怪獣映画祭」である。

本映画祭では、これまでに話題となった怪獣映画や熱海が舞台となった怪獣映画のみならず、新たな才能を発掘する場となっている「全国自主怪獣映画選手権」の上映、さらには現代音楽史における怪獣音楽の価値を再確認する「ゴジラ伝説　熱海絶対防衛ライブ　PHASE2～楽園の守護者」、トークショー、新怪獣お絵かきコンクール、動画コンテンツ配信「あたみ怪獣まち歩き」など映画以外のプログラムも豊富に揃え、まさに「怪獣の聖地熱海」にふさわしい内容の充実と存在感を備えつつある。

コーディネーターによる振り返り

「怪獣映画」という誰しもが持つノスタルジーと、若い人には新鮮な響きを持つ強さ、怪獣映画と熱海との関わり、そして昭和を感じさせる街の空気が絶妙にマッチし、本映画祭は怪獣映画の熱狂的なファンでなくとも街にとって「気になる」存在として地元に伝染しつつある。

熱海のアートシーンを牽引する存在に育った本映画祭の特異点とは何か。それはボランティアの熱量と地元との関係づくりである。

地元ボランティアが積極的に様々なアイディアを提案し、そして実行する、という軽快さが、映画祭の包容力につながっている。また10店舗を超える飲食店が「応援メニュー」として提供、協賛スポンサーも地元企業やお店、メディアが名前を連ねている。徹底的に地元との関係づくりにこだわっている様子が見えてくる。

また熱海で撮影された怪獣映画以外の映画上映や、市民参加のシーン撮影など、単なる上映から、熱海からの新たなコンテンツ発信も増えつつある。今、熱海には映画館がない。本映画祭をきっかけに映画館ができたらこんなに痛快なことはないだろう。

「本気で楽しむ」から生まれる、伝統をつなぐエネルギー

実　施　者	しゃぎりフェスティバル実行委員会 13
プログラム名称	2019年度 第三回しゃぎりフェスティバル 2020年度 第四回しゃぎりフェスティバル
実 施 地 域	三島市

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

三島スカイウォークで開催された第4回しゃぎりフェスティバルの様子

プログラム概要

静岡県三島市の伝統芸能のひとつである「しゃぎり」は、鉦（かね）、太鼓、笛を使った祭囃子（まつりばやし）を指す。その歴史は、起源となる「お囃子」の発祥から数えると約450年、「しゃぎり」自体が生まれてからは約220年が経過していると言われ、市内の最も大きな祭事である三嶋大祭りや、各町内のお祭りや行事ににぎやかな華を添えてきた。現在も市内約7割の町内で保存会を持ち、この「しゃぎり」を中心としたコミュニティが、地域の防犯・防災等で重要な役割を担っている。

その一方で、首都圏からの人口流入や少子高齢化等の時代の変化により、「しゃぎり」に対する地域住民の認知度が低下し、継承者が不足しているという課題もある。そのような中で2018年に設立した「しゃぎりフェスティバル実行委員会」は、各町内会のしゃぎり保存会が会員となり、①周囲の理解、②自己研鑽、③後継者育成の三要素を柱とした事業を行う。サイロ化したコミュニティのなかにある「しゃぎり」を祭りから切り離し、一つの芸能として集めてパッケージ化することで、「しゃぎり」の魅力を広く伝えていく活動に取り組んでいる。

コーディネーターによる振り返り

「しゃぎりフェスティバル」を見ていると、当事者が心から楽しんでいる様子が印象的だ。彼らにとって「当事者」の減少は大きな課題だが、周囲との二分化をしっかりと受け止めつつ、「しゃぎり」の楽しさをポジティブに発信することでその魅力を伝え、地域内外にファンを増やしている。

2020年度はコロナ禍により練習すらままならない時期もあった。その中でもできることを常に模索し続ける「しゃぎりフェスティバル」の姿勢は、各町の「しゃぎり」はもとより、他の地域の伝統芸能を守る人々をも勇気づける存在になったはずだ。彼らは、今まで「町」という小さな単位の内にしかなかった文化を、隣りあう町・地域で互いに共有し認め合う土壌を育もうとする人々であり、この熱量こそが、逆境に負けないしなやかで強い意思と姿勢を支えているのである。

地域でつくる創造的身体表現のお祭り

実　施　者	静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター
プログラム名称	七間町ハプニング
実施地域	静岡市

14

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

The Carnival – 獣害リサーチプロジェクト

プログラム概要

静岡市中心市街地の食とアート＆カルチャーゾーンとして注目を集める七間町・人宿町界隈の劇場、路上、公園などを舞台としたパフォーミングアーツ・フェスティバル。ダンス、大道芸、演劇などジャンルを横断した創造的身体表現をプロとアマ、出演者と観客の垣根を超えて繰り広げる。

七間町は明治時代には演芸の街として、大正時代は活動写真、昭和になると映画といったようにおおよそ150年に渡りアートやエンターテイメントを通して、人々に日々の活力を与えてきた場所である。そして今、現代的で多様な身体表現「パフォーミングアーツ」がこの街のレガシーを受け継ぐ。

コーディネーターによる振り返り

2019年度はコロナの影響で残念ながら開催中止という判断を取らざるを得なかった。開催に向けて市民、プロのアーティストや企画者、そして七間町の人たちの間に多様な交わりとコミュニケーションのグラデュエーションを見せながらプロジェクトは進んでいたが、最後の大事な「観客」という存在のピースが欠けた結果となってしまったことは重要な問いも同時に残した。

最後の「発表の場」が失われることは、本当に観客と「創造と協働のプロセスを共有すること」の機会が奪われることになるのか？

2020年度のプログラムのひとつ、The Carnival – 獣害リサーチプロジェクトでは、鹿の生息域拡大は深刻な環境破壊を引き起こしているという課題と同時に、鹿は古来の日本社会では神の使いとしても敬われていたという神秘性、人間はそれを食すことで生きるという循環と矛盾をまさに体感することとなった。静岡市文化・クリエイティブ産業振興センターでの展覧会、静岡市上下水道局ピロティから常盤公園までパフォーマーと観客全員で移動、研究者からレクチャーを受けつつ、道中、そして公園でのパフォーマンスを目撃しながら最後には「食べる」行為を観客自らの選択で行う。街を巡ることでその循環をも重ね合わせて体験する、という仕組みだ。

2019年度で残した問いに対して、2020年度のプログラムは、かつての劇場街の歴史の積み重ねがある、この街らしい独創的な一つの答えになっていたのではないかと思う。

町の日常を、町のうたでいっぱいにする

実　施　者	松崎町のうたを育てる会
プログラム名称	2019年度 FULL-SATOプロジェクト ―松崎町と歌を育てる― 2020年度 松崎町のうたを歌おう会
実施地域	松崎町

15

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

2019年12月のコンサートには、出演者、スタッフ、観客あわせて680名が文化ホールに集結した

プログラム概要

ひとつのメロディに、ワークショップ参加者が思い思いに詞をのせることで、町の様々な側面を表すことができる「松崎町のうた」の町内へ普及、定着に取り組むプログラムである。

元々は、町外に住む音楽家や大学教員らが歌をつくるプロジェクトをスタートさせたが、生み出された歌を町内の活動として定着させるために、町民有志が団体を立ち上げた。

老若男女様々な町民を巻き込み100編を越える詞を集め、全町民の1割にあたる680名の町人が集まったコンサートにつなげた。そのプロセスでは、歌う練習会を町内各所で繰り返すことで参加者を募り、地域の祭りや成人式などに出かけて実施したミニコンサートで機運を高め、吹奏楽や琴などコンサートに参加する団体が使う楽器に合う譜面を作成する等、町に根ざした団体ならではの草の根的な活動を精力的に展開した。

2年目となる2020年には、町内放送の時報チャイムのメロディを松崎町のうたに変えたり、子どもが踊れるリズム体操や、高齢者がメロディに合わせて身体を動かす健康体操の振付をつくるなど、松崎町のうたをより町の日常生活の中に埋め込む活動を展開した。

コーディネーターによる振り返り

子どもたちのかわいらしい合唱あり、青年会の野太く強い発声あり、女性たちのやさしげな歌声あり、同じ曲でありながら、歌詞とテンポが違うだけでこうも変わるのか、と驚くほど幅広い楽しさ満載のコンサートであった。また、歌や演奏だけでなく、メロディに合わせた踊りや太極拳なども披露されているのを見て、ここまで1つの歌を使い尽くせるものかと驚いた。しかも、様々な形に変容させ舞台に上げた翌年には、今度は町の日常に入れ込むため、更に変化させていた。町の中に変化をつくる目的のため敢えて内向きにされている事業であり、1つの素材を様々に変化させ、いろいろな場面に展開させたこのプログラムは住民によるアートプロジェクトのひとつのお手本ではないだろうか。

“地域の宝”を後世に受け継ぐためのネットワークづくり

実　施　者　川根本町伝統文化保存会　16

プログラム名称　川根本町伝統文化交流会

実 施 地 域　川根本町

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

伝統文化伝承館　時愛（ときあ）で開催された川根本町伝統文化交流会の様子

プログラム概要

川根本町では、少子高齢化等の影響から年々伝統文化の担い手（後継者）が減り、存続が危ぶまれる状況にある。国指定重要無形文化財である「徳山の盆踊り」や県指定無形文化財「梅津神楽」、年間50回の公演を行う「赤石太鼓」など、地域に伝わる様々な伝統芸能が存在する。町は「地域の宝」である伝統芸能の後世への継承や学びの場の創出を目的として、2019年3月、「伝統文化伝承館　時愛（ときあ）」を建設。これを契機として赤石太鼓保存会を中心に、町内の伝統文化団体により「川根本町伝統文化保存会」を結成。「時愛（ときあ）」を情報発信拠点として活用し、伝統文化の担い手による交流会やワークショップを開催し、後継者不足解消や失われつつある文化の再興、隆起を目指す。また新たな時代に向けての伝統文化を伝承するとともに芸術の域に高めるよう、文化意識の向上を図るための活動を行う。

2019年度は「川根本町伝統文化交流会」を開催し、町内外の伝統文化団体が一堂に会し発表公演を行った。2020年度も引き続きワークショップや伝統文化交流会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止となった。

コーディネーターによる振り返り

太鼓や神楽、盆踊りなど川根本町では多数の伝統芸能があるなか、団体の存続については、他の地域と同様に少子化や人口減少によって厳しい状況である。では一体どうすれば良いのかについて考えるワークショップは、漠然としていた問題点を明確にすることができたのではないだろうか。それぞれの団体の悩みを共有することで、地域での伝統芸能の必要性を参加者が改めて感じ、考える貴重な時間となった。伝統芸能に取り組んでいる人だけでなく、次世代の若者へ芸能の歴史的背景なども含めて「伝える」ことは、地域を理解し地域の「資源」を再認識できるツールになり得るのだ。団体だけの問題ではなく広く地域住民と共に「伝統芸能」を守っていくというスタート地点に立った1年となった。

対話を通じて、サスティナブルな地域社会を思考するアートプロジェクト

実　施　者	原泉アートプロジェクト
プログラム名称	2019年度 原泉アートデイズ！2019 ～泉とともに～ 2020年度 原泉アートデイズ！2020 ～不完全性～
実 施 地 域	掛川市

17

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

野々上聡人《幻の可視化2》2019年

プログラム概要

「原泉アートプロジェクト」は、掛川市北部の5つの集落を合わせた通称「原泉地区」で、現代アートの力を通じて地域の魅力を発掘する活動を行う団体である。サスティナビリティという概念に基づき、人と自然とが共生できる暮らしや物事のあり方を考えるため、アーティスト・イン・レジデンスを軸に据えたアート活動に取り組んでいる。2018年から毎年開催している「原泉アートデイズ！」は、アーティスト・イン・レジデンスを経て制作された作品を、空き家や旧茶工場など地域の中の遊休空間を活用して発表する現代アートの展覧会イベントである。

本プロジェクトにとってのアーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストが地域の人々や自然と関わり合い、プロジェクトメンバーやアーティスト同士の対話を深めていく時間をつくるための大黒柱とも言える。その時間をこの地区で過ごすことで、アーティストには自身が地域といかに関係していくかに意識が芽生え、作品の強度も高まるという循環が生まれている。

コーディネーターによる振り返り

日常性を重視し、何より「対話」を大切にする姿勢が特徴的だ。特に2020年のコロナ禍で生まれた「想像する展覧会」は、そんな原泉らしさを顕在化した企画だった。予期せぬ事態によって各地のイベントが軒並み中止となるなか、当プロジェクトはオンラインを駆使し、遠隔でも国内外の参加アーティストとの対話を絶やすことなく続けた。その結果として、人々が実際に原泉へ足を運べなくても、モノとして直接鑑賞者の元へ制作プロセスを定期的に郵送で届けることで、想いを馳せてもらう独自の企画を発想するに至ったのだ。

さらに当プロジェクトでは、常に自律的な運営をめざして、試行し、進化している点も注目したい。ドネーション制（投げ銭）やアートストア運営（グッズの開発および販売）はその代表的な取り組みであり、資金面での対策としてはもちろんのこと、当該地区の関係人口創出にも寄与している。今後は、彼ら原泉アートプロジェクトが地域の核となることで、コミュニティの輪がさらに広がっていくことが期待されている。

郷土芸能に食の目を入れ、和食の未来をつなぐ

実　施　者	ふじのくにラボ
プログラム名称	2019年度 遠州森町の舞楽・舞楽食 “食文化”次世代に繋ぐ～ 2020年度 絶滅祭食
実施地域	森町・浜松市

18

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

文献から再現されたお膳が並ぶ

プログラム概要

ふじのくにラボは県内で飲食店を営む料理人が集い、地域に紐づいた和食文化を次世代への継承を目的とし、食の観点から伝統芸能に目を向ける団体である。

郷土芸能に付随する食事に着目し調査を実施した結果、祭りには特別な食事が用意されており、神事である舞楽との結びつきも考えられたものだった。山型にもったごはんに箸を突き立てているのは、その典型的な例といえる。通常は死者に供える際の様式で盛り付けられたごはんを食すのは、神に奉納する舞を踊る舞手が人の存在を離れるためとされている。

プロジェクトではこれらを「舞楽食」と名付けたが、文献では材料を手配した記録はあるがレシピまでは確認できないということで、材料と当時入手できたであろう調味料を基にして膳を再現した。しかし、それらは大変手間のかかる作業でもあり、現代の祭事の実施にそぐわない面もあるため、手間や味の側面を考慮したレシピの開発も行った。

文献を紐解き、地元や神社の祭り関係者への調査を行いながら進行したプログラムは、その結果を「絶滅祭食」と名付けた冊子にまとめることをひとつの目標としている。しかし祭り自体が中止せざるを得ない中、十分な取材ができなかったため、現状で集まっている材料を用いて仮組みした完成イメージの作成となった。

コーディネーターによる振り返り

現在、祭事の食事は仕出し弁当やカレー、焼きそばなど手軽に用意ができるものが多いと聞く。準備の煩雑さ、日常生活の多忙さ、費用調達の難しさ等、その要因はいろいろと想像がつく。やりたくてもやれず悔しい気持ちをお持ちの方もいらっしゃるだろう。このプロジェクトでは料理人が自らの専門の範囲を越えて文献を読み、ヒアリング調査を行った。そしてその情報を基に専門性を活用した提案をすることで、地域の未来をひらこうとしている。和食文化への危機感が根幹にある活動だが、専門からはみ出す視野の広げ方は、他の事業にとっても参考になる。

未来への種まき
―子どもと大人が地域で耕すクリエイティブの力

実　施　者	KURURA制作実行委員会
プログラム名称	子どもローカルマガジンプロジェクト COLOMAGA
実施地域	伊豆市

19

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

COLOMAGAサミット0（ゼロ）集合写真

プログラム概要

「KURURA（くるら）制作実行委員会」は、若年層の人口流出やシビックプライドの低さを地域課題として捉え、地域情報誌の制作を通じて、子どもたちが自分の暮らす地域に対し愛着を深める活動を行う。

地域情報誌『KURURA（くるら）』は、伊豆市立修善寺南小学校の授業の一環として2013年に創刊。翌年から伊豆市内の小学4年生から中学3年生にも参加を募り、プロのクリエイターがコラボレーションしながら毎年1冊発行している。

2017年には、これまで複数回参加してきた中高生たちによる「こども編集部」を結成。各号のテーマ設定や取材先の提案、近年では取材先の交渉や講座の企画運営までを担う。さらに2020年に「こども編集部」を卒業した大学生を中心に「コネクトチーム」を新しく組織し、参加者の子どもたちと事務局の大人をつなぐパイプ役として活躍している。

静岡県文化プログラムでは、地元を楽しむことをテーマとした『KURURA vol.8』を発行。そして『KURURA』から始まり全国に広がりつつある「子どもローカルマガジンプロジェクト」をむすぶ「COLOMAGA（コロマガ）サミット」を立ち上げ、各地の子どもたち同士の交流や、プロジェクトを支える大人同士の情報交換を行った。

コーディネーターによる振り返り

KURURA制作実行委員会が「地域への愛着」と同じく大事にしているのは「クリエイティブの力」だ。子どもたちはプロのクリエイターたちと触れ合い、地域情報誌の制作に携わることで、自分自身のクリエイティビティを醸成する機会を得る。そんな彼らが将来大人になったとき、自ら考えて物事を起こすことができる「地域の創り手」となるかもしれない。「人」こそ、持続可能な地域を実現する鍵ではないか。

ただ、彼らに期待するばかりではいけない。私たち今の大人たちには、未来の「地域の創り手」たちが、思う存分自由に活動できるよう、懐の深い豊かな土壌を整備しておくことが求められている。

地域に愛されて9年 コロナを契機に地域の可能性を切り拓く

実　施　者	Usamiフェス実行委員会
プログラム名称	Usamiフェス2020
実 施 地 域	伊東市

20

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 |

会場のひとつ。地元の子どもたちが思い思いに落書きできる黒板に、中学生が作成したジャイアントフラワーが添えられた

プログラム概要

「伊豆」「宇佐美」「海」「自然」「アート」「観光」をテーマとして9回目を迎えたUsamiフェスは、多世代が集い、毎年開催を楽しみにしている地元密着のビーチサイドフェスである。宇佐美海岸を舞台に、ごった煮的に様々なプロ・アマ問わないパフォーマンスや演し物が1日中繰り広げられ、観客は飲み物や食べ物片手に海風に吹かれながら気軽に楽しむ。

コロナ禍でイベントが次々と中止となる中、Usamiフェス実行委員会は活動を止めることよりも「どのようにすれば安全に開催できるか」「コロナ禍で地域を元気づけたい」という考えで開催にこぎつけた。具体的にはこれまで開催してきた宇佐美海岸留田浜辺公園に人々が集中するのを避けるために街中4箇所に分散し、うち3箇所にステージを設営、回遊型にした。さらに会場変更に伴って4会場を結ぶ道路が旧街道であることがわかり、留田町地区の旧名称の城宿町から城宿ストリートと名付けた。伊東自然歴史案内人会より地域に根づくそうした歴史を紐解くセッションも設け、地域資源を再確認するきっかけにもなった。

また次世代育成のために計画していた中学生ボランティアによるイベント運営体験は残念ながら中止となったが、中学校の先生の協力の下、ジャイアントフラワーを作成することでフェスとの絆を維持することができた。

コーディネーターによる振り返り

毎年子供から大人まで楽しみにしているラストのファイヤーダンスでの観客の振る舞いから、いかにこのフェスが地元に愛され、受け入れられているかがわかる。一方で地域在住のアーティストやミュージシャンによる灯篭アートやダンス／DJのコラボイベントは、昼のフェスのファミリーな雰囲気とは打って変わって、地域に根づいた表現を模索する実験行為でもあった。宇佐美の環境と資源があってこそ生み出せたこの濃厚な時間を、その場にいた大人たちがビール片手に「よく分からないけど」と言いながら楽しんでいる姿に、エンタメとアートを地続きとして素直に受け入れる地域のポテンシャルを感じた。

3200年前の火山噴火とそこから生まれたいくつかのアート

実　施　者　Cliff Edge Project　21

プログラム名称　躍動する山河

実 施 地 域　伊豆市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

上白岩遺跡での展示。Cliff Edge Project 「中心の喪失、祈りの不在」 写真 住康平

プログラム概要

Cliff Edge Projectは、狩野川水系大見川流域、伊豆市中伊豆地区を舞台にしたアートプロジェクトである。この土地の特異な地形と地質遺産をモティーフとし、63年前にこの地を襲った狩野川台風の災害から、時代を遡ること3200年前に噴火したカワゴ平の火山噴火までのスケールの大きな時間軸の中で、4組の参加アーティストがそれぞれにテーマを設定し作品を発表。また、オンライン上でのワークショップを試みるなど、新たな手法を見出し意欲的に活動を行った。

コーディネーターによる振り返り

地形や地質から生まれるアート作品。一体どんなものを想像するだろうか。人は何の上に立つのか。大地には地層があり、堆積物が自然史を残している。一方、人々の記憶の上に立つのが現在の営みだ。その両面からアプローチをしているのが、Cliff edge Projectである。

本プロジェクトは始動から作品完成まで、半年以上時間を要している。その間参加アーティストたちは、縄文時代の火山噴火の舞台カワゴ平へ何度も山に登り、地域の行事に参加したり、ワークショップを実施したりして、作品制作を行なった。また、オンライン上で行った日本画のワークショップでは、参加者に岩絵具、筆、用紙などが送られたが、中にはカワゴ平の縄文炭を粉砕したものも絵具として用意された。

進化し尽くした文明のもと生きていると、自然環境や過去との連続性に隔たりを持つが、これらの取り組みが、自然や過去と呼応する瞬間を生みだす。一見「アート」とは捉えられないかもしれないが、この瞬間を作り出す作業こそが「アート」のなせる「技」だ。この「技」は「過去」との応答のみならず、「現在」から「未来」へ、そして「未来」から「現在」への応答へと想像力を働かせる「アート」の醍醐味だ。〈「アート」を「鑑賞」して楽しむ〉だけではない「過去」や「未来」を鑑賞者が想像力を働かせ追体験できる作品を創り出すプロジェクトだ。

アート活動を通じて誰もが参加できる社会をつくる

実　施　者　こころのまま　22

プログラム名称　心のままアートプロジェクト

実 施 地 域　沼津市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

子どもたちの絵が散りばめられたポスターサイズの報告書

プログラム概要

こころのままは、創作活動を通じて、誰もが参加しやすい環境を地域社会につくるため、障害のある子を持つ親たちが中心となり組織した団体である。

当初、近隣市町3ヶ所での共同制作と展示を計画していたが、コロナ禍の影響を鑑みた変更をするにあたり、かねてより課題意識を持っていた、“関心はあってもイベント等への参加に抵抗感を持つ親子や、移動に制限のある方々の参加方法”を探ることにした。

団体メンバーの子どもと親たちが、毎週zoomミーティングを開催し、企画協力のぶっとびアートの導きにより、ペアで会話したり、歌を披露したり、出されたお題の絵を描いたり、家にある宝物を自慢しあったり、即興演奏のワークショップをしたり、思いつくままに次々と実行した。

それは、ソフトの機能を試し、仕様の中で何が可能かをはかる実験であった。その結果は、年度後半に行った次の方向性を検討する会議の際に見られた。

“保護者・企画者の打ち合わせのはずが、画面の背後には入れ替わり立ち替わり子どもたちが現れる。何かを期待して、パソコン前で出番待ちの気配。その姿に、彼らはここに自分たちの意思で主体的に参加してくれていたことを感じた。(中略)学校でも職場でもない。義務も報酬も、わかりやすい目的も見えない場だったが、それでもここは、何かを期待する場であったらしい。”(報告書より抜粋)

オンラインなりの楽しみはつくることができるという手応えを感じられ、翌年の企画でも更にその可能性を探り、具体化していく予定である。

コーディネーターによる振り返り

作品展示など、目に見える「状態」をつくる背景には、必ず誰かが関わっている、という「状況」があるが、一目では見えずらいものである。しかし、課題解決に向けた活動にとって、「状況」を変化させることが特に大切だ。現状把握する真摯な目、見通しがつかない実験を楽しむ気持ち、計画遂行のための強い目的意識が必要になる。今回の計画変更によって、団体としての柔軟さと強さが見られた。

港まちの象徴的な柄をまちの人が身につけて誇りと文化をアピール

実　施　者　焼市（やいち）

23

プログラム名称　港まち文化プロジェクト
～焼津流おもてなしを世界へ～

実 施 地 域　焼津市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

「大漁旗」や「魚河岸シャツ」のデザインをアレンジして作成された手ぬぐいを持ち撮影を行った

プログラム概要

港まち焼津の象徴「大漁旗」や「魚河岸シャツ」をモチーフとした「ものづくり」をおこない、その背景にある、先人たちから受け継いできた「おもてなしの心」を、近年、増加している訪日外国人はじめ来焼される人々に伝えることを目的とする。

コーディネーターによる振り返り

2020年の東京オリンピック・パラリンピックで訪日する外国人へのおもてなしとして想定されていた事業も、訪日外国人が見込めなくなり対象を変更せざるを得ない状況となった。国際的なイベントを契機に地域への関心を「外から」集めることを想定していたものは、必然的に地域の「内から」の関心へと目的を変えることが求められることとなった。

当初は焼市もオリ・パラでの訪日客を焼津市に呼び込むべく、港まちの象徴とも言える「大漁旗」や「魚河岸シャツ」をアレンジした手ぬぐいや新しいシャツを文字通りフラッグシップとして地域住民で着用し、「日本の港まち」をアピールすることを狙っていた。しかしながら事業を進める準備の段階で、参加者が手ぬぐい等を着用する予定としていたスポーツイベントなどが延期、中止となり、手ぬぐいを披露する機会を失ってしまった。

手ぬぐいや新しいシャツに込めようとしていた思いは、何だったのだろうか。波や魚などの独特の「柄」として目に見えるものなのか、港で築き上げられた「結びつき」や「感謝の気持ち」のように目に見えないものなのか。

ウィルスという全く想定していなかった要因に、大いに振り回されることにもなったが、反面基本に立ち返りじっくりと考え抜く機会ともなったのではないだろうか。

皆がそろって新しいシャツを着ることはできなかったが、お馴染みの「柄」を染め抜いた手ぬぐいを配布し、皆が「豊か」になることを祈ったという。簡素な木綿の布を染める模様が、「柄」から「結びつき」へと人の手によって変化する瞬間である。きっと、これが「文化」ならではなのだろう。

商店街を活性化する まちの記憶 「タイムスリップ！1964」

実　施　者	藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会
プログラム名称	「タイムスリップ！1964」
実施地域	藤枝市

24

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

上演の様子

プログラム概要

藤枝宿の白子名商店街を中心とした6つの商店街の活性化と商店街から生まれるコミュニティづくりを促進するために「まちの記憶」を演劇作品として公演し、地域の潜在的な資源の発掘をすることをプログラムの目的としている。前回の東京オリンピックが開催された1964年の商店街を歩きながら演劇を楽しもうというコンセプトで2021年3月6日（土）・7日（日）「タイムスリップ！1964」を公演。1964年当時のエピソードを懐かしい服装や小道具を身に着けた俳優が演じる15分程度の作品を、商店街の店舗や街角、蓮華寺池公園内で上演し、鑑賞者は、まち歩き案内人と一緒に商店街を回遊しながら1964年当時の「まちの記憶」を体験した。

準備にあたっては、藤枝東高校演劇部の学生達がインタビュアーとなり、1964年当時高校生だった方から当時の町の様子などを聞き取った。また、商店街の人などから聞いた当時の話を元にオリジナルソングやイメージビデオを作成し、世代を超えたコミュニケーションが生まれることを目指した。

コーディネーターによる振り返り

藤枝だけでなく各地に商店街がある。が、どこも商店街としては厳しい状況にある。活性化を目的としたこの事業で1番のキーワードは「コミュニティ」づくりであったが、そのために重要な「コミュニケーション」が、世代を超えて多く生まれる結果となった。当初は県外からの出演団体や演者を想定していたが、コロナ禍により「地域の方々に不安を感じさせない」方法として、県内劇団、地域の出演者に変更したことが、今回の成功に繋がったのではないだろか。「当たり前」がない日常を過ごす日々となった2020年は、近くの人とすら接することを躊躇わせてしまう日常に変えてしまった。だからこそ地元の人、団体、地域と多く関わるこの活動が地域にとって重要であったと感じる。

「演劇」という手法が柔軟で、創造性を育むからこそ、地域に根付いた「演劇活動」が日々の生活をより豊かにしてくれることに藤枝で改めて認識する事業となった。

かつての若者が今の若者と盛り上げる音楽祭と地域の誇りづくり

実施者	KAWANE夏祭り@BIGNATURE実行委員会
プログラム名称	KAWANE夏祭り@BIGNATURE
実施地域	島田市

25

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | **2020**

KAWANE夏祭り@BIGNATUREの20年間を振り返る冊子

プログラム概要

島田市川根地域の青年団が中心となって毎年夏に開催している野外音楽イベント「KAWANE夏祭り@BIGNATURE」。島田市川根町を舞台に郷土愛の育成、若者の関係性づくりを目的として開催され、2020年で20周年を迎える音楽フェスティバルである。2020年に第20回記念イベントが開催される予定であったがコロナ禍で音楽フェスは中止。何ができるかを模索し、20年間の歴史を振り返るプロモーションビデオ及び冊子の制作を行なった。スタッフや出演アーティストなどへのインタビューを中心に制作された映像・冊子では、イベント初期の苦労や世代交代への課題などが語られ、BIGNATUREや地元に対する思いや考えを整理する機会となり、これにより人口減少・少子高齢化地域に暮らす若者の実態と課題を見つけることも目的の一つとしている。

映像はYouTubeで一般向けに公開し、冊子はイベント関係者向けに配布されるほか、今後、全国で同じ課題を抱える地域に対し、地域活性化やまちづくりの事例として紹介することを計画している。

コーディネーターによる振り返り

今年で20年目になるはずだった、地域住民や関わるアーティストにとってなくてはならない「KAWANE夏祭り@BIGNATURE」を中止するという判断をした。当たり前だった夏が無くなった。自分たちに「何ができるのか？」を考えた結果、1、夏の音楽フェス　2、川根町　3、自分たち自身　を振り返ると共に、それらを映像と冊子に残すこととなった。KAWANE夏祭り@BIGNATUREは地方における先行事例だと思う。地元の若者たちが、「自分たち」の楽しみのために始めた音楽フェスは、いつしか「自分たち」だけでなく「地域の人たちのため」に変化し、19年続いている。活動をすることで生まれた若者たちの変化は、地域コミュニティをより強固にしているのではないだろうか。「川根町、ここが好きなんです」そう言い切れる、メンバーたちの言葉は、これからの地域社会における理想的な形だろう。

地域の歴史を学び発信する地域密着型演劇公演

実　施　者　劇団静岡県史　26

プログラム名称　演劇公演「静岡茶●航海記」

実 施 地 域　菊川市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

国登録文化財 菊川赤れんが倉庫の歴史をめぐり、静岡から世界に茶を売り込む足跡を辿る演劇公演「静岡茶●航海記」

プログラム概要

劇団静岡県史は、舞台芸術を通した静岡県のまちおこしを目的とし、静岡県の歴史や伝説、物語を題材に舞台芸術を創作する劇団である。本プログラムでは、菊川市の文化発信拠点である菊川文化会館アエルを会場に、幕末から明治にかけて侍たちが刀を鍬に替え茶畑をつくった「牧之原開拓史」の続編である。「静岡茶●航海記」と題して、その茶園から世界に羽ばたく物語を描いた演劇を公演し、地域の歴史を振り返ることで、茶産業を担う方へエールを送り、茶産業への興味関心を喚起するための契機とすることを試みた。

菊川市の国登録文化財・菊川赤れんが倉庫の歴史を巡る、明治から令和に至るまでの旅。世界に挑戦した富士製茶株式会社の原崎源作を中心に、それを支える丸尾文六、岡田良一郎、関口隆吉など、地域の偉人にスポットを当て、静岡から世界にお茶を売り込む足跡を辿る物語である。

演劇公演に向けて創り手も鑑賞者も共に成長しようと「お茶」をテーマに計4回開催された勉強会を開催した。

コーディネーターによる振り返り

コロナ禍での活動となったが、劇団代表をはじめ、関係者一同が常に「できること」を模索しながら、着実に前に進めてきた。静岡県を題材とした「静岡茶●航海記」を行うにあたり、一般の方々を対象にした「お茶」をテーマにした勉強会は、普段演劇に触れることのない方々へも影響を起こし、公演会場はお客様で一杯となった。公演後に行われた出演者等による反省会では、コロナ禍において人との繋がりがかえって強くなったことや、当たり前だった「お茶」に対する認識もこの作品を通して変わったというコメントが聞かれた。地元静岡にこだわり、市民参加型の劇団や創作活動が「必要」かを地域の方々にもより理解していただくきっかけとなったのではないだろうか。全国に先駆けて「劇団静岡県史」が地域劇団の在り方を発信してくれる大きな動きとなってくれるだろう。

伝統芸能と食文化 ～伝統文化の継承を考える

実　施　者	御殿場市東山旧岸邸
プログラム名称	2019年度 伝統芸能講座 「伝統芸能と食文化～雅楽と茶懐石～」
実 施 地 域	御殿場市

27

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

東山旧岸邸の広い応接間を舞台に見立てて雅楽と舞が披露された

プログラム概要

首相を務めた岸信介の自邸として1969年（昭和44年）に建てられ、その後2009（平成21）年からは、和菓子の虎屋のグループ会社である株式会社虎玄が指定管理者として管理運営を行なっている御殿場市東山旧岸邸は、定期的に伝統芸能講座を実施している。2019年度は「伝統芸能と食文化」と題して10月8日に開催した。

同じ敷地内にあるとらや工房にて御殿場の茶懐石「温石」店主・杉山氏がつくる静岡の食材を活かした点心と、とらや工房の創作和菓子を召し上がっていただいた。その後場所を東山旧岸邸に移し、改元を祝して、元宮内庁式部職楽部首席楽長による解説とともに、慶事に演奏される雅楽を披露した。

分野や様式が違っていても共通する「こころ」や「かたち」に触れ、日本の伝統文化について考えるひと時となった。

コーディネーターによる振り返り

地域に残る重要な文化資源を保存しながら、いかに活用していくか。

文化財保護法が2018年に14年ぶりに改正され、文化財の継承の担い手を確保し、地域社会総がかりで取り組む体制の整備のため文化財の計画的な保存、活用の促進が定められたが、そうした流れと時を同じくして、本プロジェクトは文化財や文化資源を現代の文脈でどう活用するかを考えるきっかけとなった。

本施設の指定管理者はこれまで受け継がれてきた地元の文化資源を調査・研究しつつ、地域の声や社会の文脈を取り入れ、「今を生きる文化施設」として意欲的に数々の企画を発信し続けている。

本企画では、「温石」店主の杉山氏、とらや工房のパティシエら本企画関係者による「伝統文化の継承」を考えるトークも実施した。食材の現場視察や地元生産者との密接なコミュニケーションを通して、協働で作り上げていくプロセスを丁寧に踏んだ交流によって、地域資源の発掘に結びついたことが本イベントの成果である。今後は伝統芸能と地域の接続の形と「文化継承」を今度は参加者や地域の人たちと共に考えていく場の設定など、今後の発展が期待される。

コミュニティラジオがつなぐ福祉支援とまちづくり

実施者	特定非営利活動法人 熱海ふれあい作業所
プログラム名称	2016年度 ラジオにのせて、ふじのくに、ソーシャルインクルージョンへのひとしずく 2017年度 雨上がりの虹を、町に。 2018年度 雨上がりの虹を、町に。
実施地域	熱海市

28

2016 2017 2018 2019 2020

施設のお祭りと同時開催した公開収録には、熱海市長もゲスト出演。

プログラム概要

オリジナル音楽ラジオ番組「ふれあいラジオ　雨上がりの虹」を、FM熱海・湯河原と連携して制作、放送するプログラムである。精神障害当事者で、パーソナリティを務める高崎史嗣さんの思いを発端として始まった企画だが、番組制作にまちづくりや福祉のネットワークをつなぐ役割を持たせている点に特徴がある。取材を通して地域でさまざまな活動を展開する人にアクセスしたり、公開収録を福祉施設でのお祭りの際に行ったり、普段接点のない人たちがその場に居合わせる機会をつくり、つながりが生まれることをねらっていた。

2016年7月から2019年3月までの2年半ほどの間に17回番組放送が行われた。ラジオ局との打ち合わせ、台本、進行表の制作、（自主制作楽曲の紹介を主にしていたため）制作者への許可取り等、ほとんどの業務を高崎さんが担った。その結果彼の雰囲気があきらかに柔らかくなり、社会性や自立心の立ち上がりが見え、彼をよく知る相談支援関係者も驚くほどであった。地域との距離が近いコミュニティFMが、福祉とのつながりを強めることにより生まれる効果が、福祉支援とまちづくりの双方向に可能性を感じさせた。

コーディネーターによる振り返り

当プログラムのアドバイザーを務めたアーティストのアサダワタルさんは、コミュニケーションを軸に据えた事業推進によって、複合的な効果の表れを期待していた。高崎さんの変化には、福祉支援に対する文化的アプローチの有用性の一端をみることもでき、また地元でまちづくりやアートプロジェクトに関わる人との取り組みも動き出しているようでもあり、文化・福祉・まちづくりが連動した今後の展開に期待したい。

町にあたりまえにあるものを楽しみ生かす、移住者だからこその切り口

実　施　者	松崎町「絲」concept
プログラム名称	2017年度 静岡県でもっともちいさなまちをアートで綴る 2018年度 マツタキ今昔物語プロジェクト
実施地域	松崎町

29

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

フォトコラージュに、地元書家が書いた物語がそえられた「マツタキ今昔物語絵巻」

プログラム概要

松崎町の魅力を見つけ、住民としての活用法を考え実践するプログラムである。外部に魅力を伝えることも大事にしているが、それらは日々の暮らしの中にあるからこそ魅力的なのであり、そこに住む自分たちが楽しく活用する道を提示することに主眼が置かれている。

野山を学び舎に見立てたプログラムもその1つだ。自然を楽しむ名人たちを講師に迎え、町内にある牛原山を子どもたちと遊び尽くすプログラムを展開。また、編み物で町の木々をくるむプログラムには多世代の関わりを呼び込み、町民自らの手で町の風景を変化させた。

2年目には、こうした活動の下敷きとなる考えが色濃く反映された、新しい町のガイドブック「マツタキ今昔物語絵巻」の制作にも取り組んだ。

普段はなかなか出会えないユニークな人、物、場所を写真家兼フォトコラージュ作家の行貝チエさん、ライターの住麻紀さんと共に取材して集めた話に、町の歴史や言い伝えに空想を絡め、「マツタキ」という架空の町の説話としてまとめ上げた。12編の説話には、それぞれの話の取材先で撮った写真を使ったコラージュ作品が挿絵にあてられている。町の知られざる側面を知らせ、団体の考えを伝えるコンセプトブックであるとともに、ビジュアルにもうったえかけるアートブックのようでもある。

コーディネーターによる振り返り

結婚を機に松崎町へ移住した女性たちが、町外出身者だからこその切り口で町の資源を探り、町の楽しみ方を提示したプログラムである。同時に、それぞれのできることを持ち寄ることで、自分たちの暮らす町を楽しく変えることができるというメッセージの提示であったとも言える。ないものに目を向けるのではなく、あるものを生かすため、様々な角度から目を入れ、活動を生み出す柔軟さが感じられたが、一方でそれは、町が持つ活動の土壌となりえる柔軟さや許容性を掘り起こしたと言えるのではないだろうか。

「障がい者×パフォーミングアーツ」によるノーマライゼーション社会の実現

実　施　者　富士山舞台芸術楽団　30

プログラム名称　A-T MAN試演会

実 施 地 域　富士市・富士宮市

| 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 |

本公演の一コマ

プログラム概要

現在の社会において人は規定の役割を社会の中で演じている（会社での立場に応じた振る舞いや、地域社会、家族、性別、障害の有無に応じた行動など）。そのことにより人と人を区別する意識が生まれ、互いに交流する機会を失い、フラットな人間関係を築けない状態にある。そのような環境が変化し、人々が交流できる世界を舞台から発信するのが富士山舞台芸術楽団である。

自分たちで製作した、廃材による創作楽器を中心に、従来の奏法や旋律にとらわれずに、セリフも使わず、音と動きのみで構成することで、言語や国境を越えて活動することを目標に公演を製作した。

出演者を公募し、健常者・障害者および経験、未経験を問わず、互いが知恵を出し合い試行錯誤できる作品作りができるよう、稽古方法などを考え、制作をおこなった。また演出においてもダンスやアクロバットの要素も取り入れ、誰もが「見ること、聞くこと、触れること」のいずれの方法でも楽しむことができる舞台を心がけた。

「試演会」では、地域の支援者を中心に舞台関係者を招き、今後の持続的な活動のための助言を得る機会として、1年間の制作と活動の集大成を見ていただいた。

コーディネーターによる振り返り

発起人である植村勝博氏は、もともとプロ和太鼓奏者として活躍していたが、31歳の時に脳内出血で倒れ半身麻痺となり、全てが変わってしまった経験を持つ。ノーマライゼーションの社会の実現に向けてこの楽団を結成し、試演会を作り上げる強い意思とパワーは称賛に値するであろう。

舞台では、「私たちには、それぞれに輝く場所が必ずあって、どんな状況であろうと人生は楽しめるはず。」全ての人が公平で、自由に夢を持ち、交流できる世界を表現した。

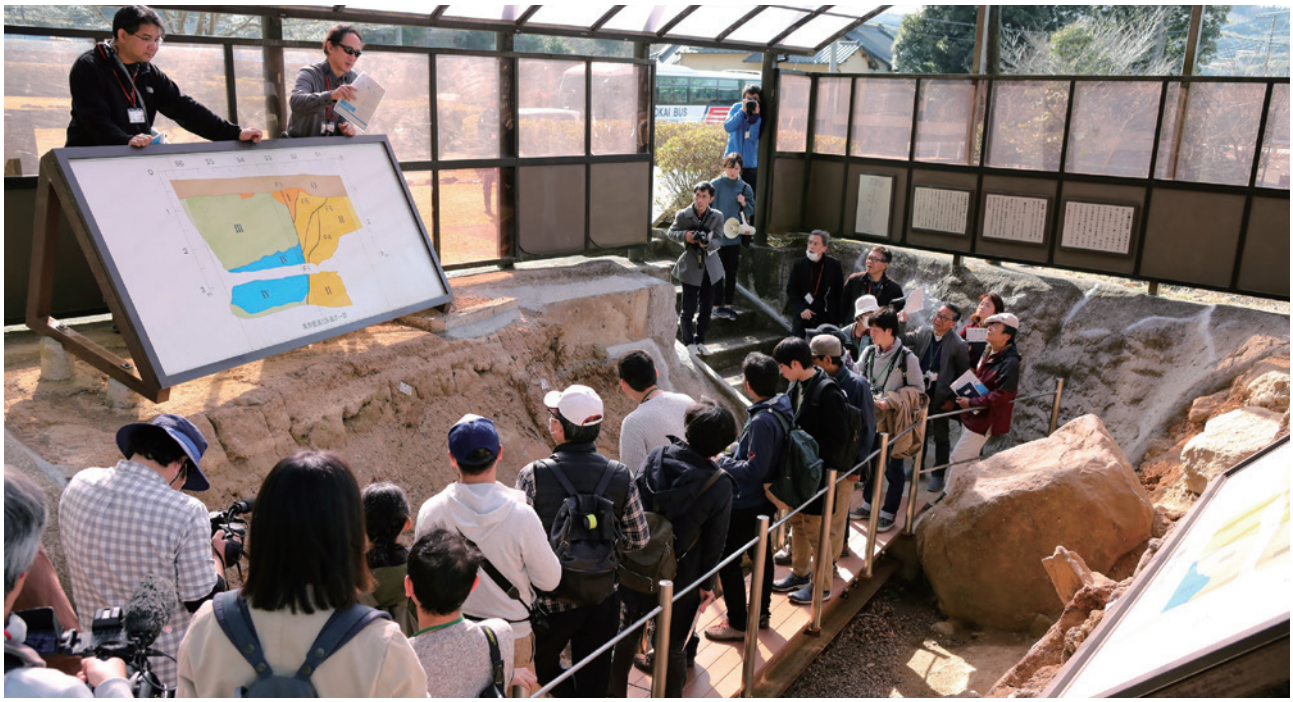
まずはやり切った。しかし活動はひとりだけではできない。様々なモチベーションを抱える人たちが集まる持続的な組織運営の姿を考え、丁寧に実現を目指して行動することが次の挑戦であろう。

防災先進県へ 身の回りを見つめなおし アートで挑むプロジェクト

実　施　者	株式会社SBSプロモーション
プログラム名称	“未”被災地のための防災アートプロジェクト
実施地域	静岡県全域

31

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020



まちめぐり第二弾では、北伊豆地震で生じた断層のズレがそのまま残されている丹那断層公園を訪れ、地質と災害の関係性を学ぶ

プログラム概要

「大地震が明日にも来る」と言われながらいまだその日を免れている、いわば“未”被災地であり、“防災先進県”でもある静岡。

防災に必要な「過去に学び、今を知り、未来を考える」ことにアートを投入することで、個々人や地域の防災に「気づく・知る・想像する・創造する」きっかけを提示し、意識の面でも防災先進県となることを目指す。震災から生まれた表現等にヒントを得た展覧会等と、“防災文化”を紹介するウェブサイトにより、リアルとウェブでプロジェクトを推進。

県内2地域で、地質・歴史・防災の取組みなどを歩いて実際に見て知る「まちめぐり」と座談会を開催。

■しずおかHEART防災キックオフイベント　まちめぐり＆座談会「“未”被災地のための防災アートは可能か？」

〈第1弾〉

○まちめぐり“洪水・高潮・津波に向きあう地域の暮らしの工夫を知る”

場所：焼津～吉田（焼津浜通り、レック㈱防災倉庫）

○座談会　焼津公民館 会議室

〈第2弾〉

○まちめぐり“地球の営みから生じる 美と畏れを感じる”

場所：函南～三島（丹那断層公園・火雷神社・浅間神社（三島）・白滝公園）

○座談会

会場：三島市民文化会館 会議室

コーディネーターによる振り返り

2011年3月11日に発生した東日本大震災の甚大な被害は、未だ生々しい記憶となっている。南海トラフ地震など大規模な地震・津波による静岡県の死者・行方不明者は10万人を超えると想定され、様々な防災対策や教育が行われている。がしかし、恒常的に防災意識を維持することは難しい。この課題を、アートや表現の力によって解決しようと挑戦するプログラムである。

焼津、三島地域での「まちめぐりと座談会」では、民俗研究者、防災研究者、キュレーター、県内外のアーティストと地元住民がともに歩いてその実情を学び、アートが担える可能性について話し合った。

地域を知ることと地域との連携が、防災先進県への第一歩と考えプログラムを実施した。

土さえあれば生きていける

実　施　者	登呂会議
プログラム名称	2016年度 Toro Lab. Innovation Project 2017年度 アートロ＝Toro Lab. Innovation Project
実 施 地 域	静岡市

32

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

2017年度 連続講座 第4回「足元には何が生えてた？道具と素材のレクチャー」。数々の出土品から推測し、どんな道具で暮らしていたのかを、静岡大学の篠原和大教授と、山梨で縄文暮らしをする元宮大工・雨宮国広さんと参加者が、登呂遺跡公園で焚火を囲む座談会スタイルで考えた

プログラム概要

先人の生活の知恵と工夫を体験し、「私たちの今と未来を考える」活動である。

弥生時代の遺跡である登呂遺跡を拠点として、人々が「土から作る・食べる・生きる→土に還る」という循環を体験する。古代の暮らしの復元ではなく、「現代の暮らしを見直すきっかけ」=「土さえあれば生きていける」という視点を得て、地域を豊かにつなぐ当事者になるとともに、「土」から始まる体験をベースに新たな学びの場（研究ラボ）を生み出すことを目指している。

2017年には考古学者の目から見た登呂遺跡、建築家の視点で眺める弥生時代の暮らし、木工、繊維、様々なプロが登呂に訪れて、暮らしの実験ラボ的な活動をおこなった。

コーディネーターによる振り返り

「一番重要で、なおかつ難しいのは、正しい答えを見つけることではない。正しい問いを見つけることだ。」と経営学の父と呼ばれるピーター・ドラッガーは語っているが、AIによって人間の仕事がいとも簡単に代替されることが予想される近い将来、私たちにとって必要なのはこの「正しい問い」を立てる能力かもしれない。

アートロで大切にしているのは「？（はてな＝疑問）」と「！（がってん＝発見）」と主宰の本村玲子さんは語る。

実験ラボ的な活動を共にする参加者からは、同じ体験をしてもたくさんの、個性豊かな「？」が出てくる。循環を体験しながらも一度として同じ循環はない。現代の生活をしていると意識しづらい、便利であたりまえな生活が、このプロジェクトを体験するとさまざまな「？」に変わる。そこから参加者それぞれの多彩な探求と発見の旅が始まるのだ。

未来に生き残る力の鍵を弥生時代の循環体験から教わる、とはアートならではの視点と力かもしれない。

山村文化の魅力を発信する、現代の「きこり」たち

実　施　者	株式会社玉川きこり社
プログラム名称	2016年度 きこりと子育て「日本一みんなで子どもを育てる村づくり」PROJECT 2017年度「きこりと子育て」をテーマに世界中の人を「きこり」にする! PROJECT
実 施 地 域	静岡市

33

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

きこりじゅく未就学児編「きこりに挑戦！山仕事体験しよう！」の様子

プログラム概要

株式会社玉川きこり社は、静岡市玉川地区の自然と共生する生活文化に魅せられて集まったIターン者らが興した会社である。過疎高齢化する同地区や日本の農山村が受け継がれていくための環境づくりをミッションに掲げ、林業を主軸としながら企画、デザイン、商品開発等、幅広い事業展開を行い、同地区と市街地をつなげる仲介役として活動している。

静岡県文化プログラムでは、長年にわたり「きこり（林業従事者）」たちが支えてきた山村文化を、これからは「森林を想い、森林の恵みや資源を活用しながら暮らせる人」なら「きこり（担い手）」になれるという広義解釈をベースに、「世界中の人をきこりにする」いうスローガンをたてた。そして、親子が森林と触れ合える体験の場として山を開く「きこりじゅく（ワークショップ）」と、ゲストともに現代の生活に潜む「きこり文化」の掘り起こしを行う「旅をする木（リサーチ）」を通した実践と検証から、アウトプット（広報啓発）を検討し、今の時代にあった新しい文化継承の形を探求した。

コーディネーターによる振り返り

玉川きこり社は、現代生活の中に潜む「自然と寄り添った暮らし」を掘り起こすことで、「きこり文化」を普遍化し、他人事から自分事へと人々の意識を変えていくことをねらう。それは、そこに住む人だけでなく、その文化に魅力を感じる人なら“誰でも”担い手となれるという「新しいきこり文化」の提唱である。アーティストを交えて実施したリサーチでは、玉川地区の文化を発信するための新しいストーリーについて議論するとともに、周辺の団体・企業、地域等と連携しながら進めていく可能性も見出した。こうした取り組みの積み重ねが、玉川地区の関係人口づくりにつながっていくはずだ。そして将来、この「新しいきこり文化」が同様の課題を抱える中山間地域においても応用可能なモデルとして、全国に発信されていくことを期待している。

文化財建築「旧依田邸」を交流拠点とした過疎高齢化への対応

実　施　者　特定非営利活動法人伊豆学研究会 34

プログラム名称　古民家を芸術拠点とした地域づくり

実 施 地 域　松崎町

2016　2017 | 2018 | 2019 | 2020 |

中庭の奥にあるなまこ壁に覆われた３棟の蔵は、かつてそれぞれ客室、ギャラリー、カフェバーとして使用されていた

プログラム概要

松崎町のアイコンでもあるナマコ壁が美しい、静岡県から有形文化財指定を受けている築300年の旧依田邸を、木工を軸とした文化拠点とし、過疎高齢化という地域課題に取り組むプロジェクト。

伊豆半島内に工房を構える木工作家のネットワーク「伊豆番匠」のメンバー、そして木工で知られる高山から招いた伊藤愼次郎さんを講師として、公募で集めた受講生8名に向けた技術の伝承を行う木工技術研修を実施。定年退職者層の参加を想定していたが、応募してきた中には移住を視野に入れた若者も含まれていた。宿泊棟や温泉設備を活用した中長期滞在型のプログラムとして発展させていく展望もある。

文化拠点としての運営を考えると、来訪者と地元住民の関わりを生み出す策が必要になるが、戦後に1町2村が合併して現在の形となった松崎町では、それぞれの地区の独立意識がいまだ残っているため、他地域と連動していくための計画を練るにあたり、アーティストの武久絵里さんと、アートコーディネーターの石幡愛さんを招き、町内のリサーチやヒアリングを通して、最終的には参加型プログラムとして発展させる方向性を持った、住民とのコミュニケーションを介した地図制作の企画を練った。

コーディネーターによる振り返り

伊豆半島に広がる木工作家ネットワークを生かすという、広域に連携し旧依田邸を文化拠点としていく動きと、拠点が町や町民との連動や波及効果を生み出すエリアマネジメント的な動きを、連動した両輪として機能させることが肝となる活動だろう。それが体現されれば、拠点以外での派生もありうるだろうし、その広がりまで生まれることを期待したい。主宰である伊豆学研究会の持つ郷土史に関する知見を生かし、どのように展開されていくか楽しみである。

コミュニケーションを軸に静岡を紹介する 泊まって味わうディープな静岡

実　施　者	シズオカオーケストラ
プログラム名称	外国人向け「みんなのnedocoプロジェクト」実現に向けた基盤整備とモニターツアー実施事業
実施地域	静岡市

35

2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020

「旧五十嵐邸を考える会」等の皆さんから、箸置きの作り方を習うnedocoスタッフ

プログラム概要

文化イベント等を目的に来静する人々に公民館等を宿泊場所（nedoco）として提供するとともに、地元に暮らす人々がホストとなって静岡の魅力や楽しみを伝える「おもてなし」プロジェクト。地域に密着した施設に滞在し、地域住民との交流による体験を通して“観光”では味わいきれない静岡を知ってもらうことを目的としている。

シズオカオーケストラは、「コミュニケーションを軸に静岡を紹介する」ことの理想像として、2014年度からnedocoプロジェクトを開催。nedocoプロジェクトを「さまざまな国や性別や年齢の人たちが、静岡で開催される文化系イベントに集い、一つ屋根の下で存分に対話をして、お互いのことやこのまちのことを知る場」と位置付けており、2016年度は「富士の山ビエンナーレ2016」と連携して、ビエンナーレの展示会場でもある国登録有形文化財 旧五十嵐歯科医院（旧五十嵐邸）でnedocoプロジェクトを実施するとともに、「新たな拠点の開拓（寺院の発掘）」と「外国人客受入れに向けた基盤整備」に取り組んだ。「寺院の発掘」においては、現代社会におけるコミュニティの装置としての「寺」のあり方を模索している寺院関係者を発掘し、実際に寺院に足を運び現状や将来への期待などを取材。今後拠点として活用する方法を調査した。「外国人客受入れに向けた基盤整備」については、スタッフの英会話レッスンやプロジェクト開催時を意識した英語でのシミュレーション合宿を行うなどした。

コーディネーターによる振り返り

演劇や美術などを鑑賞することと、地域住民と交流することに共通するのは、他者の視点や意見を共有し、相互理解を促進することにあると考える。このnedocoに居合わせた参加者が相互理解を経験したことで得たことが、静岡の愛好家となることにどのように寄与したかなどについてアートイベントの主催者や他の観光団体と共有することで、静岡独自の観光案内を開拓することができるのではないか。

2020
SHIZUOKA

その他活動状況
資料編

文化プログラム認証制度

静岡県文化プログラム推進委員会では、東京2020オリンピック・パラリンピックに向け、多くの方々に「文化プログラム」に参画いただき、オール静岡で一体感を持って本県文化の魅力を発信することにより、国内外から憧れを呼ぶ地域を実現するため、独自の認証制度を設け運用しました。その結果、1,340件のプログラムを認証し、多様な文化プログラムが広く展開されました。

認証の対象となる事業

県内で実施する、感性豊かな地域社会の形成に資する文化事業・活動

- 地域資源を活かした文化・芸術の振興
- 他分野との協働による地域課題対応
- 文化・芸術を担う次世代の育成
- 地域文化・芸術の魅力の国内外への発信

申請方法

- 様式による申請(郵送・メール)
- 静岡県文化プログラムウェブサイト上での電子申請

認証期間

2018年7月24日から2021年9月5日までの間に実施する事業・活動

※認証申請は2021年3月31日で締切り

認証した文化プログラムへの支援等

県内で実施する、感性豊かな地域社会の形成に資する文化事業・活動

- 静岡県文化プログラムシンボルマークの使用承認

2018 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

2019 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

2020 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

- プログラム・コーディネーターによる助言、相談対応
- 推進委員会等の広報媒体を通じた情報発信
  (ウェブサイト内の「イベントカレンダー」にプログラム情報を掲載　等)

認証件数(認証年度毎の内訳)

年度	2018年度	2019年度	2020年度	累計
件数	341件	588件	411件	1,340件

東京2020オリンピック・パラリンピックと静岡県文化プログラムの連携

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会と連携し、静岡県文化プログラムを周知するとともに、大会を「文化の祭典」として盛り上げました。

東京2020オリンピック聖火リレー セレブレーション（駿府城公園）

聖火リレーの各日最終区間で聖火の到着を祝うセレモニーであるセレブレーションにおいて、聖火到着前に実施するオープニングプログラムに文化プログラム採択団体が出演

- 日　時　2021年6月23日（水）18:35～20:00
- 会　場　駿府城公園紅葉山庭園前広場（静岡市）
- 出演団体　川根本町伝統文化保存会（川根本町）
- 内　容　赤石太鼓保存会による太鼓演奏（演目：大いなる河の音）

東京2020ライブサイト（御殿場市）

大会組織委員会、県、御殿場市の共催により、大会の中継放送を大画面で視聴することができるライブサイトを設置し、ステージイベントに文化プログラム地域密着プログラム採択団体が出演

- 日　時　2021年7月24日（土）10:00～19:00
- 会　場　JR御殿場駅前富士山口広場（御殿場市）
- 出演団体　しゃぎりフェスティバル実行委員会（三島市）
- 内　容　三島の伝統芸能「しゃぎり」の披露

東京2020パラリンピック聖火リレー出立式

聖火リレーの最終到着地となる四ツ池公園において、パラリンピックへの想いをのせた聖火を東京へ送り出すためのセレモニーとして出立式を開催し、オープニングプログラムに文化プログラム関連団体が出演

- 日　時　2021年8月17日（火）18:30～20:30
- 会　場　四ツ池公園陸上競技場（浜松市）
- 出演団体　静岡県立横須賀高等学校郷土芸能部（掛川市）
- 内　容　県指定無形民俗文化財「三社祭礼囃子」の披露

東京2020オリンピック・パラリンピック静岡県開催ガイド

県が作成し、観戦者等に配布するガイドブックに文化プログラムについて掲載

- 発行部数等　1万部・A5版カラー32ページ
- 掲載内容　自転車競技解説、聖火リレー、ライブサイト、文化プログラム　等

広報活動

ロゴマーク

2017 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

2018 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

2019 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

2020 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

静岡県の「S」、「日本一の高低差を誇る富士山と駿河湾」、「遠州灘～駿河湾～伊豆半島～の東西に長い海岸線」を元に、高低差と東西直線距離を応用した比率で作成されている。テーマカラーは年度毎に静岡県を象徴する色を採用。
デザインは坂本陽一氏（mots）

2017年度	お茶、山葵をイメージした「緑」
2018年度	ガーベラ、イチゴをイメージした「赤」
2019年度	ミカンをイメージした「橙」
2020年度・2021年度	富士山、海をイメージした「青」

広報メッセンジャー

静岡県文化プログラムの開催を広く周知するため、静岡県出身でアイドルグループ　乃木坂46の元メンバーであった女優の若月佑美さんを「広報メッセンジャー」として委嘱し、各種広報活動に協力いただいた。

ポスター

若月　祐美（わかつき ゆみ）

1994年、静岡県富士市出身。2011年乃木坂46の1期生オーディションに合格。2012年『第97回二科展』のデザイン部A部門で芸能人として初入選後7年連続で入選し続けている。2018年グループを卒業後、女優として活動中。

メッセージ動画

文化プログラムトークシリーズ

毎回さまざまなテーマを設定し、文化芸術とは一見無関係に見える分野と文化芸術が交わることで生まれる活動や、地域課題に対する文化芸術からのアプローチ、新たな文化創造につながる取組などを紹介するとともに、これからの活動の担い手とさまざまな分野の専門家との対話を通じて、静岡県文化プログラムの先に生まれる「未来の静岡県と文化の関係」を探った。2016年度から2018年度にかけて10回開催した。

開催日	内容	会　場
2017年2月4日	**Vol.1　山と、文化プログラム：山に息づく文化** ゲスト：和田昌宏（美術作家） ホシノマサハル（コミュニティ・アーティスト） 原田さやか（株式会社玉川きこり社 代表取締役）	静岡県森林・ 林業研究センター （浜松市）
2017年2月26日	**Vol.2　空き家と、文化プログラム：住民に親しまれる文化拠点ってなあに？** ゲスト：市来広一郎（NPO法人atamista代表理事、株式会社machimori代表取締役） 深澤孝史（美術家） 行貝チヱ（Scale Laboratory メンバー、写真家）	プラサヴェルデ （沼津市）
2017年3月4日	**Vol.3　地形と、文化プログラム：山から海へ　過去から未来へ** ゲスト：野内隆裕（路地連新潟メンバー代表、日和山五合目館長） 地理人（デザイナー） 谷津倉一真（富士の山ビエンナーレ実行委員、いもやゐも蔵店長）	富士川ふれあい ホール （富士市）
2017年11月11日	**Vol.4　移住と文化プログラム：大山町の楽しげに暮らす人々に学ぶ移住者の生活** ゲスト：太下志保（こっちの大山研究所所長） 中村隆行（株式会社漁師中村代表取締役、築き副代表） 薮田佳奈（元大山町地域おこし協力隊）	鴨江アート センター （浜松市）
2017年11月18日	**Vol.5　まちあるきと文化プログラム：町を読み解く多様な視線のおもしろさ** ゲスト：陸奥賢（観光家、コモンズデザイナー、社会実験者） 今和泉隆行（株式会社地理人研究所代表取締役）	掛川市街、 蓮福寺 （掛川市）
2017年12月3日	**Vol.6　市民メディアと文化プログラム：市民メディアが拓く地域の可能性** ゲスト：藤本智士（「Re:S」(りす)代表） 紫牟田伸子（静岡県文化プログラム広報ディレクター） 千葉雅俊（「みやぎシルバーネット」発行人）	沼津市民 文化センター （沼津市）
2018年1月25日	**Vol.7　ショッピングモールと文化プログラム：集客コンテンツにとどまらない文化・芸術の可能性** ゲスト：安達覚（三井不動産株式会社商業施設本部上席主幹） 鈴木基生（田町東部繁栄会会長） 岸井大輔（多摩美術大学演劇舞踏デザイン学科講師、劇作家）	七Lab.（静岡市）
2018年2月11日	**Vol.8　災害と文化プログラム：静岡でこそ考える「伝える防災」の新しいかたち** ゲスト：村上タカシ（美術家、一般社団法人MMIX Lab代表、大学教員） 斉藤道有（美術家、一般社団法人東北ツリーハウス観光協会代表理事）	起雲閣（熱海市）
2018年11月3日	**Vol.9　まちづくりと文化プログラム：住みたい街はどんな街？心ときめく街と文化の関係性** ゲスト：島原万丈（株式会社LIFULL LIFULL HOME' S総研所長） 森隆一郎（文化事業プロデューサー） 静岡県文化プログラム事例紹介：川上大二郎（Scale Laboratory主宰）	沼津ラクーン （沼津市）
2019年1月13日	**Vol.10　子どもと文化プログラム：クリエイティブな芽を育てるはじめの一歩** **ー「音」を「楽」しむ即興ワークショップ** ゲスト：片岡祐介（音楽家、即興演奏家） 池田邦太郎・斉藤明子（NPO法人「音を楽しむONGAKUの会」） 静岡県文化プログラム事例紹介：（一社）ふじのくに文化創造ネットワーク かけがわ茶エンナーレ実行委員会	静岡県総合 教育センター （掛川市）

スペシャルトーク

芸術・文化の歴史や現在を専門家の視点から深く探り、幅広く芸術への理解を促進することを目的とし、芸術と社会の関わりや芸術・文化が抱える課題、楽しさなどを、芸術活動にたずさわる人々との対話を通じて、幅広い層に発信することを目指した。静岡市内で3回開催。

開催日	内容	会　場
2018年2月18日	**仮設の文化ーモニュメンタルなものとエフェメラルなものとをめぐる対話** ゲスト：木下直之（東京大学大学院人文社会系研究科教授、静岡県立美術館館長） 京谷啓徳（九州大学大学院准教授）	七Lab.（静岡市）
2018年3月10日	**芸術は楽しい!!　オペラ歌手と漫画家が語る舞台裏** ゲスト：清水華澄（オペラ歌手） しりあがり寿（漫画家） ホスト：宮城聰（演出家、SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督）	静岡芸術劇場（静岡市）
2018年9月9日	**海の国静岡ー美しい道具をつくることと　つくられた道具が美しいことをめぐる対話** **地を味わうスペシャル地味対談　木下直之×神野善治** ゲスト：木下直之（静岡県立美術館館長/東京大学教授、文化資源学） 神野善治（武蔵野美術大学教授・博士、民俗学/元武蔵野美術大学美術館・図書館館長）	レストラン＆カフェ 「グランテラス」（静岡市）

東京2020公認文化オリンピアード「静岡県文化プログラム1000日前フォーラム」

「かけがわ茶エンナーレ」開催中の掛川市を会場に、青柳正規前文化庁長官による基調講演をもとに、静岡県文化プログラムに期待される役割についてパネルディスカッションを行った。

開催日　2017年10月29日　**会　場**　大日本報徳社 大講堂（掛川市）

ゲスト　青柳正規（前文化庁長官、東京大学名誉教授）
山口裕美（「かけがわ茶エンナーレ」総合プロデューサー）
川勝平太（静岡県知事）

モデレーター　太下義之（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社主席研究員）

静岡県文化プログラム500日前イベント

東京2020オリンピック・パラリンピック開催500日前を記念し、静岡県文化プログラムの周知とオリンピックの機運醸成を図るため、伝統芸能フェスティバルの開催やパネル展による文化プログラムの紹介などを行った。

開催日　2019年3月26日～4月4日

会　場　グランシップ（静岡市）

ラグビーワールドカップ2019関連イベント

大会のため来静する県内外の観戦客等を文化プログラムで「おもてなし」した。

開催日	内容	会　場
2019年9月21日	**ふくろい野外音楽　芸術フェスタin月見の里（ＳＰＡＣ野外劇等）**	袋井市月見の里学遊館（袋井市）
2019年9月28日	**ラグビーW杯ステージイベント【地域部活、ＡＣＴ-Ｊ Ｔ】**	JR愛野駅～スタジアム周辺（袋井市）
	かけがわ茶エンナーレ2020「茶文化でおもてなしイベント」	掛川城公園三の丸広場（掛川市）

静岡県文化プログラムリスタートセレモニー

県域プログラム「手の愉悦～革新する工芸」展の開会式とあわせてコロナ禍における文化プログラムの再開を宣言した。

日　時　令和２年10月９日
会　場　静岡文化芸術大学（浜松市）

広報物

広報誌『たねの根』

県内外に配布するフリーペーパー。「なにかの始まりは誰かの思いや自然発生的な交流や共感がきっかけだったかもしれない。それが『種』。始まりは文化と呼べるほど洗練されていなかったかもしれないが、長い年月をかけて発酵・熟成していくことで地域に広く根付き、広がり、受け継がれている。それが『根』である。」をコンセプトに、静岡県内の文化・芸術活動を取り上げ、紹介した。特集では「場」をテーマに、人と地域と文化の関係を探った。

2018年３月20日発行
編集：小林稔和　　アートディレクション：坂本陽一（mots）
監修：紫牟田伸子（SJ）

静岡県文化プログラム報告書2015-2016、2017

静岡県文化プログラムの活動報告書。2015年度文化資源調査、2016年度モデルプログラム、2017年度提案プログラムを紹介するほか、プログラム・コーディネーター等による座談会等を掲載し、文化プログラムの取組を周知し、参加を呼びかけた。

報告書2015－2016　2017年７月14日発行
報告書2017　　2018年６月30日発行

編集：紫牟田伸子
アートディレクション：坂本陽一（mots）

県民だより　2019年11月号

プログラムの担い手の声や、スケジュールなど、６ページにわたり文化プログラムを特集。

リーフレット

2019年から2021年にかけて、静岡県内全域で展開されるプログラムを掲載したリーフレットを発行し、文化施設や駅、コンビニ等に広く配架した。

ウェブサイト

静岡県文化プログラムの公演情報やブログ等による活動レポートを発信したほか、イベントカレンダー、オリジナル動画、観光と連携したモデルコースなど、多彩なコンテンツにより広報を行った。
また、ウェブサイトとfacebook、Twitter、InstagramなどのSNSを連動させ、情報の拡散を図った。

URL https//shizuoka-ac.org（閉鎖）
Facebook https//www.facebook.com/Shizuoka.arts/
Twitter https//twitter.com/shizuoka_arts/
Instagram shizuoka_arts

テレビ番組　「エール・シズオカ・カルチャー」

静岡県文化プログラムの担い手に焦点を当て、「静岡朝日テレビとびっきり！しずおか土曜版」内で紹介した。番組ウェブサイトでは過去放送回を公開した。

放送日時
2020年10月～2021年6月の毎週土曜日　11時35分頃～　全37回放送

屋外広告等

市街地や駅、県庁前など、人通りの多い場所へ広告を掲出した。2020年10月には、ＪＲ東海道本線の熱海駅～豊橋駅間を運行する車両を文化プログラムの広告で埋め尽くし、各駅へのポスター掲示やリーフレットの配架と連動した広報を実施した。

静岡に花開く文化プログラム

500日前イベント多彩に開催

オリンピックは「スポーツ」と「文化」の祭典

地域の文化を掘り起こし広める

文化プログラムの認証制度

文化を支える人材を育てる

寛容な「ふじのくに」の魅力を世界に発信

地域とアートが共鳴する

文化プログラムとは―

テーマ「地域とアートが共鳴する」

静岡県文化プログラム認証制度

EVENT

2019年3月13日　静岡新聞朝刊

その他活動状況

地域とアートが共鳴する

《文化プログラムを見に行こう》

「文化の祭典」でもあるオリンピック・パラリンピック。2020年に向け、静岡県内でも音楽や美術、演劇、伝統芸能にもちろん、産業、ものづくり、福祉や まちづくり、食など、さまざまな分野と連携した文化プログラムを展開しています。

気になるプログラムを見つけたら、出掛けてみませんか。

《文化プログラムにエントリーしよう》

文化・芸術の振興などを目的として実施する、地域資源を生かした企画・イベントを「静岡県文化プログラム」として展開してみませんか。静岡県文化プログラム推進委員会では、認証制度を設け、エントリーを随時募集しています。認証を受けたプログラムはシンボルマークを使えるほか、ブンプロ・ホームページのイベントカレンダーで紹介されるなど、広報の支援が受けられます。企画イベントを通して、一緒にオリンピック・パラリンピックを盛り上げましょう。

2019 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

●イベントカレンダー、認証制度、モデルルートの詳しい情報はこちら
ブンプロ・ホームページ
https://shizuoka-ac.org
ブンプロ　検索

静岡県文化プログラム推進委員会事務局（グランシップ1F）
TEL 054-204-0310　e-mail info@shizuoka-ac.org

静岡県では、2020年の東京大会を契機に、県内のさまざまな文化資源を生かしたプログラムが各地で展開されるよう、多様な担い手による取り組みを促進するとともに、文化プログラムの域際で培った、文化芸術の支援に関わる人材、住組み、地域のネットワーク等のレガシー（遺産）が、2020年以降も本県の文化芸術振興につながることを目指しています。

アーティストの力を借りて福祉の現場と社会をつなぐ

NPO法人ぱれっと代表 松本 知子さん

障害者を支援する浜松市社会福祉法人ぱれっとは、2008年から美術家や音楽家などのアーティストを派遣したり、もの作りをしたり、音楽演奏を聴いたりするワークショップや展覧会を実施している。中でも、子どもが描いた年賀状の絵を公募し、図に起こして、親が来院に作ってみる。おじいさん、両親を、毎年恒例のプログラム。子どもの絵とお母さんが作ったお年賀の写真にコメントを添えて、園内外に展示している。昨年は地域の保育園も加わり展覧会を開催、230人余りが来場した。

「福祉の現場をもっと多くの人に知ってもらうためにはどうしたらいいか、アーティストの感性や価値観に触れることで、私たちの凝り固まった思考を柔軟にしたい。子どもの療育と職員の研修を兼ねたと話す松本さん。

「外部の人とふれあう、混じり合うことで、これまで見えなかったものが少しずつ見えるようになりました。こうしたコミュニケーションが当たり前の文化になるように、今後は障害支援にもアプローチしたいです」

舞楽食を再現し食文化を未来に伝承

ふじのくに食の都づくり仕事人 ふじのくにラボ 代表 一木 敏雅さん

小国神社、天宮神社の二段舞楽、山名神社天王祭舞台奉納した、遠江北町の舞楽「その伝統は、脈々と受け継がれ、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。その舞楽を再現しようと取り組んでいるのが、浜松市の一木さんです。

一木さんは、「祭りの食事は、単におなかを満たすだけではなく、神様と交わる神事の一環。だからこそ舞楽と食をセットで記録に残したい」と、出身地である森町教育委員会の協力を得て、復活を目指しているところからスタートした。調理法は残されていないものの、資料を参考にして、昆布やマツタケなどの材料や、当時の文化をヒントに再現。11月のワークショップに向けて、舞楽食をおいしく食べてもらえるように試行錯誤を重ねている。

「せっかくの方に参加していただき、日本に伝わる、食文化を体験してほしいと、今後は地域の伝統芸能と連携し、視野に入れている。「伝統芸能や風俗に興味を抱いた人たちにも、力強く引っ張る食文化を世代に継承し、海外にも発信したい」と、力強く語る一木さんの、料理人だからこそできる取り組みに期待がかかる。

違いを超え、作品を創る醍醐味を伝えたい

佐藤典子舞踊団・バレエ教室 主宰 佐藤 典子さん

浜松市舞田市小に バレエ教室を展開し、モダンダンスの普及に努める傍ら、作家やプロデューサーとして、数多くの公演作品を手掛けている方が、佐藤典子さんだ。

9月23日(月・祝)に開催する磐田プレ公演「ラ・バイ」では、舞台芸術責任者として企画・日韓中、モンゴル4カ国の子どもたちによる作品や、世界の注目を集めるダンサー大浦光市氏の指導のもと、障害のある子どもたちも参加した夕べ、本格出演の舞台の詩に合わせ、舞踊や音楽などを演踊する舞台を繰り広げる予定だ。

来年開催される東京2020オンリンピック・パラリンピック競技大会に向け、全国で展開されるプログラム。静岡県は2020年をフェスティバルイヤーと位置付け、1年前となる今年から、本格的にプログラムを展開します。そこで今回はその実施に向け、団体にスポットを当てて、その意気込みや特徴を紹介します。

（公園・制作／静岡県観光交流局地域ビジョン推進課）

ますます熱量帯びる文化プログラム

静岡県文化プログラム

「静岡県文化プログラム　2019ガイド」配布中

ライバル達が手を取り合い“しゃぎり”の魅力を発信

しゃぎりフェスティバル実行委員会 代表 福田 勝彦さん

しゃぎりとは450年程前発祥とされる三島に伝わる伝統芸能で、大太鼓や小太鼓、篠笛で「めさえ」やすり鉦（がね）を用いて、山車の上で演奏する祭り囃子（はやし）だ。8月の三嶋大祭りで、各町内の山車が出揃い、けんかのごとく一斉に演奏する「殴りあい」が圧巻だが、勝敗は決が判定する訳ではなく、自分たちで感じ取るからニュアンスだ。

「音とレイアウトはシンプルですが、それだけに突き詰めると魅が深い。一つの音楽として聴かせるレベルにまで高めていきたい」と思はでる。

しゃぎりフェスティバルは、各町内の山車が出揃い、けんかのごとく一斉に演奏する「殴りあい」が圧巻だが、勝敗は決が判定する訳ではなく、自分たちで感じ取るからニュアンスだ。

「音とレイアウトはシンプルですが、それだけに突き詰めると魅が深い。一つの音楽として聴かせるレベルにまで高めていきたい」と思はでる。

移住した里山で地元の人々と創るプロジェクト

原泉アートプロジェクト代表・ディレクター 羽鳥 祐子さん

プロジェクトの代表を務める羽鳥祐子さんは、都市出身のグラフィックデザイナーで、海外や東京で活躍した後、3年前から富士川市北部の茶畑による手入れされた水田が広がる泉地区の空き家に移住した。

「新しい価値を見つけていく術、遊び道を楽しむ。これまでにないものの捉え方や見方を見つけたいという思いから、昨年3月にプロジェクトを立ち上げた。

今年で2回目の開催を迎える「原泉アートデイズ」は、国内外から集まったアーティストたち が、実際に原泉地区に滞在し、制作した作品を地域のさまざまな場所で展示するアートプロジェクト。地元の人たち は、食材だけでなく、制作に必要な資材まで準備し入れ、アーティストやプロジェクトを支援してくれるという。

「多様性のあるかっこいいまちをつくりたい。将来的には日常的に現代アートに触れ、アーティストと交流できる地域にしたい」と話す羽鳥さん。9月7日（土）には使われなくなった茶工場で「NIGHT THEATER」を開催、新しい発見と感動に出会えそうだ。

伝統芸能のこれからを考えるフェスティバル

浅川地区獅子舞保存会 幹事長 深谷 義弘さん

静岡県文化財団が今年3月に開催し、好評を博した、さくのくに伝統芸能フェスティバル、その第2弾を9月22日（日）にグランシップ下田市民文化会館大、次世代育成や技術の継承をテーマに、伝統芸能団体の実演やトークを繰り広げる。

出演団体のひとつである遠州横須賀三社祭囃子（さんしゃまつり）は、毎年4月に掛川市や指定される「遠州横須賀三熊野神社（祭）」の祭り囃子を練習する。各種イベントで演奏を行うほか、子どもたちへの伝承に取り組んでいる。

「地域の人たちが、祭りを通じて、親しみあいながら、子どもたちへの伝承に取り組んでいる。

9月22日（日）に向けて、長く継伝承されている祭りは、住みよい町づくりや生きがいづくりに欠かせない。地域を盛り上げる町の財産でもある。三社祭囃子を子どもたちに継承し、守り育てていくことは、私たちの大切な使命です。こうした思いを少しでも舞台で表現したいと語った。

EVENT

伝統文化交流会
伝統芸能
9月7日（土）／伝統文化伝承館「時愛」　●無料

4月1日にオープンした伝承館を会場として、大井川流域の駿河神楽と太鼓の公演を行います。徳山の盆踊や町文化協会団体も出演の予定。

問い合わせ／川根本町社会教育課　電0547-58-7080

第3回　しゃぎりフェスティバル
伝統芸能
9月15日（日）／三島市民文化会館大ホール　●無料

みしまっ子が大好きな三島の伝統芸能「しゃぎり」の魅力を、演奏、ファッションショー、しゃぎり講座等を交えて、お届けします。

問い合わせ／しゃぎりフェスティバル実行委員会
https://www.facebook.com/shagiri.fes/

熱海未来音楽祭
音楽
9月20日（金）・21日（土）／起雷閣
一般前売り／20日：3,000円　21日：3,500円

パリ、オーストリア、日本、世界で活躍する国際色あふれる音楽家たちが熱海の街を音楽で染めます。起雷閣でのコンサートのほか、街のあちこちでゲリラ的に演奏を行います。

問い合わせ／MAKIGAMI OFFICE
http://www.makigami.com/atamimirai.html

ふじのくに伝統芸能フェスティバル
伝統芸能
9月22日（日）／グランシップ中ホール・大地
●無料（事前申し込み）

県内各地に残る芸能が地域や次世代の子どもたちとともに伝承されている実例を紹介します。
主催／静岡県文化財団

問い合わせ／グランシップチケットセンター　電054-289-9000

詩と現代舞踊と音楽の祭典 磐田プレ公演「ラ・バイ」
演劇・舞踊
9月23日（月・祝）／磐田市民文化会館大ホール
開場14:30　開演15:00　全席自由
大人／2,500円　高校生以下／1,500円

アジア4カ国の子どもたちによるダンスの競演。障害や差別を超えて踊る「シェイク・ハンド」や「大岡信の詩想から」他。　主催／静岡県文化プログラム磐田プレ公演実行委員会

問い合わせ／佐藤典子舞踊研究所
電0538-34-1607　http://norikosato-ballet.com/

ふじのくに各流大茶会
食文化
9月25日（水）～29日（日）／ふじのくに茶の都ミュージアム
●有料

静岡県茶道連盟の抹茶・煎茶の各流派が、日替わりで茶席を用意、静岡県のお茶文化に触れ、体験していただける5日間です。
主催／ふじのくに各流大茶会実行委員会

問い合わせ／ふじのくに各流大茶会実行委員会　電054-281-9010

「かけがわ茶エンナーレ2020」プレイベント
食文化
9月28日（土）／掛川城公園 三の丸広場　●一部有料

3年に1度開催する「茶」と「アート」を融合させたまちづくり芸術祭を来年に控え、今年はラグビー W杯に倣せた「茶文化」おもてなしイベントを実施。

問い合わせ／かけがわ茶エンナーレ実行委員会　電0537-21-1126

伝統芸能と食文化 ～雅楽と茶懐石～
食文化
10月8日（火）／東山旧岸邸　●有料

近代数寄屋建築の東山旧岸邸で世界最古のオーケストラといわれる雅楽と、隣接するとらや工房で茶懐石溜石による料理に触れ文化継承を考えます。
問合せ内容は詳細はホームページをご覧ください
https://www.kyu-kishitei.jp/

問い合わせ／御殿場市東山旧岸邸　電0550-83-0747

原泉アートデイズ! 2019 ～泉とともに～
アートプロジェクト
10月24日（木）～11月10日（日）／旧JA原泉支所　●投げ銭方式

掛川市北部の原泉地区で、現代アートに出合える2週間。アーティストの湯在制作を推進し、日常的にアートに触れられる場を創出。

問い合わせ／原泉アートプロジェクト　haraizumiart@gmail.com

創作劇「遠州報徳と我が故郷」
演劇・舞踊
10月27日（日）14:00／大日本報徳社 大講堂前広場　●無料

全国初の文化系地域部活・掛川未来創造部が、報徳ゆかりの地を舞台に音楽・演劇・ダンスを織り交ぜた創作劇を上演します。

問い合わせ／ふじのくに文教創造ネットワーク　電0537-28-7380

WABISA VILLAGE SASAMA
美術
11月3日（日・祝）・4日（月・振休）
／島田市山村都市交流センターささま他　●無料

「暮らしのアート」をテーマに、ささま国際陶芸祭にてスウェーデン陶芸グループ「KAOLIN」の茶箱を使った展示やIKEA家具と陶芸作品のコラボ展示などを行います。

問い合わせ／島田市山村都市交流センターささま　電0547-54-0661

第２回　熱海怪獣映画祭
映像
11月22日（金）～24日（日）／国際観光専門学校熱海校他
●一部有料

「熱海を怪獣の聖地に」をキャッチフレーズに、熱海市内にて怪獣映画の上映と関連したイベントを開催します。

問い合わせ／一般社団法人　熱海怪獣映画祭　http://atamikaiju.com

地域とアートが共鳴する

東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム

© Christophe Raynaud de Lage / Festival d'Avignon

ふじのくに野外芸術フェスタ2020

宮城聴演出SPAC公演『アンティゴネ』　5/2(土)・3(日/祝)・4(月/祝)・5(火/祝) 各日18:45開演　駿府城公園 紅葉山庭園前広場 特設会場

世界で絶賛された作品を静岡で

東京2020 NIPPONフェスティバル

2017年フランス、2019年ニューヨークで多くの観客を虜にしてきたSPACの『アンティゴネ』が、「東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム」として静岡に帰ってきます。

本作品は2017年、世界最高峰の演劇の祭典「アヴィニョン演劇祭」のオープニング作品として、客席数約2,000のメイン会場「アヴィニョン法王庁中庭」で上演されました。

ギリシア悲劇を日本風に大胆にアレンジしたこの作品は、人を善悪に二分しない王女アンティゴネの思想に、「死ねばみな仏」という日本人の死生観を重ねた独創的な解釈や、一面に水をたたえた舞台装置、俳優の巨大な影を壁面に映し出す演出で大きな反響を呼びました。その後も19年秋には「Japan2019」の公式企画として、ニューヨークの「パーク・アベニュー・アーモリー」で上演され、米TIME誌が選ぶ2019年の演劇公演ベストテン第6位に選出されています。

今回の静岡公演では、アヴィニョンやニューヨークと同等規模の劇空間で上演、同時期に開催する「ふじのくにせかい演劇祭」「スリランジャード静岡」とともに、世界から訪れる観客を楽しませます。

© Christophe Raynaud de Lage / Festival d'Avignon

前売り券販売中（全席自由）

- **一般**／4,200円
- **ペア割引**／3,700円（2名で1枚につき）
- **グループ割引**／3,300円（3名以上で1枚につき）
- **ゆうゆう割引**／3,500円［満60歳以上］
- **学生割引**／2,000円［大学生・専門学校生］1,000円［高校生以下］
- **障がい者割引**／2,900円［障害者手帳をお持ちの方］

※付添（1名）は無料

◎SPAC チケットセンター　電054-202-3399（10:00～18:00／休業日を除く）
◎ウェブ予約　SPAC 公式ホームページ https://spac.or.jp

静岡県では、2020年の東京大会を契機に、県内のさまざまな文化資源を生かしたプログラムが各地で展開されるよう、多様な担い手による取り組みを促進するとともに、文化プログラムの展開で培った、文化芸術の支援に関わる人材、住民み、地域のネットワーク等のレガシー（遺産）が、2020年以降も本県の文化芸術振興につながることを目指しています。

●イベントカレンダー、認証制度、モデルルートの詳しい情報はこちら
ブンプロ・ホームページ
https://shizuoka-ac.org

ブンプロ　検索

静岡県文化プログラム推進委員会事務局
TEL 054-204-0310　e-mail　info@shizuoka-ac.org

文化プログラムを見に行こう

「文化の祭典」でもあるオリンピック・パラリンピック。静岡県内でも音楽や美術、演劇、伝統芸能はもちろん、産業、ものづくり、福祉やまちづくり、食など、さまざまな分野と連携した文化プログラムを展開しています。

気にしてるプログラムを見つけたら、出掛けてみませんか。

2020 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

文化プログラムにエントリーしよう

文化・芸術の振興などを目的として実施する、地域資源を生かした企画・イベントを「静岡県文化プログラム」として展開してみませんか。静岡県文化プログラム推進委員会では認証制度を設け、エントリーを随時募集しています。認証を受けたプログラムはシンボルマークを使えるほか、ブンプロ・ホームページのイベントカレンダーで紹介されるなど、広報の支援が受けられます。企画イベントを通じて、一緒にオリンピック・パラリンピックを盛り上げましょう。

静岡県文化プログラム

レガシー創出目指す文化プログラム

オリンピック憲章に「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と定められているとおり、オリンピック・パラリンピックは「スポーツの祭典」であると同時に「文化の祭典」です。

今年の東京2020オリンピック・パラリンピックに向けては、川勝知事が2014年の全国知事会議で、日本全国での文化プログラム展開を呼びかけ、その方針が採択されました。以来、静岡県は文化プログラム推進委員会を設置し、「地域とアートが共鳴する」をテーマに16年からプログラムを展開し、年々その充実を図ってきました。

本番年の今年はもちろん、大会以降もレガシー（遺産）として地域主体の文化芸術創造活動を促進します。　〈企画・制作／静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

2020年をスタートラインに

静岡県は、県内における潜在的な文化・地域・人的資源などの可視化、掘り起こしと価値を見いだし磨き合う文化の育成、創造性を高め繋ぐ一人ひとりの生き方の多様性、可能性の提起、文化・芸術を生かした地域的・社会的課題への対応を目指し、2020年以降を見据え、県の文化・芸術振興に活用可能な仕組み、人材の育成に取り組んでいます。

今年5月には「東京2020 NIPPONフェスティバル」に採択されたSPACの「アンティゴネ」が上演されます。また、県内の文化・芸術団体が主体となって、オリンピック・パラリンピック開催期間を中心に、かぐや姫伝説などを題材にした舞台公演や各種大会等、伝統工芸と先端技術を融合させた展示会など、本県ならではのスポーツプログラムを展開します。

さらに、観光、教育、子育て、産業、まちづくりなど、社会のさまざまな分野と文化・芸術を結び付ける取り組みを促進するプログラム・コーディネーターが、時には中の人、時には「外の人」として積極的に関わり、文化プログラムの展開を図ります。

次世代を担うこどもたちにも働きかけ、「文化・芸術を軸にさまざまな団体のネットワークが広がったりすることで、これからの発展が期待されます。「文化は100年単位で育つ」文化プログラムは、2020年が終着点ではなく、ここをスタートラインとして、さらに静岡の新たな文化の形を創出し続けます。

東京2020オリンピック・パラリンピック500日前を記念した「静岡県文化プログラム」展

アートと地域が密接に関わる形【地域づくり】

「UNMANNED無人駅の芸術祭/大岡」は3月22日（日）まで開催中

将来の担い手となる人材の育成【次世代へつなぐ】

スケイル・ラボラトリィによる親子で楽しむ音楽会

伝統芸能の後継者の確保が課題となる中、伊豆地域の郷土芸能を一堂に集め舞台で披露する「ふじのくに大田楽」では、公演を見た子どもたちが地元の芸能団体に加入するなどの変化をもたらしました。また、三島の伝統芸能である「しゃぎり」を多くの人に知ってもらうため、町内ごとに演奏発表する「しゃぎりフェスティバル」など、ユニークな取り組みも生まれています。

中でも特徴的なのは、今年で3年目になる「地域部活」。掛川市内で複数の中学校の生徒が参加して音楽、ダンス、演劇を中心とした活動を行う「地域部活・掛川未来創造部Piece」が立ちたちで活動を行い、時には各分野のアーティストによるレッスンが行われるなど、学校の枠を超えた活動は全国からも注目されています。「地元掛川で関係される『かけがえのエンゲージ』に触れて、いずれはこのイベントに主体的に関わりたいという思いが芽生えている生徒もいる」という、将来の担い手となる人材を育てています。

住民主導で広がる創造的な活動【ネットワークづくり】

熱海未来音楽祭の一場面

駅前の空きスペースなどを活用し、地域で活動する人たちが出会い、話し合う機会をつくるなど多彩な活動を行っているスケイル・ラボラトリィとこのプログラムをきっかけに、東京都城の担い手の連携が進み、住民と移住者が結びなって新たなプログラムに取り組むなど、ネットワークが広がっています。

お互いに刺激しあったり、支えあったりする中で、よりよい形に昇華する、アーティストの力を借りながら、住民主導からのエネ発現できる地域に根ざした活動の広がりが期待されます。

EVENT

ふじのくに各流大茶会

食文化

7月29日(水)～8月2日(日)／ふじのくに茶の都ミュージアム　●有料

お茶専門の博物館にて、静岡県茶道連盟の抹茶・煎茶の各流派が日替わりで茶席を担当します。静岡県のお茶文化に触れ、茶会を体験していただける3日間です。

問い合わせ／ふじのくに各流大茶会実行委員会（静岡新聞社内）　電054-281-9010

"アート×産業" 地方創生みらいフェスティバル in 掛川2020

演劇・舞踊

7月26日(日)／掛川市美感ホール　●無料(事前申込)

全国でもめずらしい文化系地域部活・掛川未来創造部が、演劇・音楽・ダンス等のコラボによるオリジナル創作劇の上演など、新たな文化部活動の可能性を発信します。

問い合わせ／地域部活・掛川未来創造部Palette　電090-1755-3602

港まち文化プロジェクト ～次世代へつなぐ焼津の魚河岸文化～

アートプロジェクト

6月～10月(予定)／焼津新港　●無料

かつて小泉八雲が愛したことで知られる、港まち焼津。先人たちが繋いできた大漁旗や魚河岸文化を、モノづくりを通じて海とともに次世代に継承していきます。

問い合わせ／焼市YAI-CHI　電054-295-6666

フォーラム「ビジネス×アートを考える」

教養

5月26日(火)／グランシップ「交流ホール」　●無料(事前申込)

時代のニーズを先取りし、進化を続けるビジネスの世界と、時代を切り開く挑戦を続け、新しい価値を創造する芸術家。「ビジネス×アート」を考えてみませんか。

問い合わせ／静岡県文化プログラム推進委員会　電054-204-0310
申込受付／電054-272-5487

Usamiフェス2020 in とまた浜辺公園

アートプロジェクト

5月24日(日)／宇佐美海岸 留田浜辺公園　●無料

伊豆の魅力満載の浜辺イベント。ジャイアントフラワー展示、灯篤アート、音楽・ダンス・大道芸等各種ステージなど、一日中遊んで楽しめるプログラムです。

問い合わせ／Usamiフェス実行委員会 山岸[温泉民宿海風荘]　電0557-47-3218

タイムスリップ!1964 記憶をめぐる藤枝宿 商店街活性化劇場

演劇・舞踊

5月3日(日/祝)・4日(月/祝)／藤枝市旧東海道商店街周辺　●無料

東海道藤枝宿沿いの商店街を、まち歩き案内と回遊します。前回オリンピックが開催された1964年の街の様子を、演劇を通じて一緒に体験してみましょう。

問い合わせ／藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会　電054-625-8885

SPAC『忠臣蔵2020』

演劇・舞踊

8月16日(日)／グランシップ大ホール　●有料

© 鵜木浩彦

あの伝説の舞台がふたたび！日本人特有の「空気」をユーモラスに描いた半田オリザの戯曲が、一大スペクタクルに。SPAC俳優と公募により集まった市民総勢100人による、圧巻の群集劇をお見逃しなく！

問い合わせ／SPAC チケットセンター　電054-202-3399

詩と舞踊と音楽の祭典ふじのくにものがたり

演劇・舞踊

7月26日(日)／グランシップ「中ホール」　●有料

万葉集や静岡県に関わる歌曲、かぐや姫伝説等、ふるさと静岡の心の宝物を舞台芸術として創作し、上演。国内外に静岡県の芸術文化の魅力を発信します。

問い合わせ／ふじのくにものがたり実行委員会事務局　電054-288-7188

工芸展「手の愉悦―革新する工芸」 関連企画「先端技術展」

展覧

工芸展7月17日(金)～8月2日(日) 先端技術展6月26日(金)～7月12日(日)
静岡文化芸術大学ギャラリー　●無料

"モノづくり国"である静岡県にとって、今に続く先端技術のもととなったものは"手の技"。この展覧会では、昔から受け継がれている"手の技"に現代でも通用する新しい視点を取り入れた作品を展示します。併せて、県内企業の優れた技術を紹介する「先端技術展」も開催します。

問い合わせ／静岡文化芸術大学 地域連携室　電053-457-6105

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念 美の競演―静岡県美名品展

展覧

6月13日(土)～6月28日(日)／静岡県立美術館　●有料

伊藤若冲『樹花鳥獣図屏風』（左隻）

東京2020オリンピック・パラリンピック開催を記念し、当館の所蔵品、寄託品から、伊藤若冲や樹花鳥獣図屏風ほか、珠玉の名品を展示します。

問い合わせ／静岡県立美術館　電054-263-5755

ふじのくに伝統芸能フェスティバル

伝統芸能

5月31日(日)／富士宮市民文化会館　●無料(事前申込)

静岡県を中心に多彩な民族芸能団体が集結。古くから各地域に継承されている芸能を次々と披露します。

問い合わせ／グランシップチケットセンター　電054-289-9000

第4回　しゃぎりフェスティバル

伝統芸能

5月24日(日)／三嶋大社　●無料

みしまっ子が大好きな三島の伝統芸能「しゃぎり」の魅力を、演奏やワークショップ等を交えお届けします。「三島農兵節」とのコラボ演奏も見逃せません。

問い合わせ／三島市 文化振興課　電055-983-2756

2020年1月14日現在の情報です。日程などは変更の可能性がありますので、ホームページなどでご確認ください。

さの書店本店

いよいよ東京2020オリンピック・パラリンピックの開催を夏に控え、静岡でも「静岡県文化プログラム2020フェスティバル」が盛り上がりを見せています。ウィズコロナの新しい生活様式で展開する同プログラムについて、その意義や見どころ、そして未来へつなぐレガシーについて、宮城聰総合プロデューサー、加藤種男チーフ・オペレーティング・ディレクターにお話を伺いました。

〈企画制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

地域とアートが共鳴する文化プログラム

SHIZUOKA 2020 静岡県文化プログラム

多様な芸術文化にあふれる静岡県 心にビタミンを

静岡県文化プログラム総合プロデューサー SPAC芸術総監督
宮城 聰 氏

地域の特色が芸術文化に

―静岡県は2016年から文化プログラムを実施しています。総合プロデューサーの立場から見た静岡県の文化プログラムの特徴をお話しください。

宮城　静岡県は自然環境、産業、言語など地域ごとに微細な違いがあるバリエーションに富んだ県です。微細な多様性に気付くと文化に奥深い楽しみを見出せます。例えば、仏教の思想は普遍的ですが、言語や気候などそれぞれの国の特徴が影響し、国ごとに少しずつ異なった仏像ができます。地域によって現れ方が違うことは文化の楽しさの一つです。静岡県の文化プログラムも、より文化の楽しさを感じられると思います。

コロナ禍だからこそできること

―新型コロナウイルス感染拡大により、芸術文化にも大きな変化や影響があったと思います。コロナ禍における芸術文化の存在意義とは何でしょうか。

宮城　危機的状況に直面し「芸術文化はどう生き延びればいいか」怯えました。文化の発展には試練が付き物です。例えば、シェイクスピアが活躍した時代は疫病が大流行し、文明が始まった地域は川が氾濫するといったように、冷静に考えると文化の発展は試練と共にあったと気付きました。人間は困難に直面したときに、考え向き合うことで新しいものを生み出してきました。コロナ禍も同じように、コロナという試練に向き合うことで当たり前だと思って見落としていたものを見直すきっかけをくれます。そして、変える文化や残すべき文化など、新しい発見があるはずです。「歴史のまばたき」と呼んでいるのですが、まばたきすることで当たり前に思っていたことが新鮮に感じられます。新鮮な目で周りを見ることで新たな芸術や文化が生まれると思います。

―この時代、わたしたちは芸術文化にどのように関わればいいのでしょうか？

宮城　人間の生きるエネルギーは「まだ世の中にないものを作りたい、見たい」という気持ちから生まれています。好奇心を大切に、さまざまな芸術文化をビタミンのように摂取してほしいです。

―アヴィニョン演劇祭のオープニングを飾った「アンティゴネ」がついに静岡県でも上演されます。この作品への思いをお聞かせください。

宮城　以前からなぜ戦争はなくならないのか考えていました。戦争が続くのは、反省は忘れられ、憎しみは受け継がれるからです。憎悪の継承を止めるにはどうすべきか考えたとき、鎌倉時代の仏教の「死んだらみな仏」という考えを広めることで阻止できるのではないかと思いました。この考えを世界の人に訴えてみたいと思い、作品を手掛けました。今回の公演で、思い込みで凝り固まった思想が解けるような体験をしてほしいです。

―今後の文化プログラムの展開や抱負をお願いします。

宮城　今後は、蓄積された文化プログラムの仕組みをアーツカウンシルに継承して活動を広げ、多くの県民が芸術文化に触れる機会を増やしたいです。そして、芸術文化が県民の心のビタミンとなり、心の健康寿命が日本一の県になることを期待しています。

宮城 聰 氏

東京2020 NIPPON フェスティバル 共催プログラム

東京2020 NIPPONフェスティバル

ふじのくに野外劇場フェスタ 2021 静岡
宮城聰演出SPAC公演『アンティゴネ』

5/2(日)～5/5(水・祝)／駿府城公園　紅葉山庭園前広場特設会場

宮城聰×SPACの話題作が凱旋公演

2017年、世界最高峰の演劇の祭典「アヴィニョン演劇祭」からの招聘(しょうへい)を受けた宮城聰演出・SPAC『アンティゴネ』。客席数約2,000席のメイン会場「アヴィニョン法王庁中庭」にて同演劇祭のオープニングを飾りました。人を善悪に二分しない王女アンティゴネの思想に、「死ねばみな仏」という日本人の死生観を重ねた独創的な演出。舞台全面に水が張られた装置や、高さ30ｍの法王庁の壁面に俳優の影を映し出す仕掛けは、大きな反響を呼びました。19年秋には「Japan 2019」の公式企画として、ニューヨークの「パーク・アベニュー・アーモリー」で上演され、開幕翌日ニューヨーク・タイムズ紙で批評が「驚嘆で魅惑的な世界に引き込まれる」と激賞。さらに、米国版TIME誌が選ぶ2019年の演劇公演ベストテン第6位に選出されました。20年、新型コロナウイルス感染症の拡大による中止を経て、いよいよ21年、世界で絶賛された話題作が静岡に凱旋。新緑の静岡・駿府城公園に、アヴィニョンやニューヨーク公演の規模に迫る劇空間が出現します。

前売り券販売中（全席指定）

- 一般／4,200円
- ペア割引／3,700円（2名で1枚につき）
- グループ割引／3,300円（3名以上で1枚につき）
- ゆうゆう割引／3,500円［満60歳以上］
- 学生割引／2,000円［大学生・専門学校生］ 1,000円［高校生以下］
- 障がい者割引／2,900円［障害者手帳をお持ちの方］ ※付添（1名）は無料

◎SPACチケットセンター　電054-202-3399（10:00～18:00）
◎ウェブ予約　SPAC公式ホームページ https://spac.or.jp

『アンティゴネ』アヴィニョン公演(2017) © Christophe Raynaud de Lage

舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」

5/23(日)／清水文化会館 マリナート

佐藤典子監修、大岡淳演出により、第1部「ふるさとの心を今に…　静岡県ゆかりの詩人・作曲家の作品を踊る」、第2部「舞踊音楽劇　かぐや姫、霊峰に帰る」の２部構成で、総合芸術の祭典をお届けします。第1部では、静岡県現代舞踊協会のダンサーたちが、万葉集や童謡を題材として、ふじのくにの心を踊ります。第2部では、大柴拓磨、大前光市らゲストダンサー、宮城嶋遥加らSPAC俳優、作曲家・渡会美帆と県内プロ演奏家によるアンサンブル「帆楽伶奏団」、指揮・磯山隆一郎、友情出演として音楽青葉会・静岡児童合唱団を迎え、静岡県現代舞踊協会のダンサーたち、県内で活動する俳優たちが、豪華絢爛な共演を繰り広げ、富士山かぐや姫伝説を題材とした物語を紡ぎます。

【問い合わせ】
ふじのくにものがたり実行委員会事務局（電054-288-7188）
自由席　一般 3,000円　高校生以下 1,500円
※3歳未満のお子様の入場はご遠慮ください。

出演者インタビュー

個性が融合する舞台に期待高まる

「ふじのくにものがたり」ゲストダンサー
大前 光市氏

交通事故による左膝下切断を乗り越え、プロダンサーに。2016年リオデジャネイロパラリンピック閉会式で注目を集めるなど、義足のダンサーとして活躍中。

「ふじのくにものがたり」は静岡の歴史や伝説を基に作られたもので、僕が演じるのは山の精の王。要の役柄の一つです。人間離れした存在感、獣のような迫力を感じていただきたいと思っています。

この作品の中で僕は義足をつけずに踊ります。以前は義足をつけて、両足のある人と遜色なく踊りたい、と思っていましたが、リオでの出演の少し前くらいから、僕だからできる踊りがあり、自分を通して人の可能性を感じてもらいたいと思うようになりました。自覚が芽生えたのだと思います。

ダンスを極めようとすると、ともするとマニアックになり、分かる人にだけ分かるということになりがちです。しかし、僕は障害も含め、オリジナリティーを大切にしつつ、誰にでも感情が伝わることを意識しています。この公演でもきっとみなさんに感じていただけるのではないでしょうか。

いよいよ１年越しの公演です。昨年のコロナ禍で発散できず蓄積している演者たちのエネルギーの放出をぜひ会場で体感してください。

アートの創り手創出 静岡から全国モデルに

静岡県文化プログラム チーフ・オペレーティング・ディレクター アーツカウンシルしずおか アーツカウンシル長
加藤 種男 氏

加藤 種男 氏

良質なアートプログラムとの出合い

―加藤さんはチーフ・オペレーティング・ディレクターとして、ここまで文化プログラムをけん引してきましたが、振り返っていかがでしょうか。

加藤　[illegible]

レガシーを受け継ぐアーツカウンシル

―この文化プログラムは本年が集大成の年となりますが、このレガシーを受け継いで「アーツカウンシルしずおか」が設立されました。これはどういうものなのでしょうか。

加藤　[illegible]

―これからの目標や抱負をお聞かせください。

加藤　[illegible] じて社会課題解決するという大きな目標の下、静岡から全国のモデルになれるような活動に取り組んでいきたいと思います。

アーツカウンシルしずおか

すべての県民が創り手に

アーツカウンシルしずおか ARTS COUNCIL SHIZUOKA

今年1月、静岡県文化財団内に設置され、4月から本格稼働した「アーツカウンシルしずおか」は、文化プログラムで育まれた文化芸術の力を生かした活動を支援し、地域を元気にすることを目的としています。まちづくりや観光、国際交流、福祉、教育、産業など、社会のさまざまな分野と文化芸術を結びつけることで、社会課題の解決を図り、地域の活性化を推進する県民たちの創造的な活動を支援します。

活動の柱には、創造的な活動の支援、人材育成・ネットワークづくり、調査研究・政策提言の三つが据えられています。

具体的には、創造的な活動の支援として、地域住民や事業者が担い手となり、地域資源を活用した地域活性化、社会課題への対応を目指す取り組みを募集。経費の一部助成や専門スタッフによる支援を行います。また、創造的活動の担い手や芸術家などを対象としたセミナーを開催したり、幅広い分野を結んだネットワークづくりを進め、情報の発信を行います。

さらに地域の文化資源や活動、国内外の先進事例などの調査を行い、データベース化を図ります。その中から、行政や文化団体に対し、調査研究結果を踏まえた政策の提言等を行います。

◆創造的な活動を支援

●詳しくはこちらから
アーツカウンシルしずおか　検索
https://artscouncil-shizuoka.jp/

PROGRAM

TV、WEBでも公開中！
エール・シズオカ・カルチャー

静岡県文化プログラムの担い手に焦点を当て、with コロナ期の文化芸術活動を紹介中。
静岡朝日テレビ とびっきり！しずおか土曜版

●詳しくはこちらから
エール・シズオカ・カルチャー　検索
https://www.satv.co.jp/0300program/0015tobikkiri_saturday/yell/

●イベントカレンダーなど、文化プログラムの詳しい情報はこちら
文化プログラム・ホームページ
https://shizuoka-ac.org
ブンプロ　検索

広報メッセンジャー・朝月也美さんが表紙の2021年度版リーフレットは、駅・コンビニなどで配付中！

静岡県文化プログラム推進委員会事務局
TEL 054-204-0310
e-mail info@shizuoka-ac.org
@shizuoka-arts

新型コロナウイルスに打ち勝つ 静岡県 支え合い基金 ～One for all, All for one～

to R mansion 公演＆ワークショップ「へんてこうじょうへようこそ」
演劇・舞踊

①フィジカルシアター公演「へんてこうじょう」 6/26(土)／MIRAIEリアン多目的ホール　●有料
②身体表現ワークショップ 6/27(日)／人宿町やどりぎ座　●有料

人気パフォーマンスカンパニーによる、パントマイム、アクロバット、マジック、演劇など、あらゆる身体表現で構成された公演とワークショップです。

問い合わせ／スロームーブメント静岡実行委員会 slm.shizuoka@gmail.com

グランシップ出前公演(長泉町) ふじのくに伝統芸能フェスティバル
伝統芸能

6月6日(日)／長泉町文化センター ベルフォーレ

芸能を次世代に受け継ぐ多彩な芸能団体が集結。古くから各地域に継承されている芸能の魅力を披露するとともに、コロナ禍における民俗芸能のこれからについて考えます。

※好評につき定員に達し、受付終了しました

「富士山の絵」展
美術

5月25日(火)～30日(日)／静岡県立美術館「県民ギャラリー」
●無料

油彩、水彩、日本画、版画、工芸等各部門の静岡県現代画家43人の「富士山」作品を一堂に展示します。

問い合わせ／アフトギャラリー　電0545-81-3866

企画展「引き出しの中の富士山 ―視(み)て楽しむ、蒐(あつ)めて楽しむ―」
教養

4月24日(土)～6月13日(日)／静岡県富士山世界遺産センター企画展示室　●有料

明治から平成初めまでの富士山が描かれた絵はがきや登山案内、切手、マッチ箱などを一挙公開。引き出しに入るサイズの品々に描かれた「小さな富士山」の魅力に迫ります。

問い合わせ／静岡県富士山世界遺産センター　電0544-21-3776

ストーリーズ 作品について学芸員(わたしたち)が知っていること
美術

4月6日(火)～5月16日(日)／静岡県立美術館
●有料

作品と関わる中で、学芸員(わたしたち)が発見したこと、調査・研究で明らかにできたことをご紹介。とっておきのストーリーを、展覧会を通して語ります。

問い合わせ／静岡県立美術館　電054-263-5755

演劇ユニットHORIZON番外公演 The beauties of nature「Contamination」
演劇・舞踊

6/19(土)、6/20(日)／LIVE ROXY SHIZUOKA
●有料

劇団オリジナル脚本を舞台化。とある療養所のさまざまな花が集められた「植物園」が舞台。舞台美術と客席装飾に感染症対策が組み込まれています。

問い合わせ／演劇ユニットHORIZON　pu_horizon@yahoo.co.jp

ふじのくに各流大茶会
食文化

6月10日(木)～13(日)／ふじのくに茶の都ミュージアム
●有料

「ふじのくに茶の都ミュージアム」で静岡県茶道連盟の抹茶・煎茶の各流派が本席・野点・立礼の3席を日替わりで担当。静岡県のお茶文化に触れ、楽しく体験いただけます。

問い合わせ／ふじのくに各流大茶会実行委員会(静岡新聞社内)　電054-281-9010

SPAC「忠臣蔵 2021」
演劇・舞踊

6月5日(土)～6日(日)／静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」
●有料

その場の「空気」で討ち入りが決定していく様子をユーモラスに描いた平田オリザの台本を、市民参加の野外劇として演出。総勢約50名のエネルギー溢れる舞台にどうぞご期待。

問い合わせ／SPACチケットセンター　電054-202-3399

県勢標本「静岡発」自然史コレクションから見えるもの
教養

4月24日(土)～11月7日(日)／ふじのくに地球環境史ミュージアム
●有料

「県勢標本」とは、静岡県ゆかりの自然史標本のこと。県産化石をもとに新種記載されたナウマンゾウを始め、厳選した実際の「県勢標本」とその秘話を紹介します。

問い合わせ／ふじのくに地球環境史ミュージアム　電054-260-7111

ふじのくに⇄せかい演劇祭2021
演劇

4月24日(土)～5月5日(水・祝)／静岡県舞台芸術公園、駿府城公園
●有料

SPAC主催の国際演劇祭。昨年の新型コロナの影響による中止を経て、今年は全ての作品を野外で上演します。

問い合わせ／SPACチケットセンター　電054-202-3399

2021年4月19日現在の情報です。日程などは変更の可能性がありますので、ホームページなどでご確認ください。

2020 SHIZUOKA 静岡県文化プログラム

いよいよ最高潮「文化プログラム」

スポーツのみならず文化の祭典でもある2020オリンピック・パラリンピック。大会をさらに盛り上げ、多種多様な静岡県の魅力を県内外に発信するとともに地方創生・地域活性化につなげる「文化プログラム」に注目が集まっています。今回、これまでの成果や今後の展開・抱負を、静岡県文化プログラム推進委員会委員長、鈴木壽美子さんや参加者に聞きました。

〈企画制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

充実したプログラムで地域活性化を目指す

静岡県文化プログラム推進委員会委員長
鈴木 壽美子(すずき すみこ)さん

―文化プログラムの意義、役割とはなんでしょうか。

オリンピック憲章には「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」とうたわれていて、オリンピック開催都市が文化プログラムを実施するよう定められています。日本では、9年前のロンドンオリンピック・パラリンピックで行われた文化プログラムの成功例を受けて、東京2020オリンピック・パラリンピックで文化プログラムを展開する方針が採択されました。文化プログラムを展開することで、文化芸術により本県の魅力を県内外に広く発信し、オリンピック・パラリンピックを、「スポーツの祭典」としてだけではなく「文化の祭典」として盛り上げることを目指して取り組んできました。

―静岡県で文化プログラムが実施されてから5年がたちました。推進委員会のテーマやプログラムの内容を教えてください。

静岡県の文化プログラムは「地域とアートが共鳴する」をテーマに三つのカテゴリーに分かれています。世界に誇る舞台芸術の担い手SPACによる「アンティゴネ」などの「全国的プログラム」、推進委員会と県内の文化・芸術団体が連携して開催する「ふじのくにものがたり」などの「県域プログラム」、市町や団体などにより、さまざまな取り組みで地域の魅力を発信する「地域密着プログラム」があり、これまでに1300以上のプログラムを認証・展開してきました。

地域の協力で実現

―文化プログラムは、特に「原泉アートデイズ!」「富士の山ビエンナーレ」など地域の歴史や産業を上手に生かしたアートフェスティバルの拡張に寄与したという印象を強く抱いていますが、鈴木委員長はどうお感じになりましたか。

富士、静岡、富士宮を舞台に開催する芸術祭「富士の山ビエンナーレ」は、国の登録有形文化財の旧常盤家、旧五十嵐邸などの歴史的建造物、商店街の空きスペースなどを活用し、富士山や製紙産業など地域資源を題材にした作品を展示しました。「無人駅の芸術祭」は、大井川鉄道の駅舎を生かしてアートにするという画期的な取り組みでした。掛川城などで行われた「茶エンナーレ」はアートやシンポジウムなど多彩なプログラムで充実していました。どれも地域の人の協力とボランティアの熱意が共鳴して感動しました。

文化プログラムを通じた社会貢献

―さまざまな波及効果があったと思いますが、具体的に文化プログラムはどのような効果を生み出したのでしょうか。

文化芸術活動の実施者、鑑賞者、プログラムを企画するプロデューサーやボランティアなど文化プログラムに関わる人が増え、静岡県の文化芸術振興に活用可能な仕組みや人材育成に寄与できたと思います。さらに、文化芸術の社会的な価値を見出す契機にもなりました。今後も、まちづくり、観光、国際交流、福祉、教育、産業などさまざまな分野と連携し、地域や社会の課題解決やイノベーションのきっかけになることを期待しています。

コロナ禍でもできることを

―「静岡県文化プログラム2020フェスティバル」がいよいよ本番を迎えています。昨年は新型コロナウイルス感染拡大で、芸術文化の大切さに改めて気付いた方も多いと思います。この一年を振り返っていかがでしょうか。

プログラムの中止、延期、規模縮小により、思う存分に文化芸術を楽しめない寂しい日々が続きました。しかし、昨年10月には多くの方の協力があり、静岡文化芸術大学で伝統的技法と現代的感覚が融合した「手の愉悦~革新する工芸展」でリスタートしました。その後も素晴らしいプログラムを実現し、厳しい状況下であっても、実行・継続することが大事であると気付かされました。

また、いよいよ始まる「かぐや姫霊峰に帰る」をテーマにした「ふじのくにものがたり」、SPAC俳優と公募で集った県民と作り上げる「SPAC忠臣蔵2021」、幅広い世代の交流がある「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」、「ふじのくに各流大茶会」など魅力的なプログラムを楽しんでいただきたいと思います。

地域とのつながりを大切に

―この文化プログラムはレガシーとして未来に生かされることとなります。今後の展開や抱負、これを引き継ぐアーツカウンシルへの期待をお願いします。

文化プログラムで培った地域資源の活用や社会課題への対応を図る創造的な取り組みを支援する仕組みを継承するため、2021年1月に静岡県文化財団内に「アーツカウンシルしずおか」が設置されました。全国に先駆けて設置されましたので、文化の拠点、起爆剤になってほしいです。今後は、アーツカウンシルが地域の団体や企業、大学などと連携して地域の活性化を進めるとともに、文化の力で静岡県がさらに活性化することを期待しています。

県民とともに、静岡の魅力発信

●イベントカレンダーなど、文化プログラムの詳しい情報はこちら
文化プログラム・ホームページ
https://shizuoka-ac.org
プンプロ　検索

広報メッセンジャー若月佑美さんが表紙の2021年度版リーフレットは、駅・コンビニなどで配付中!

静岡県文化プログラム推進委員会事務局
TEL 054-204-0310
e-mail info@shizuoka-ac.org
@shizuoka-arts

新型コロナウイルスに打ち勝つ 静岡県民 支え合い基金 ~One for all, All for one~

PROGRAM　2021年5月19日現在の情報です。最新の情報はホームページなどでご確認ください。

SPAC「忠臣蔵 2021」 6月5日(土)~6日(日) ●有料　演劇・舞踊

静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」

舞台に立つという長年の夢が実現

市民参加者 伊藤 清美さん

SPAC俳優、市民参加者の思いが詰まった作品です。「いつか舞台に立ちたい」という夢がついにかないました。稽古は楽しく、舞台に立つ機会をいただけたことに感謝でいっぱいです。参加者みんなで支え合い、多くの人に楽しんでもらえる作品にしたいです。

その場の「空気」で討ち入りが決定していく様子をユーモラスに描いた平田オリザの台本を、市民参加の野外劇として演出。総勢約50名のエネルギー溢れる舞台に乞うご期待。

問い合わせ/SPACチケットセンター　電054-202-3399

舞踊と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」 5/23(日)　演劇・舞踊

清水文化会館 マリナート

地元静岡のために

宮城嶋 遥加さん

静岡とゆかりの深いストーリーです。ここまで育ててくれた静岡への恩返しの気持ちも込めて、全力で演じたいと思っています。

個性光る舞台

振付ダンサー 大柴 拓磨さん

動き方が違う俳優、ダンサーたちが生み出す個性の融合が魅力の作品です。子供から大人まで楽しめるものになると思います。

富士山を題材とした歌やストーリーを、大柴拓磨、大前光市らゲストダンサー、宮城嶋遥加らSPAC俳優、アンサンブル「帆楽伶奏団」らが競演。静岡に息づく舞台芸術をご堪能ください。

※好評につき定員に達し、受付終了しました

ふじのくに各流大茶会 6月10日(木)~13(日) ●有料　食文化

ふじのくに茶の都ミュージアム

お茶で心も体も癒やす時間を

静岡県茶道連盟理事長 青島 宗智さん

静岡県は茶の湯も煎茶道も盛ん。茶道の長い歴史の中で培われたお茶文化に触れられることやみんなでおいしいお茶を楽しむからこそ生まれる参加者同士の交流など、多くの方に茶会の魅力を知っていただけたらうれしいです。ぜひ茶会で、初夏の風情をお楽しみください。

ふじのくに茶の都ミュージアム」で静岡県茶道連盟の抹茶・煎茶の各流派が本席・野点・立礼の3席を日替わりで担当。静岡県のお茶文化に触れ、楽しく体験いただけます。

問い合わせ/ふじのくに各流大茶会実行委員会(静岡新聞社内)　電054-281-9010

グランシップ出前公演(長泉町) ふじのくに伝統芸能フェスティバル 6月6日(日)　伝統芸能

長泉町文化センター ベルフォーレ

憧れの衣装で舞台へ

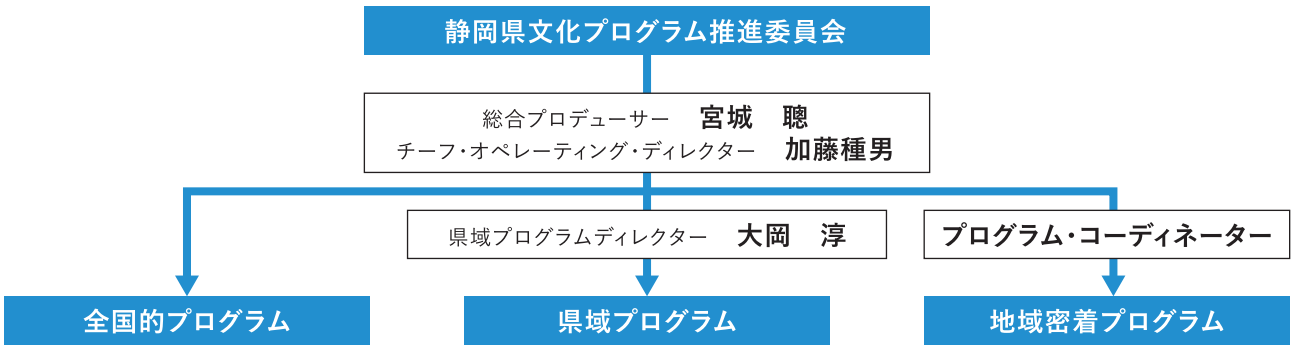
横尾歌舞伎保存会 戸田 なつみさん

横尾歌舞伎は地元の人の力で伝統を受け継いでいる歌舞伎です。素敵な舞台で、かっこいい衣装をまといながら演じることができて嬉しいです。中学校に入学したら、セリフの多い役に挑戦し、より多くの人に歌舞伎の魅力を伝えていきたいです。

芸能を次世代に受け継ぐ多彩な芸能団体が集結。古くから各地域に継承されている芸能の魅力を披露するとともに、コロナ禍における民俗芸能のこれからについて考えます。

※好評につき定員に達し、受付終了しました

推進体制



静岡県文化プログラム推進委員会　構成団体・個人

団体・個人（数）	構成団体名、個人名	理事等
県関係（５）	静岡県	理事
	静岡県教育委員会	理事
	静岡県立美術館	理事
	（公財）静岡県文化財団	理事
	（公財）静岡県舞台芸術センター	理事
市町（35）	県内各市町	監事
文化関係団体（２）	静岡県文化協会	委員長
	静岡県地域文化団体連絡協議会	
体育関係団体（３）	静岡県体育協会	
	静岡県障害者スポーツ協会	
	静岡県レクリエーション協会	
観光・交流団体（４）	静岡県観光協会	理事
	静岡県国際交流協会	監事
	静岡県ボランティア協会	
	富士山静岡空港利用促進協議会	
経済団体（７）	静岡県商工会議所連合会	理事
	静岡県経営者協会	理事
	静岡県商工会連合会	
	静岡県中小企業団体中央会	
	静岡県農業協同組合中央会	
	静岡県漁業協同組合連合会	
	静岡県森林組合連合会	
地域団体（１）	静岡県コミュニティづくり推進協議会	
教育関係団体（９）	静岡県高等学校文化連盟	
	静岡県中学校文化連盟	
	静岡県特別支援学校文化連盟	
	都市教育長協議会	
	町教育長会	
	静岡県高等学校長協会	
	静岡県校長会	
	静岡県私学協会	
	ふじのくに地域・大学コンソーシアム	
福祉関係団体（１）	静岡県社会福祉協議会	理事
報道機関（２）	ＮＨＫ静岡放送局	理事
	静岡新聞社	理事
有識者（５）	岩崎清悟（富士山静岡交響楽団理事長）	副委員長
	太下 義之（同志社大学教授）	副委員長
	熊倉 功夫（ふじのくに茶の都ミュージアム館長）	理事
	佐藤 典子（佐藤典子舞踊研究所代表）	理事
	野平 一郎（静岡音楽館ＡＯＩ芸術監督）	理事

※計74団体・個人

年表

2014年度

2014年11月	川勝知事、全国知事会で2020年文化プログラム全国展開提案

2015年度

7月	文化プログラムに関する「専門家ミーティング」開始
11月	文化プログラム「静岡県準備委員会」発足
1月~3月	文化プログラム実施に向けた「文化資源調査」 （10団体選定）
3月27日	スタートアップ・ミーティング　地域の文化資源を生かした文化プログラムを考える@グランシップ（静岡市）

2016年度

5月	静岡県文化プログラム推進委員会発足
	モデルプログラム募集
	プログラム・コーディネーター募集（3人採用）
7月	モデルプログラム採択（6件）
8月	モデルプログラム二次募集
	広報アートディレクター募集（1人採用）
9月	モデルプログラム（二次）採択（4件）
10月	静岡県文化プログラム推進委員会総会
3月18日	モデルプログラム報告フォーラム　2020東京文化オリンピアードに向けて@グランシップ（静岡市）

2017年度

6月	静岡県文化プログラム募集（第一次）
7月15日	七Lab.オープニング記念トークイベント
8月	静岡県文化プログラム（第一次）採択（8件、A：2件、B：6件）
1日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
10月	静岡県文化プログラム（第二次）採択（5件、A：1件、B：4件）
17日	2017年度採択プログラムキックオフミーティング@七Lab.
29日	静岡県文化プログラム1000日前フォーラム @大日本報徳社大講堂（掛川市）
2月23日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
3月24日	静岡県文化プログラム報告フォーラム2018 @グランシップ（静岡市）
26日	静岡県文化プログラム推進委員会総会

2018年度

7月 7日	2018年度採択団体キックオフミーティング @グランシップ（静岡市）
10日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
23日	静岡県文化プログラム推進委員会総会
3月15日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
26日	静岡県文化プログラム推進委員会総会
30日	静岡県文化プログラム500日前イベント 地域密着プログラム報告会@グランシップ（静岡市）
	静岡県文化プログラム500日前イベント ふじのくに伝統芸能フェスティバル @グランシップ交流ホール（静岡市）
3月26日 ~4月 4日	静岡県文化プログラム500日前イベント 企画展1　静岡県文化プログラム展 @グランシップ展示ギャラリー1（静岡市）
	静岡県文化プログラム500日前イベント 企画展2　オリンピック・パラリンピック展 @グランシップ展示ギャラリー2・3（静岡市）

2019年度

5月	2019年度静岡県文化プログラム「地域密着プログラム」募集
6月	2019年度静岡県文化プログラム「地域密着プログラム」採択
7月 4日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
6日	2019年度採択団体キックオフミーティング @グランシップ（静岡市）
18日	静岡県文化プログラム推進委員会総会
9月21日	ふくろい野外音楽　芸術フェスタin 月見の里 （SPAC野外劇等）@袋井市月見の里学遊館（袋井市）
22日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」 @グランシップ中ホール・大地（静岡市）
23日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「磐田プレ公演 ララバイ 詩と舞踏と音楽による小宇宙」 @磐田市民文化会館大ホール（磐田市）
9月25日 ~29日	ふじのくに各流大茶会@ふじのくに茶の都ミュージアム（島田市）
28日	ラグビーワールドカップ2019ステージイベント 【地域部活、ACT.JT】@おもてなしエリア （JR愛野駅~スタジアム周辺）
	かけがわ茶エンナー2020「茶文化でおもてなしイベント」 @掛川城公園三の丸広場（掛川市）
10月 9日	地域活性化セミナー「アートの力が地域を変える」
	地域密着プログラム中間報告会@静岡県庁
11月 7日 ~10日	世界お茶まつり2019ブース出展@グランシップ（静岡市）
1月11日	東京ガールズ・コレクションブース出展 @ツインメッセ静岡（静岡市）
1月	2020年度静岡県文化プログラム「地域密着プログラム」募集
3月19日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
23日	2019年度「地域密着プログラム」成果報告会 @グランシップ（静岡市）
	2020年度採択団体キックオフミーティング @グランシップ（静岡市）
27日	静岡県文化プログラム推進委員会総会
3月	2020年度静岡県文化プログラム 「地域密着プログラム」採択

2020年度

7月17日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
18日	静岡県文化プログラム推進委員会総会
10月 9日	静岡県文化プログラムリスタートセレモニー @静岡文化芸術大学（浜松市）
9日 ~25日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「手の愉悦~革新する工芸」展@静岡文化芸術大学（浜松市）
12月10日 ~23日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 関連企画　先端技術展「技人(わざびと)たちの物語」 @静岡文化芸術大学（浜松市）
1月	アーツカウンシルしずおか設置@公益財団法人静岡県文化財団
2月25日	東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム ふじのくに野外芸術フェスタ2021『アンティゴネ』採択
3月18日	2020年度「地域密着プログラム」成果報告会①@オンライン
20日	2020年度「地域密着プログラム」成果報告会②@オンライン
25日	静岡県文化プログラム推進委員会理事会
	静岡県文化プログラム推進委員会総会

2021年度

4月 1日	アーツカウンシルしずおか開所式
5月 2日 ~5日	東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラム ふじのくに野外芸術フェスタ2021 静岡宮城聴演出SPAC公演『アンティゴネ』 @駿府城公園紅葉山庭園前広場 特設会場（静岡市）
23日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「舞踏と音楽と演劇の祭典「ふじのくにものがたり」」 @清水文化会館マリナート・大ホール（静岡市）
23日 ~30日	静岡県文化プログラム「富士山の絵」展 @県立美術館県民ギャラリー（静岡市）
6月 5日、 6日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 『忠臣蔵2021』 @静岡県舞台芸術公園 野外劇場「有度」（静岡市）
6日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「ふじのくに伝統芸能フェスティバル」 @長泉町文化センターベルフォーレ（長泉町）
6月10日 ~13日	静岡県文化プログラム（県域プログラム） 「ふじのくに各流大茶会」 @ふじのくに茶の都ミュージアム（島田市）
23日	東京2020オリンピック・パラリンピック 聖火リレー セレブレーション @駿府城公園紅葉山庭園前広場（静岡市）
7月24日	東京2020ライブサイト @JR御殿場駅富士山口広場（御殿場市）
8月17日	東京2020パラリンピック聖火リレー出立式 @四ツ池公園陸上競技場（浜松市）

新聞記事

平成27年（2015年）11月7日（土）｜静岡新聞朝刊

東京五輪で本県文化発信
各分野連携し準備委

2020年東京五輪・パラリンピックに向け県内から発信する文化プログラムの県準備委員会が6日、全国に先駆けて発足した。文化、産業、観光、福祉など各分野が連携し、県内各地で芸術、音楽、舞台といった多彩なイベントを大会までの4年間をかけて展開していく。準備委員長には後藤康雄県商工会議所連合会会長が就いた。

五輪憲章はスポーツ、文化、教育の融合を重視し、開催地に文化プログラムの実施を義務付けている。東京五輪では開催地のみならず全国で推進することになった。五輪後の観光振興につなげる狙いもある。

委員は鈴木寿美子県文化協会会長（準備委副委員長）、熊倉功夫静岡文化芸術大学長、芳賀徹県立美術館館長ら各界の代表者が名を連ねた。来年のリオ五輪終了後、早々にプログラムの第1弾が打てるよう準備を進める。近く下部組織の専門委員会をつくり、実質的な議論を始める。

県庁で開かれた第1回会議で川勝平太知事は「ロンドン五輪では英国訪問者が開催年より翌年の方が増えた」と指摘し、「一過性にせず、本県の魅力を発信したい」と期待した。

初回会議を行った文化プログラムの準備委員会＝6日午後、県庁

平成27年（2015年）12月3日（木）｜静岡新聞朝刊

東京五輪へ文化資源発掘
県、活用方法を公募

県は、2020年東京五輪・パラリンピックの「文化プログラム」になり得る地域の文化資源とその活用方法の提案を、県内の民間団体・グループから募集している。10件程度を選んで提案者と共同で調査し、文化プログラムとして活用する可能性を探る。

対象とする文化資源は、文化・芸術を活用した活動や担い手、活動拠点など。「観光振興」「ものづくりとの連携」「他分野との連携」など10テーマのいずれかに合う内容を求める。一般に知られていない資源の掘り起こしを目指す。

調査の方法、態勢、スケジュールなどを示した上で応募してもらい、今月中に対象を選定する。調査は1件当たり上限100万円を補助し、16年1～3月に実施する。県は11月に文化プログラムの準備委員会を発足させた。調査対象をプログラムに盛り込むとは限らないが、県文化政策課の担当者は「文化プログラムの基本方針やテーマを固める材料にしたい」と話している。

提案は21日までに、所定の書式で応募する。問い合わせは同課（電054（221）2252）へ。

平成28年（2016年）1月19日（火）｜静岡新聞朝刊

東京五輪「文化プログラム」
県 候補10件を選定

県は18日、2020年東京五輪・パラリンピック「文化プログラム」の県内開催に向けて募集し、応募があった地域の文化資源39件から、候補となる10件を選定したと発表した。

県文化政策課によると、浜松市の「実践的なアート系ワークショップの実施、展開、ワークショップスキル開発のための調査」や静岡市の「インバウンド旅行者を地元住民がおもてなし『みんなのnedoco』プロジェクト」など。

3月まで提案者と県とで調査を実施する。1件当たり平均約50万円を補助し、文化プログラムとして活用が可能か判断するための課題の洗い出しや先進地視察を行う。

五輪憲章はスポーツ、文化、教育の融合を重視し、開催地に文化プログラムの実施を義務付けている。東京五輪は全国で推進することになった。

このため県は既存の祭りやワークショップ、セミナーに「文化プログラム」の冠を付けた行事を開くだけにとどまらず、文化資源の新たな発掘や展開を探ろうと市町や団体に募集を行った。

平成29年（2017年）3月29日（水）｜静岡新聞朝刊

県のロゴ決定
東京五輪・パラ 文化プログラム

2020年東京五輪・パラリンピック「文化プログラム」の県推進委員会理事会は28日、県庁で会合を開き、活動のシンボルとなるロゴマークを承認した。静岡の「S」をかたどったシンプルなデザインで、岩瀬智久文化政策課専門監は「普遍性があり、さまざまに展開できる。マークを見れば静岡県の文化プログラムだと分かるように浸透させたい」と説明した。

専門家の推薦を受けた6人が提示したデザイン案の中から、静岡市駿河区の広報アートディレクター坂本陽一さん(40)の作品が選ばれた。Sの曲線は遠州灘から駿河湾までの海岸線をイメージし、富士山と駿河湾の高低差も表現しているという。

県は2017年度から17年度から使用 **海岸線をイメージ**

ロゴマークの使用を始める。一般使用に関しては、今後、非営利目的など条件を検討していく。

文化プログラムは五輪憲章で義務付けられ、文化芸術行事を五輪前から期間中にかけて実施する。県は「地域とアートが共鳴する」をテーマに、文化芸術の要素を持ちつつ、社会福祉や地域振興につながるプログラムを展開する方針。16年度は県内各地でモデル事業10件を行った。本プログラムは17年度に改めて選定する。

▼県の文化プログラムのシンボルになるロゴマーク

平成29年（2017年）10月30日（月）｜静岡新聞朝刊

五輪と文化振興を議論

掛川で1000日前フォーラム 知事「観光でも効果大」

オリンピック文化プログラムの意義を説明する青柳正規名誉教授
＝29日午後、掛川市の大日本報徳社

県は29日、東京五輪に合わせて展開する「県文化プログラム」の1000日前フォーラムを掛川市の大日本報徳社で開いた。前文化庁長官の青柳正規東京大名誉教授、川勝平太知事、同市の地域芸術祭「かけがわ茶エンナーレ」プロデューサー山口裕美さんらが文化と地域振興をテーマに議論し、プログラムの在り方を考えた。

文化プログラムは五輪を機に地域の文化芸術を見直し、世界への発信を図る全国運動。県内では昨年度からモデルプログラムが各地で実施されている。

青柳教授は地域おこしが成果を上げた国内外の事例を紹介し、「経済が縮小する中、身近な文化を楽しむ活動が新しい豊かさを生み出していく」と述べた。川勝知事はロンドンで五輪後に行われた文化プログラムの盛況ぶりを挙げ、「観光面でも効果が大きい」と期待感を示した。

平成30年（2018年）2月27日（火）｜静岡新聞朝刊

東京五輪・パラ県文化プログラム

SPAC宮城氏が統括

県議会知事答弁

宮城聰氏

2020年東京五輪・パラリンピックの機運醸成を図る県文化プログラムの事業推進に向けて、県舞台芸術センター（SPAC）芸術総監督の宮城聰氏が18年度、統括役となる総合プロデューサーに就任する。26日の県議会2月定例会代表質問で、川勝平太知事が鈴木智氏（ふじのくに県民クラブ、静岡市駿河区）の質問に答えた。

＝関連記事9面へ

文化プログラムは五輪憲章に開催がうたわれ、スポーツの祭典に合わせて開催地の文化的魅力を国内外に発信するのが狙い。県は16年5月に県内の文化、行政など各種団体でつくる推進委員会を全国に先駆けて発足させ、17年度には団体提案型のアートイベントなど13事業を企画した。

知事は18年度、こうした団体提案型の事業に加え、地域に根付いた文化活動や伝統芸能の紹介、SPACの創作活動や県立美術館の企画展示を組み込んでいく構想を示した。総合プロデューサーを置く理由については「多彩で重層的な本県の文化プログラムを統一的、効果的に推進するため」と説明した。

県文化プログラムの総合プロデューサーは3月に開かれる推進委員会の総会で正式に公表され、4月に就任予定。宮城氏は取材に「全国のモデルとなる文化プログラムを展開するとともに、文化事業に携わる専門人材を育成していきたい」と述べた。（政治部・鈴木文之）

平成30年（2018年）7月11日（水）｜静岡新聞朝刊

統括役補佐に加藤氏

県文化プログラム推進委

加藤種男氏

2020年東京五輪・パラリンピックを盛り上げる県文化プログラムの推進委員会は10日、県庁で開いた18年度理事会で、統括役の総合プロデューサーを補佐するチーフ・オペレーティング・ディレクター（COD）に加藤種男日展副理事長を委嘱し、新理事に大石剛静岡新聞社・静岡放送社長ら2人を選任したと報告した。

加藤氏はアサヒビール芸術文化財団事務局長、京都造形芸術大客員教授などを経て14年から現職。09年に芸術選奨文部科学大臣賞。企業、市民、行政の枠を超えた社会を創造するためのネットワーク形成に尽力してきた。

CODは、推進委委員長の鈴木寿美子県文化協会長の指名で選任された。総合プロデューサーの宮城聰県舞台芸術センター（SPAC）芸術総監督と連携し、県や各種団体による県域・地域密着プログラムを円滑に実施する役目を担う。

平成31年（2019年）3月27日（水）｜静岡新聞 朝刊

県文化プログラム 静岡でパネル展

500日前イベント開幕

2020年東京五輪・パラリンピックに向けた「県文化プログラム500日前イベント」が26日、静岡市駿河区のグランシップで始まった。4月4日までの期間中、同プログラムを紹介するパネル展やシンポジウムを行う。1964年東京五輪の映像や写真、記念品も展示する。入場無料。

県文化プログラム500日前イベントの開始を祝ってテープカットをする関係者＝26日午前、静岡市駿河区のグランシップ

県文化プログラム推進委員会の鈴木寿美子委員長と難波喬司副知事、プログラム参加団体の代表者らが出席しテープカットしてイベント開始を祝った。鈴木委員長は「（推進委の発足から）3年間やってきたことを実行に移す段階。まずは県民に取り組みを知ってもらうのが重要」と述べた。

文化プログラムは五輪憲章にうたわれ、開催地が実施するよう定められている。県内では2018年度、さまざまなアートを展開する地域密着プログラムに12団体が取り組み300件が認証を受けた。

30日には地域密着プログラム報告会を行うほか、タペストリーや缶バッジを作るワークショップも行う。（政治部・名倉正和）

平成30年（2018年）8月9日（木）｜静岡新聞 朝刊

知事会見

文化プログラム 独自認証制度開始

五輪・パラ

県は8日、2020年東京五輪・パラリンピックの文化プログラムに関する独自の認証制度を開始したと発表した。認証を受ければ、シンボルマークが使用可能になるほか、専門家の助言や、チラシなどを通じた情報発信への支援が得られる。県は20年度までに1千件の認証を目指す。

県内で地域資源を生かした文化・芸術の振興や人材育成、国内外への発信などの事業・活動を実施する団体などを広く対象にする。川勝知事は「オール静岡としての一体化や統一感を醸成する」と、独自の認証制度の狙いを説明。「県内各地で多彩な文化プログラムを展開して文化的魅力を高め、国内外から多くの人に本県を訪れてもらいたい」と期待を示した。

文化プログラムの認証制度は大会組織委員会の「東京2020参画プログラム」と内閣官房の「beyond 2020プログラム」もある。県文化政策課によると、内閣官房の認証を受ければ、同時に県の認証資格も得られるという。

県の文化プログラム認証マーク

静岡から 世界へ 未来へ 2020 東京五輪パラ

SPAC代表作「アンティゴネ」公式プログラム採択

来年5月、静岡で上演

来年5月に静岡市で開く「ふじのくに野外芸術フェスタ2020静岡」（実行委主催）が4日、2020年東京五輪・パラリンピックの公式文化プログラム「東京2020 NIPPONフェスティバル」に採択された。同市葵区の駿府城公園で、県舞台芸術センター（SPAC）が代表作「アンティゴネ」を披露する。

同フェスティバルは東京2020組織委員会と国や自治体、文化団体が連携し、聖火リレーで世界からの注目が日本に集まる20年4～9月ごろに全国で展開する。同フェスタのほか、東京都や栃木県で実施する能楽、流鏑馬（やぶさめ）、オーケストラなど計5件の共催プログラムが採択された。

「アンティゴネ」は、SPACが17年にフランスのアビニョン演劇祭で上演した古代ギリシャ悲劇で、来年は17年の公演を上回る規模の舞台を設置する。このほか、客席を今年の同フェスタの550席から900席に拡大し、多言語・ユニバーサル対応も強化する。

演出を手掛けたSPACの宮城聰芸術総監督は、県庁で開いた会見で「海外ではあまり知られていない日本の現代芸術をPRできる格好の機会。日本人ならではの演出のギリシャ悲劇を、静岡の地で本来の規模感で披露したい」と意気込んだ。（文化生活部・菊地真生）

2020年東京五輪・パラリンピックの公式文化プログラムとして上演する「アンティゴネ」への思いを語る宮城聰芸術総監督（左）＝4日午後、県庁

令和元年（2019年）7月5日（金）｜静岡新聞 朝刊

令和元年（2019年）11月22日（金）｜静岡新聞 朝刊

地域密着プログラム 知事に報告

推進委と支援団体代表者

静岡県文化プログラム

2020年東京五輪・パラリンピックを盛り上げる県文化プログラム推進委員会と支援団体の代表者が21日、県庁に川勝平太知事を訪ね、さまざまなアートを展開する地域密着プログラムの活動状況を報告した。

活動状況を報告する加藤種男氏（左端）ら＝21日午後、県庁

訪問したのは、推進委員会の加藤種男チーフ・オペレーティング・ディレクター（COD）と立石沙織アシスタント・コーディネーター、19の支援団体を代表した「富士の山ビエンナーレ」の谷津倉龍三実行委員長の3人。

谷津倉委員長は富士、富士宮、静岡各市民の有志が2年に一度開催している「富士の山ビエンナーレ」の取り組みをPRし、その終了後にアーティストがデザインした商品を作る試みを紹介。「地元企業とアーティストをつなげるのが重要な役割」だと強調した。

昨年7月のCOD就任後、地域密着プログラムの活動現場を訪問している加藤氏は「来場者ではなく、当事者の数を増やすのが大切だ」と指摘した。

これに対し川勝知事は「人の心を明るくさせるのが大切で、活動が日々の生活に入っていくことが重要になる」と指摘した。

コロナ下でも芸術や音楽を

県文化プログラム 浜松で開幕

テープカットし開催を祝う鈴木寿美子委員長や若月佑美さん＝写ら

若月佑美さん 広報の顔に

会場では作家それぞれの世界観が楽しめる

県内ゆかりの工芸作品がそろう会場＝いずれも浜松市中区の静岡文化芸術大で

東京五輪・パラリンピックを文化面で盛り上げる「県文化プログラム二〇二〇フェスティバル」が九日、浜松市中区の会場を皮切りに始まった。広報の顔として富士市出身の女優若月佑美さんを起用し、来年六月にかけて芸術や伝統芸能、音楽などさまざまな企画を県内各地で展開する。（篠塚辰徳）

県や各市町、有識者らによって二〇二六年に発足した県文化プログラム推進委員会（鈴木寿美子委員長）が主催。今春スタートの予定だったが、新型コロナウイルスの影響でずれ込んだ。「地域とアートが共鳴する」をテーマに、県舞台芸術センター（SPAC）による演劇や美術展、コンサートなどを開催する。九日に浜松市中区の静岡文化芸術大で開会式典があり、鈴木委員長は「文化芸術はコロナ禍で取り残されてしまう心配があった。まだ先行きは不透明だが、ウィズコロナの時代という新しい様式でも、文化を花開かせていきたい」と語った。

この日は、文化プログラムの広報メッセンジャーに就任した若月さんも登場。二科展のデザイン部門に八年連続で入選している若月さんは「静岡には素晴らしい芸術文化があり、刺激を受けて育った。誇らしい静岡の芸術文化を発信したい」と抱負を話した。

◇

九日、プログラム第一弾の工芸展「手の悦展―革新する工芸」（中日新聞東海本社後援）が静岡文化芸術大ギャラリーで始まった。無休で、二十五日まで。午前十時半～午後六時。入場無料。

県内住まいや出身など静岡にゆかりのある三十三の作家が、陶芸や染織、漆芸、金工、木工、ジュエリー、ガラスなどの作品を一点ずつ寄せた。

一本のカセットテープを棒針で編み、金箔を付けてネックレスに仕上げた作品や、天の川を表現した幻想的なデザインの花器など、作家それぞれの世界観が楽しめる。

十日午後二～三時には、出展作家と同大教員らとの交流会を予定。午後三時からは学内の工房見学ツアーもある。

令和2年（2020年）10月10日（土）｜中日新聞 朝刊

令和3年（2021年）4月2日（金）｜静岡新聞 朝刊

「アーツカウンシルしずおか」のロゴマークを除幕披露した開所式＝1日午後、グランシップ

アーツカウンシルしずおか

「全ての県民 表現者に」

静岡に拠点開所、ロゴ披露

地域の創造的活動に対する支援、担い手の育成、ネットワークづくりを掲げた県の専門組織「アーツカウンシルしずおか」の開所式が1日、事務所を構える静岡市駿河区のグランシップで行われた。組織の関係者が本格稼働した拠点とロゴマークをお披露目した。

加藤種男アーツカウンシル長、県文化財団の鈴木寿美子理事長、難波喬司副知事が、グランシップの1階ガラス面に描かれたロゴマークの除幕に立ち会った。加藤さんは「全ての県民が表現者になることがゴール。全国のモデルになるような組織にしたい」とあいさつした。

アーツカウンシルしずおかは東京五輪・パラリンピックの県文化プログラム推進委員会を土台として1月、県文化財団内に設置された。プログラム・ディレクターら専門スタッフ5人を含む計11人体制で運営する。住民主体の文化・芸術活動への助成や、伴走支援などを行う。ロゴマークは、富士山と組織名表記の頭文字「A」をイメージしてデザイナー坂本陽一さん（静岡市葵区）が作成した。

令和2年（2020年）12月25日（金）｜静岡新聞 朝刊

「全国のモデルなり得る」

県のアーツカウンシル長 加藤氏が意欲

新組織の活動方針を説明する加藤種男氏＝24日午前、県庁

地域の文化・芸術活動の支援、人材育成を行う専門機関として県が1月に設置する「アーツカウンシルしずおか」のアーツカウンシル長に就任するクリエーティブ・ディレクター加藤種男氏（72）が24日、県庁で会見を開き「全国のアーツカウンシルのモデルになり得る」と新組織の活動に意欲をみせた。

東京五輪・パラリンピック県文化プログラムの推進委員会のチーフ・オペレーティング・ディレクターを18年から務める加藤氏は「芸術や文化を、社会を維持する上で不可欠なものとして位置付ける」と話し、社会課題の解決を新組織の使命とした。取り組みたいこととして、高齢者の表現活動の支援▽移住者と地域をアートで結ぶ活動▽地域の新しい経済活動の創出―などを挙げた。

県文化財団内に設置されるアーツカウンシルしずおかは、1～3月に文化活動のコーディネーターなど専門職を募集する。4月からはグランシップ（静岡市駿河区）に拠点を定め、約10人で活動する。

加藤氏は「行政との距離、役割分担を含め、適切な規模で始められる。全国のアーツカウンシルの中で最も優れた組織にしたい」と決意を述べた。（文化生活部・橋爪充）

「かぐや姫」世界 舞踊や音楽で

富士山への畏怖交え舞台

静岡 SPAC俳優ら出演

静岡県文化プログラム

舞踊と音楽、演劇を融合した舞台の祭典「ふじのくにものがたり」（実行委主催）が23日、静岡市清水区の清水文化会館マリナートで行われ、富士山のかぐや姫伝説を題材にした「かぐや姫、霊峰に帰る」を上演した。

かぐや姫伝説を題材にした舞台に臨む出演者＝静岡市清水区の清水文化会館マリナート

東京五輪・パラリンピックに向けた県文化プログラムの一環。演出家の大岡淳さんが、舞踊やダンスを取り入れた舞台を想定して脚本を書き下ろした。歌唱や演奏も組み合わせた演出は、県内で活躍する合唱団やプロ奏者によるアンサンブルが支えた。

栄華を極めるみかどが、夢に出てきたかぐや姫に心を奪われる物語。みかどの命令を受けて姫の居場所を探す将軍や、姫を守ろうとする村の人たちのやりとりを、富士山への畏怖を交えて描いた。

人間に立ちはだかる山の精たちの王は、義足のダンサー大前光市さんが演じた。かぐや姫役のSPAC俳優宮城嶋遥加さんは「富士山かぐや姫ミュージアムやゆかりの神社などを訪ねて世界観を膨らませた。皆さんの心にある富士山に奉納するつもりで舞台に立った」と話した。

祭典では県ゆかりの歌曲に合わせた踊りの舞台も上演。「ちゃっきり節」「森の水車」などのステージが来場者を楽しませた。

（文化生活部・宮城徹）

令和3年（2021年）5月25日（火） | 静岡新聞 朝刊

令和3年（2021年）3月22日（月） | 中日新聞 朝刊

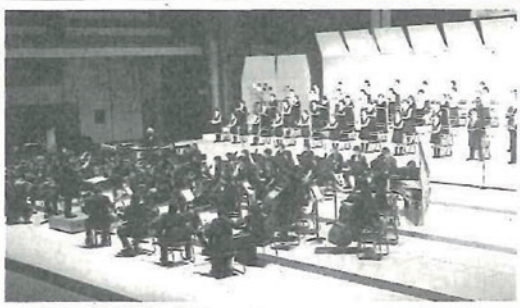
郷土の人や名所を唱歌響かせ継ごう

駿河区で合唱祭

地域の名所や歴史上の人物を唱歌にした合唱祭「県郷土唱歌を歌おう」（中日新聞東海本社など後援）が二十一日、静岡市駿河区のグランシップであった。懐かしの曲が合唱と管弦楽でよみがえり、来場者約二百人を喜ばせた。

静岡交響楽団が「富士登山」や「天城山」など九曲を演奏し、音楽青葉会・静岡児童合唱団が歌声を響かせた。

県文化プログラム推進委員会や同楽団などでつくる実行委が、郷土唱歌を歌い継ごうと主催。昨年初開催する予定だったものの、新型コロナウイルスの影響で中止に。当時は一般参加の子どもらも歌う予定だったが、今回は感染予防のため取りやめとなった。それでも観客の一人、日下忠彦さん（焼津市）は「いい声で表現できていて想像以上に良かった」と喜んでいた。



県郷土唱歌を披露する合唱団と交響楽団＝静岡市駿河区で

楽団の前田衛事務局長は「とにかく実施できて良かった。一度きりではもったいないという感想ももらったので、数年に一度くらいで開催できれば」と話した。演奏の様子は近く動画配信サイトでも公開する予定。

（中川紘希）

令和3年（2021年）6月11日（金）｜静岡新聞 朝刊

大茶会 心和む一服

島田、13日まで 県内8流派集結

県内の抹茶、煎茶の各流派が集い、茶をもてなす「ふじのくに各流大茶会」（県茶道連盟、静岡新聞社・静岡放送、ふじのくに茶の都ミュージアム主催）が10日、島田市金谷富士見町の同ミュージアムで始まった。13日まで。

東京五輪・パラリンピックを見据え、開催する県文化プログラムの一環。日替わりで計八つの流派が茶室、野だて、立礼の各席で茶会を開く。初日は抹茶の表千家と裏千家、煎茶の静風流が担当した。参加者は、各流派のお点前の披露を楽しみながら茶や和菓子を味わい、穏やかなひとときを過ごした。

1席800円。受け付けは午前10時～午後3時。開催期間中はJR金谷駅から会場まで、15～20分おきに無料シャトルバスを運行している。問い合わせは同ミュージアム＜電0547（46）5588＞へ。

抹茶を味わう参加者＝島田市のふじのくに茶の都ミュージアム

令和3年（2021年）6月7日（月）｜静岡新聞 朝刊

次世代継承へ 伝統芸能披露

県文化財団 長泉でフェス

長泉町文化センター・ベルフォーレで6日、「ふじのくに伝統芸能フェスティバル～今、地域の芸能を次世代につなぐために～」（県文化財団主催）が開かれた。県内外の郷土芸能団体が発表を通じ、過疎化や少子高齢化が進む中で伝統をいかに受け継ぐべきか考えた。

2019年3月から実施してきたプログラムで、伊豆の国市田京区が三番叟（さんばそう）を、伊東市湯川自治会が鹿島踊をそれぞれ実演した。富士宮囃子保存会（富士宮市）や横尾歌舞伎保存会（浜松市北区）、西島神楽団（山梨県身延町）の活動も映像で紹介した。

駿河総合高和太鼓部と太鼓芸能集団「鼓童」による共演も。今回のためにオンラインや対面で練習を重ねたという、会場いっぱいに和太鼓の力強い音色を響かせて観客を楽しませた。

（東部総局・山本萌絵佳）

演奏を披露する駿河総合高和太鼓部と太鼓芸能集団「鼓童」＝長泉町文化センター・ベルフォーレ

令和3年（2021年）6月17日（木）｜静岡新聞 夕刊

苦節1年 悲願の公演

SPAC「忠臣蔵2021」

県舞台芸術センター（SPAC）が静岡市駿河区の舞台芸術公園で上演した野外劇「忠臣蔵2021」。2020年に予定していた公演は、新型コロナウイルス禍を受けて無期限延期になっていた。SPAC俳優と公募の県民ら約50人の「SPAC47」は、四十七士さながらに1年の苦節を経て悲願の日を迎えた。

平田オリザの戯曲は、主君を失った赤穂藩の人々が武士としての対応を決める問答をおかしみを込めて描く。涙を誘う家族との離縁や見せ場の斬り合いなど、劇的な場面は惜しみなく割愛した。

籠城、討ち入り、開城、仕官―太平の世にどれもぴんとこない侍たちの意見は割れる。武士道を掲げる者があれば、現実派あり日和見派あり。亡君のあだ討ちを決断する大評定の前段を、どこまでも軽い日常会話で進めていく。

「忠臣蔵2021」より（©猪熊康夫）

県民参加「演劇人の今」重ね

1999年に清水港、2004年に静岡市のグランシップ大ホールで100人の県民が出演した大作の再演。SPAC俳優の寺内亜矢子、牧山祐大が演出し、宮城聰芸術総監督が全体をまとめた。

過去の実績という財産はあるが、コロナ禍の舞台制作は制約だらけだった。出演者総出の群舞は、俳優の接触を避ける動線づくりに苦慮。野外劇場に響かせる楽器演奏も練習時間は限られた。

集えど騒がず、を静かに共有する稽古は身分を隠す浪士たちのよう。出演者最高齢の小谷野桂子さん（84）＝静岡市葵区＝は「舞台を横切るだけでもいいから芝居をしたい、という思いで参加した。意識の高い人たちの創作は、演劇は再開できるというメッセージにもなるのでは」と願う。

舞台は公演の延期に追い込まれた出演者たちの物語を並行させる新たな演出が加わった。忠臣蔵の設定を借りて演劇人の今を提示し、誰もが結論を知るドラマに新鮮な後味を残す。

思いもしなかった運命に直面し、初めてわき上がる議論、衝突、対立。平田は「演劇人はこの1年、立ち向かう、立ち向かえないという議論を戯曲の中と同じように繰り返してきた。初演から20年以上を経て、演劇の原点を見る思い」と言葉に実感を込めた。

（文化生活部・宮城徹）

「時代を経てさまざまな演出で演じてもらえることは劇作家の喜び」と語る平田オリザ＝静岡市駿河区の舞台芸術公園

予算

静岡県文化プログラム推進委員会の収支は以下のとおり　※2021年10月末現在

収入の部

（単位：円）

区分	2017年度決算	2018年度決算	2019年度決算	2020年度決算	2021年度見込	累計
静岡県負担金他	84,610,596	114,556,209	176,432,402	141,511,896	32,500,491	549,611,594
前年度繰越金	－	1,985,637	12,054,441	37,884,601	73,906,493	－
計	84,610,596	116,541,846	188,486,843	179,396,497	106,406,984	－

支出の部

（単位：円）

区分	2017年度決算	2018年度決算	2019年度決算	2020年度決算	2021年度見込	累計
プログラム推進費	34,650,071	55,511,590	78,075,861	56,456,137	34,861,000	259,554,659
文化プログラム広報費	14,572,677	13,850,114	37,205,791	22,063,484	26,702,000	114,394,066
活動費	15,783,107	26,306,202	24,991,583	19,208,557	2,948,000	89,237,449
推進委員会・事務局運営費	17,619,104	8,819,499	10,329,007	7,761,826	3,752,000	48,281,436
計	82,624,959	104,487,405	150,602,242	105,490,004	68,263,000	511,467,610
繰越金	1,985,637	12,054,441	37,884,601	73,906,493	－	－
残額（県に返還）	－	－	－	－	38,143,984	38,143,984
合計	84,610,596	116,541,846	188,486,843	179,396,497	106,406,984	549,611,594

（参考）2015・2016年度は県が直接予算を執行

（単位：千円）

区分	内容	2015年度決算	2016年度決算	累計
オリンピック文化プログラム推進事業費	基本方針、テーマの決定、推進体制の整備等	8,952	10,846	19,798
オリンピック文化プログラム展開事業費	モデルプログラム共催及び実践的専門家による支援	－	36,117	36,117
計		8,952	46,963	55,915

静岡県文化プログラム成果報告書　2015-2021

2021 年 12 月発行

発　行　静岡県文化プログラム推進委員会
（事務局：静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化政策課）
〒420-8601　静岡県静岡市葵区追手町 9-6
TEL:(054)221-2252

印刷・製本　星光社印刷株式会社

静岡県文化プログラム推進委員会